

や なが ぱる

弥永原 8

— 弥永原遺跡第11次調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1324集

2017

福岡市教育委員会

や なが ぱる

弥永原 8

— 弥永原遺跡第11次調査の報告 —

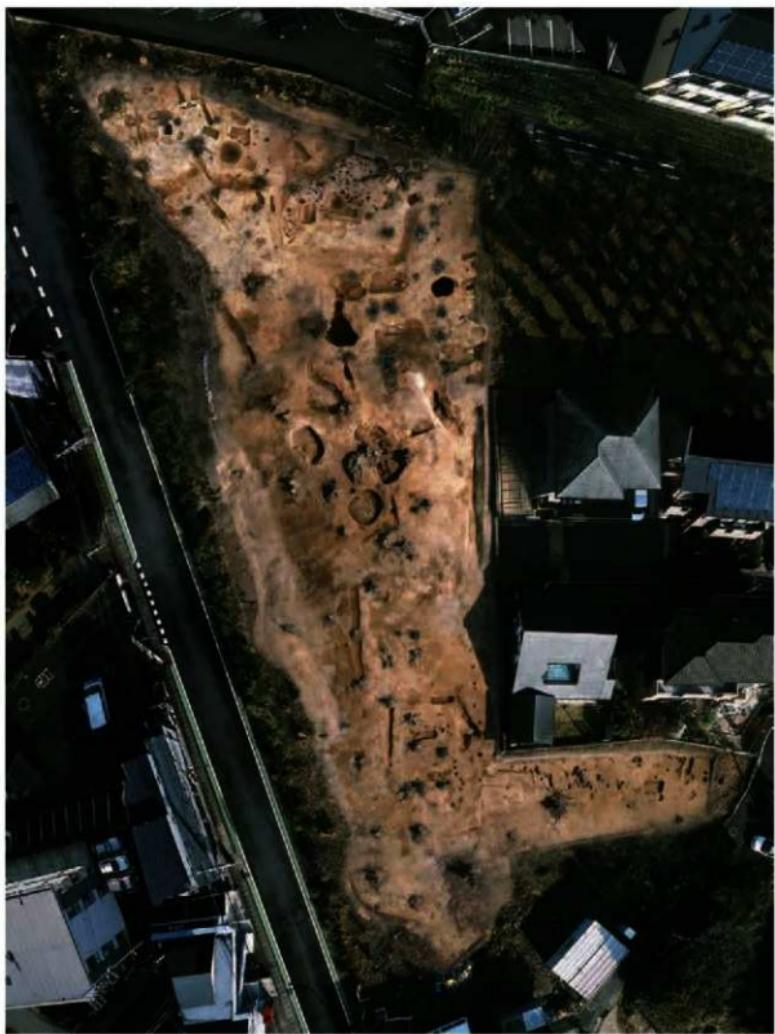
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1324集



調査番号 1436
遺跡記号 YNB-11

2017
福岡市教育委員会

題字は、福岡市東区青葉在住の松下さゆり氏の揮毫による



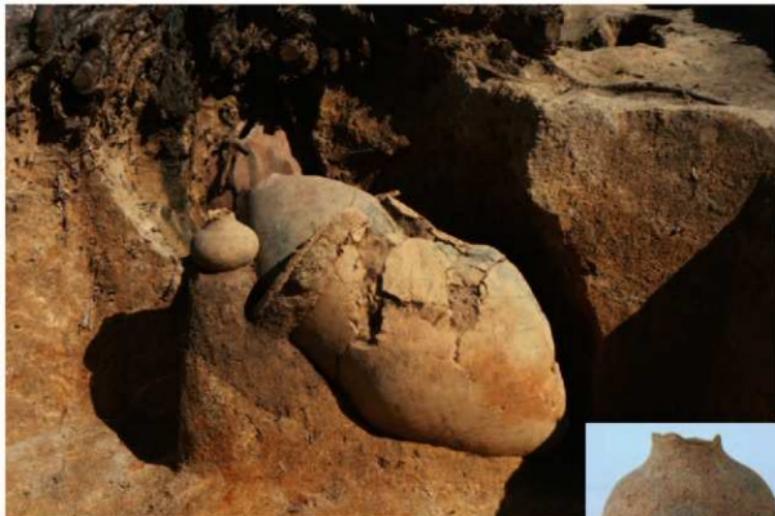
調査区全景（南から）



1) 13号貯蔵穴中層遺物出土状況（北から）



2) 13号貯蔵穴断面（北から）



1) 27号斐棺墓（北から）

2) 27号斐棺墓副葬小壺



3) 46号斐棺墓（南から）

4) 46号斐棺墓副葬小壺

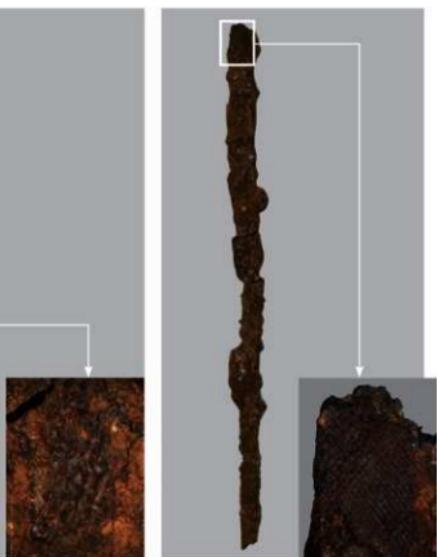




1) 30・31号土壤墓（北から）



2) 31号土壤墓副葬鉄斧



3) 31号土壤墓副葬鉄斧付蓋有目痕

4) 31号土壤墓副葬鉄斎
5) 31号土壤墓副葬鉄斎付蓋有目痕

序

はるか二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、二十一世紀のアジアに開かれた都市として、更なる発展を目指しさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、南区曰佐三丁目における分譲住宅の造成工事に先立って実施した弥永原遺跡第11次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、弥生時代の竪穴住居と貯蔵穴群と甕棺墓や土壙墓のほか方形周溝墓からなる墳墓群が発見されました。曰佐丘陵の北端に立地する弥生時代の集落跡や墳墓群の発見は、曰佐丘陵に拡がる弥生時代の集落域と墳墓群の消長を知る上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんには広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成29年3月27日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

.....れ い づ ん.....

1. 本書は、福岡市経済観光文化局が分譲住宅造成工事に先立って、平成26（2014）年12月15日～平成27（2015）年8月18日に、福岡市南区日佐3丁目地内で緊急発掘調査した弥永原遺跡第11次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位は、すべて磁北方位である。
3. 本書に掲載した遺構の実測は小林義彦・朝岡俊也・松崎友理・山本晃平・中園将洋のはかに埋蔵文化財課諸氏が作成し、遺物の実測と製図は谷直子の協力を得て小林が作成したが打製石器の実測と製図は山口潔治と山口栄美が行った。
4. 本書に掲載した遺構の写真是小林・朝岡・松崎のはかに埋蔵文化財課の池田祐司・細石脇希が、遺物の写真是、小林が撮影した。
5. 本書の執筆は小林が、編集は小林と谷直子が行った。
6. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号： 1436	遺跡番号： YNB-11	分布地図番号： 26-1015
調査地図： 福岡市南区日佐3丁目1234番		
工事面積： 1900m ²	調査対象面積： 1900m ²	調査実施面積： 1560m ²
調査期間： 2014年12月15日～2015年8月18日		

本文目次

序	
I. はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織	1
3. 立地と歴史的環境	3
II. 調査の記録	7
1. 調査の概要	7
2. 弥生時代の調査	10
1) 墅穴住居	10
2) 貯蔵穴	12
3) 銀棺墓	18
4) 土壙墓	33
5) 土坑	45
6) 溝	50
3. 古墳時代の調査	50
1) 方形周溝墓	53
2) 古墳	53
3) 土壙墓	61
4) 土坑	63
5) 溝	63
4. 包含層出土の遺物	63
5. おわりに	63

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
Fig. 2 弥永原遺跡周辺の旧地形図 (1/20,000)	3
Fig. 3 弥永原遺跡調査区位置図 (1/6,000)	4
Fig. 4 弥永原遺跡第11次調査区位置図 (1/2,000)	5
Fig. 5 第11次調査区現況測量図 (1/500)	6
Fig. 6 遺構配置図 (1/300)	8・9
Fig. 7 弥生時代の遺構配置図 (1/600)	10
Fig. 8 77・131号住居実測図 (1/80)	11
Fig. 9 80号住居実測図 (1/80)	11
Fig. 10 74・76・79号住居実測図 (1/80)	12
Fig. 11 7号貯蔵穴実測図 (1/60)	13

Fig.12	7号貯蔵穴出土遺物実測図（1/3・1/4）	14
Fig.13	13号貯蔵穴実測図（1/60）	15
Fig.14	13号貯蔵穴出土遺物実測図（1/3・1/4・1/8）	16
Fig.15	14・60号貯蔵穴実測図（1/60）	17
Fig.16	111号貯蔵穴実測図（1/60）	18
Fig.17	111号貯蔵穴出土遺物実測図（1/1・1/3・1/4）	19
Fig.18	115・130号貯蔵穴実測図（1/60）	19
Fig.19	120・126～129号貯蔵穴実測図（1/60）	20
Fig.20	126号貯蔵穴出土遺物実測図（1/4）	21
Fig.21	128号貯蔵穴出土遺物実測図（1/4）	22
Fig.22	5・6・15号壺棺墓実測図（1/30）	23
Fig.23	5・6・15号壺棺墓実測図（1/10）	24
Fig.24	6号壺棺墓副葬小壺実測図（1/4）	25
Fig.25	16・18・22号壺棺墓実測図（1/30）	26
Fig.26	16・18・22号壺棺墓実測図（1/10）	27
Fig.27	23・24・25・27号壺棺墓実測図（1/30）	28
Fig.28	23・24・25・27号壺棺墓実測図（1/10）	29
Fig.29	27号壺棺墓副葬小壺実測図（1/4）	30
Fig.30	42・44号壺棺墓実測図（1/30）	31
Fig.31	42・44号壺棺墓実測図（1/10）	32
Fig.32	46・51号壺棺墓実測図（1/30）	33
Fig.33	46・51号壺棺墓実測図（1/10）	33
Fig.34	46号壺棺墓副葬小壺実測図（1/4）	34
Fig.35	12・17号土壤墓実測図（1/30）	35
Fig.36	21号土壤墓実測図（1/30）	36
Fig.37	30・31号土壤墓実測図（1/30）	37
Fig.38	30・31号土壤墓出土遺物実測図（1/3）	37
Fig.39	33・34・35号土壤墓実測図（1/30）	38
Fig.40	35号土壤墓出土遺物実測図（1/1）	38
Fig.41	36・37・43・47・48号土壤墓実測図（1/30）	39
Fig.42	43号土壤墓出土遺物実測図（1/4）	40
Fig.43	49・50・55号土壤墓実測図（1/30）	41
Fig.44	58・59号土壤墓実測図（1/30）	42
Fig.45	65・66・69・88号土壤墓実測図（1/30）	43
Fig.46	71号土壤墓実測図（1/30）	44
Fig.47	71号土壤墓出土遺物実測図（1/3）	44
Fig.48	9・10号土坑実測図（1/40）	46
Fig.49	9・11号土坑出土遺物実測図（1/3）	47

Fig.50	10号土坑出土遺物実測図1 (1/4)	48
Fig.51	10号土坑出土遺物実測図2 (1/1・1/3・1/4)	49
Fig.52	11号土坑実測図 (1/40)	50
Fig.53	45号土坑実測図 (1/50)	50
Fig.54	54号土坑実測図 (1/50)	50
Fig.55	54号土坑出土遺物実測図 (1/3・1/4)	51
Fig.56	64号土坑実測図 (1/50)	51
Fig.57	64号土坑出土遺物実測図 (1/1・1/3)	51
Fig.58	78号土坑実測図 (1/30)	52
Fig.59	78号土坑出土遺物実測図 (1/4)	52
Fig.60	121号土坑実測図 (1/60)	52
Fig.61	121号土坑出土遺物実測図 (1/4)	52
Fig.62	32号溝断面実測図 (1/30)	52
Fig.63	52号溝出土遺物実測図 (1/3)	52
Fig.64	古墳時代の構造配置図 (1/600)	53
Fig.65	20号方形周溝墓実測図 (1/120)	54
Fig.66	20号方形周溝墓主体部実測図 (1/30)	54
Fig.67	20号方形周溝墓出土遺物実測図 (1/1・1/4)	55
Fig.68	63号方形周溝墓実測図 (1/80)	55
Fig.69	63号方形周溝墓主体部実測図 (1/30)	56
Fig.70	63号方形周溝墓出土遺物実測図 (1/3)	56
Fig.71	3号墳現況測量図 (1/200)	57
Fig.72	3号墳地山整形測量図 (1/200)	57
Fig.73	3号墳土層断面実測図 (1/60)	58・59
Fig.74	40号墳現況測量図 (1/200)	58
Fig.75	40号墳地山整形測量図 (1/200)	59
Fig.76	40号墳主体部実測図 (1/1・0)	60
Fig.77	40号墳出土遺物実測図 (1/2・1/3)	60
Fig.78	72号土壤墓・73号土坑実測図 (1/30)	61
Fig.79	72号土壤墓出土遺物実測図 (1/2)	61
Fig.80	19・38号土坑実測図 (1/50)	61
Fig.81	29・116号溝断面実測図 (1/30)	61
Fig.82	包含層出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/3)	62
Fig.83	甕棺墓変遷図	64

表 目 次

Tab. 1	弥永原遺跡調査一覧	7
Tab. 2	甕棺墓一覧表	30
Tab. 3	土壤墓一覧表	45

写真目次

- 卷頭PL. 1 調査区全景（南から）
- 卷頭PL. 2 1) 13号貯藏穴中層遺物出土状況（北から） 2) 13号貯藏穴断面（北から）
- 卷頭PL. 3 1) 27号甕棺墓（北から） 2) 27号甕棺墓副葬小壺
- 3) 46号甕棺墓（西から） 4) 46号甕棺墓副葬
- 卷頭PL. 4 1) 30・31号土壙墓（北から） 2) 31号土壙墓副葬鉄斧
- 3) 31号土壙墓副葬鉄斧付着布目痕 4) 31号土壙墓副葬鉈
- PL. 1 1) 調査前全景（南から） 2) 調査区南東部住居群（南から）
- 3) 74・76・77・79・131号住居（南から）
- PL. 2 1) 80号住居・72号土壙墓（南から） 2) 7号貯藏穴（北から）
- 3) 111号貯藏穴検出状況（南から）
- PL. 3 1) 115号貯藏穴（南から） 2) 115号貯藏穴断面（西から）
- 3) 126～128号貯藏穴（東から）
- PL. 4 1) 5号甕棺墓（北から） 2) 6号甕棺墓（北西から）
- 3) 16号甕棺墓（南から）
- PL. 5 1) 23号甕棺墓・37号土壙墓（北から） 2) 24号甕棺墓（南から）
- 3) 25号甕棺墓（東から）
- PL. 6 1) 27・46号甕棺墓（北から） 2) 42号甕棺墓（南から）
- 3) 44・51号甕棺墓（南東から）
- PL. 7 1) 12号土壙墓（北から） 2) 17号土壙墓（北から）
- 3) 21号土壙墓（南西から）
- PL. 8 1) 33・34号土壙墓（北から） 2) 35号土壙墓（東から）
- 3) 35号土壙墓遺物出土状況（東から）
- PL. 9 1) 36号土壙墓（北から） 2) 47・48号土壙墓（東から）
- 3) 49号土壙墓（東から）
- PL. 10 1) 55号土壙墓（南から） 2) 71号土壙墓（東から）
- 3) 71号土壙墓副葬遺物出土状況（南から）
- PL. 11 1) 9・10号土坑（東から） 2) 54号土坑（南から）
- 3) 78号土坑（東から）
- PL. 12 1) 20号方形周溝墓（北から） 2) 20号方形周溝墓主体部（南から）
- 3) 20号方形周溝墓主体部完掘状況（南から）
- PL. 13 1) 20号方形周溝墓南周遺物出土状況（北から）
- 2) 63号方形周溝墓（南から） 3) 63号方形周溝墓主体部（西から）
- PL. 14 1) 3号墳調査前全景（東から） 2) 3号墳地山整形全景（西から）
- 3) 3号墳主体部（東から）
- PL. 15 1) 40号墳調査前全景（東から） 2) 40号墳地山整形全景（北から）
- 3) 40号墳主体部（南から）
- PL. 16 出土遺物1（縮尺不同）
- PL. 17 出土遺物2（縮尺不同）
- PL. 18 出土遺物3（縮尺不同）
- PL. 19 出土遺物4（縮尺不同）
- PL. 20 出土遺物5（縮尺不同）

I. はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

弥永原遺跡は、福岡平野南西端の福岡市南区日佐に位置し、昭和30年代までは農業を基盤とする村落が点在する田園地帯であった。しかし、高度経済成長期の昭和40年代以降は、山陽新幹線の開通に伴うインフラ整備の進行で市街化が急速に進み、往年の田園風景は次第に失われつつある。

この弥永原遺跡は、福岡平野の西縁を北流する那珂川の氾濫と開析によって形成された沖積平野の中にある、那珂川の右岸に沿って観音山の小山塊から派生した中位段丘の北端に立地している。

平成25（2013）年12月20日に南区日佐三丁目123-1において分譲住宅の開発が計画され、遺跡の存否確認の照会が埋蔵文化財審査課（現埋蔵文化財課）に提出された。照会地は、弥永原遺跡として周知された埋蔵文化財の包蔵地内にある。現況は山林で、旧地形が明らかに残っていることから平成26（2014）年1月21日と7月5日の2度に亘って確認調査と踏査を実施したところ、古墳と集落に伴う柱穴や溝を検出した。照会地は、全面が切り土による造成であるために調査対象範囲を1,950m²として記録保存にむけた協議を行った。

当初発掘調査は、平成26（2014）年9月に着手の予定で協議されたが、開発申請の遅延から平成26（2014）年12月15日に開始し、弥生時代前期後半から中期初めの貯蔵穴や土壙墓、甕棺墓、中期後半の竪穴住居、後期の土壙墓のほかに古墳時代の方形周溝墓や円墳、土坑など事前の予測を遙かに越える多種多様な遺構を検出して平成27（2015）年8月18日に無事終了した。この間に、調査担当者の体調不良から一時調査の中断を余儀なくされたが、池田祐司主任文化財主事をはじめとする埋蔵文化財調査課職員諸氏が一致協力して調査に当たり、調査行程の進捗を図っていただいた。これらの成果は、株式会社サン・プラザホーム様のご理解と協力、指導、助言を頂いた埋蔵文化財調査課諸氏および秋冬から酷暑の夏まで発掘作業に従事された方々の労苦に負うところが大きい。ここに記して感謝の意を表します。なお、発掘調査は、受託事業として実施した。

2. 発掘調査の組織

調査委託 株式会社 サン・プラザホーム

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財調査課（現埋蔵文化財課）課長 常松幹雄（26・27・28年度）

同課調査第1係長 吉武 学（26・27・28年度）

調査庶務 埋蔵文化財審査課（現埋蔵文化財課）管理係 横田 忍（26・27・28年度）

調査担当 埋蔵文化財調査課（現埋蔵文化財課）調査第1係 小林義彦（26・27・28年度）

朝岡俊也 松崎友理 山本晃平 中園将洋（27年度）

技能員 谷 直子

調査・整理作業 石川洋子 伊藤美伸 浦崎てい子 木田恵作 木田ひろ子 坂梨美紀 鈴木智子

瀬戸裕子 高瀬美智子 田中トミ子 田中朋香 田中ゆみ子 知花繁代 遠山勉

土斐崎孝子 西田文子 濱フミコ 日高芳子 北條こず江 松下さゆり

増田ヒロ子 松田典子 水田正敏 水田ミヨ子 森田裕子 山本加奈子 渡部律子

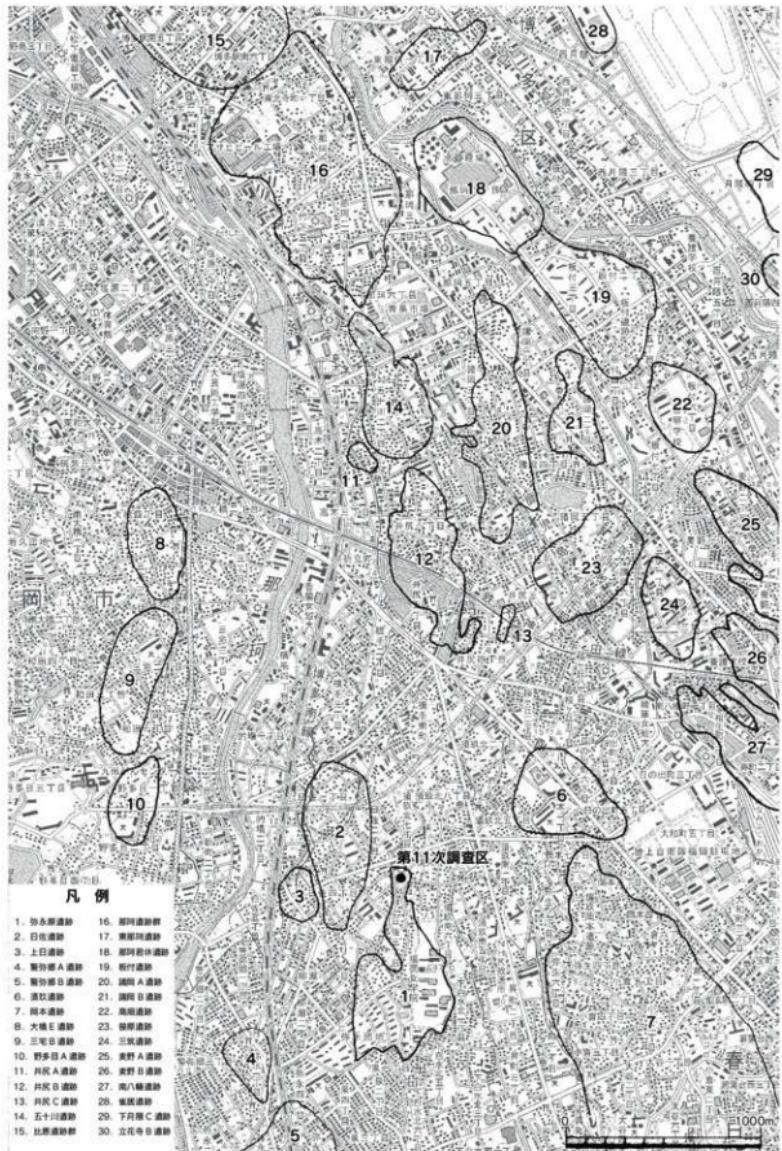


Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

3. 立地と歴史的環境

弥永原遺跡のある福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘にむかって開口する博多湾に面した沖積平野である。この福岡平野は、東は三郡山系より派生した四王寺山塊と月隈丘陵に、西は背振山系より派生した油山山塊によって開闢遮断され、平野の中央部には那珂川と御笠川が北流して博多湾に注ぎ込んでいる。この二つの河川によって博多湾に面した中流域から下流域には春日丘陵から低～中位段丘が伸び、その間に広大な三角州が形成されている。これらの段丘上には、須玖遺跡群や弥永原遺跡、井尻B遺跡、五十川遺跡、那珂遺跡群、比恵遺跡群が所在しており、弥生時代から中世の拠点的遺跡群で平野内において中心的役割を担ってきた遺跡群である。殊に、須玖遺跡群は、弥生時代の先進的な一大拠点集落として役割を担ってきた。

弥永原遺跡は、平野の西部を北流する那珂川の中流域の右岸に伸びる洪積台地上に所在し、開析谷を隔てた東には春日丘陵が伸びており、その丘陵や丘陵下の沖積地には須玖遺跡群と総称される広大な遺跡群が立地しており、弥生時代中期から後期の壇場墓をはじめとする墳墓遺構のほかにガラス製品や青銅器などを製造する生産関連遺構、青銅器埋納遺構などが濃密に分布している。殊に、紀元57年に後漢から「奴国王」の金印紫綬を与えられた「奴国」の中枢地域として機能した。一方、西には北から浅く湧入する開析谷を隔てて日佐遺跡がある。

須玖遺跡群の西に隣接する弥永原遺跡では、昭和33（1958）年の第1調査を嚆矢として今日まで13地点で発掘調査が実施されている。この弥永原遺跡の13次に亘る発掘調査を俯瞰的に観ると、福岡女子学院建設に伴って実施された第1次調査では、箱式石棺墓や石蓋土壙墓、壇場墓などからなる墳墓群が検出されている。このうちE群の15号石蓋土壙墓には内行花文鏡や玉類が、E群の7号箱式石棺墓には鐵斧や鐵刀、鐵錐、玉類が副葬されていた。第2次調査は、昭和34（1959）

年にガラス玉鋳型の不時発見に伴い昭和40（1965）年に実施され、不時発見のガラス玉鋳型は弥生時代後期の環壕から出土したものと推測された。同時に第1次調査地点の北で新たにガラス玉鋳型が後期の土器とともに出土しており、この一帯でガラス製品の製造が行われていたことを窺わせる証左となった。続いて昭和42（1967）年の第3次調査では、後期のV字溝と堅穴住居を確認し、後期の堅穴から小型仿製鏡が出土している。昭和63（1988）年の第4次調査や平成8（1996）年の第5次調査では、後期の堅穴住居や古墳時代後期の堅穴住居と溝が確認されている。第6次調査は、平成14（2002）年に実施され、中期後半から後期前半の壇場墓や土壙墓、石蓋土壙墓、箱式石棺墓などの墳墓が40基確認さ



Fig.2 弥永原遺跡周辺の旧地形図 (1/20,000)

れた。この6次調査で特筆すべきは、後期の甕棺墓や土壙墓、箱式石棺墓からは葬送儀礼に際して使われたと考えられる水銀朱が検出されている。また、同年の第7次調査では、後期の溝が検出されている。平成15（2003）年の第8次調査では、中期後半から古墳時代初めの堅穴住居と土坑が、平成18（2006）年の第9次の調査では、後期から終末の堅穴住居と土壙墓が、平成19（2007）年の第10次調査では、古墳時代前期の溝が検出されている。

第11次調査区は、この中位段丘上に立地する弥永原遺跡の北の沖積地にむかって傾斜していく最北端にあり、その北東隅に隣接する第12・13次調査区では、弥生前中期後半から中期初めの貯蔵穴や土壙墓と甕棺墓が検出された。この中位段丘の最北端が集落域や墳墓域として機能したことが明らかになり、古墳時代になども方形周溝墓や円墳などが築かれて墳墓域として連続として利用されている。

弥永原遺跡における弥生時代の遺構は、丘陵尾根上に環境を巡らす集落域が展開し、それを中心として墳墓遺構が拡がる傾向が窺える。しかしながら、墳墓域もその造営時期や埋葬施設に微妙な相違が窺える。

のことから、中心的尾根線から樹枝状に派生した小支丘毎に埋葬遺構群が形成された可能性が想起されよう。当然ながら、埋葬遺構群を形成した集落域が周辺域に拡がっていることも十分に予察される。

この後には、丘陵の基部に日押塚古墳や下白水大塚古墳などの前方後円墳が築かれ中心域の移動が窺える。

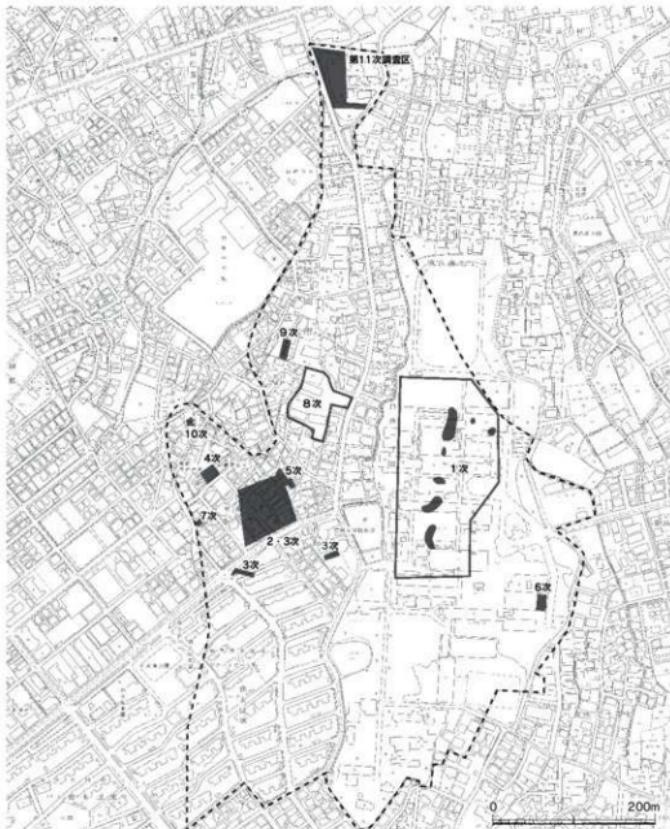


Fig.3 弥永原遺跡調査区位置図 (1 / 6,000)

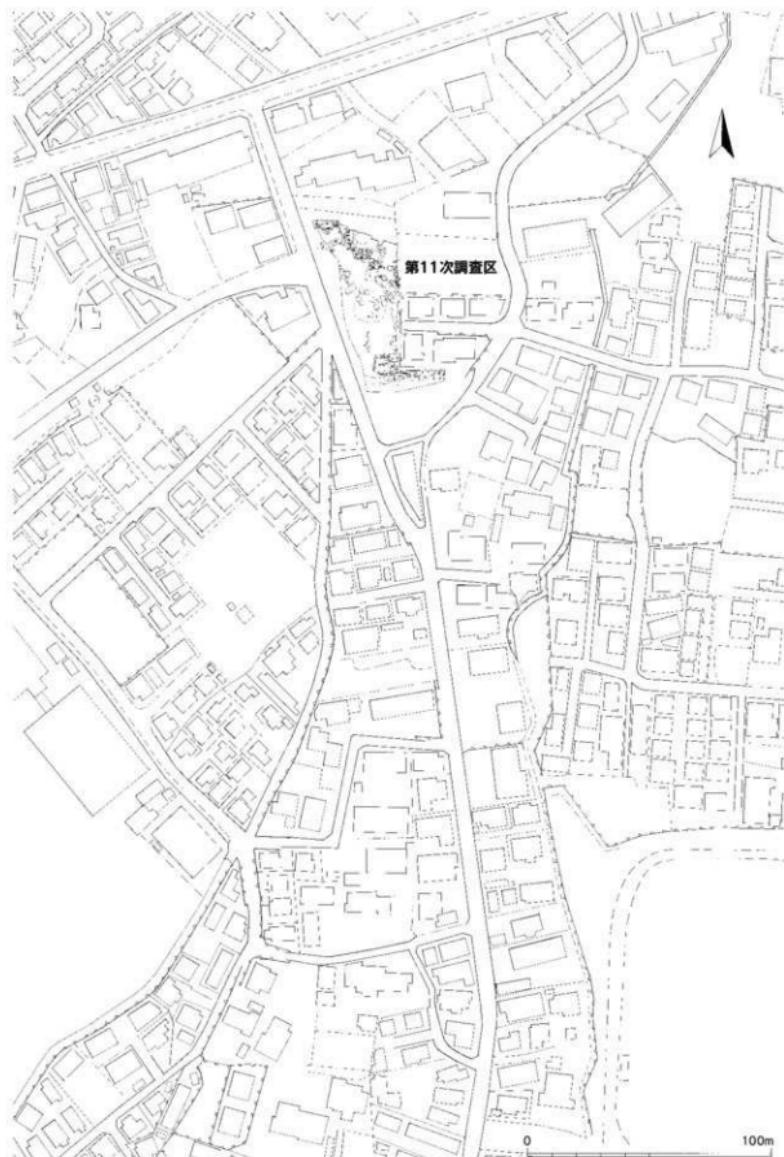


Fig.4 弥永原遺跡第11次調査区位置図 (1 / 2,000)



Fig.5 第11次調査区現況測量図 (1 / 500)

II. 調査の記録

1. 調査の概要

福岡平野の西部を北流する那珂川中流の右岸には、観音山の小山塊から派生する中位段丘があり幾つかの鞍部を形成しながら北にむかって細長く延びている。弥永原遺跡は、この段丘の北にある。第11次調査区は、この弥永原遺跡のもっとも北に位置している。第11次調査区では、弥生時代前期後半から後期の集落域を構成する遺構や墳墓群を構成する遺構と古墳時代初めから前期と後期の墳墓遺構のほかに集落域の一部を構成する多くの遺構を検出した。まず、弥生時代の集落遺構には前期後半の貯蔵穴15基と中期の竪穴住居3棟、後期の竪穴住居3棟のほかに土坑と溝などを検出した。このうち、竪穴住居は中期のものが円形、後期のものが方形のプランを呈する。一方、墳墓域は、前期後半から中期初めの土壙墓や木棺墓20基と中期の壇塚墓13基と後期の土壙墓3基がある。更に、古墳時代初め～前期には方形周溝墓2基と円墳2基の墳墓遺構と集落域の一部を構成する土坑2基がある。このうち北西端の尾根上に立地する40号墳は丘陵の尾根を溝で切断した直径が10m余の円墳で主体部の木棺墓内からは鉄剣先や刀子が出土した。

発掘調査は、平成26（2014）年12月15日から開始した。まず、発掘作業に先行して調査地内に散乱した伐採材の枝葉や不法投棄されたゴミなどの集積と清掃から始めた。同時に、並行して調査区の現況測量に年内を過ごした。新年を迎えた1月からは、早々に調査区全景の空中写真を撮影した後にパワーショベルを導入して表土層の除去作業を開始し、本格的な調査に着手した。調査は、調査区北側から始めたが⁵、大きな椎の木根などに制約されながら順次調査区を西へ拡げていった。その結果、事前には予想もされなかった甕棺墓や土壙墓のほかに貯蔵穴が次々と検出された。加えて甕棺墓などは、大木の根に巻き込まれて検出され、その抜根作業に多くの時間と労力を要した。発掘調査は、調査区全体を便利的に3区に分割して排土を移動と同時に表土層の除去作業を繰り返して実施に、その都度アドバルーンによる空中写真を撮影して最後にCGで合成した。また、遺構の実測は、南北に長い調査区の長辺に沿って10mを基準とした任意の方眼を設定し、更にその中に2mの小方眼を組み込み、西から東へa~b'、北から南へ1~35とした。南北の主軸ラインは、磁北から8°30' 東偏している。また、甕棺墓や土壙墓およびまとまった遺物の出土状況など重要なものは1/10で個別に実測した。

Tab.1 弥永原遺跡調査一覧表

番 号 次 数	調査 番号	所在地	調査面積 (m ²)	時 代	類 型	出土遺物	報告書	
1	5801	南区豊野郷	19580626~195807...	弥生後期	弥生：甕棺墓・石蓋石塚墓・箱式石棺墓	弥生土器・円筒花文鏡・ガラス冠玉彌月・鐵器		
2	6401	南区豊野郷字原	19650315~19650328	弥生後期	弥生：闊縫・竪穴住居	唐翌石斧・土師器・須恵器・瓦・繩	福岡県 32集	
3	6601	南区豊野郷字原	19661218~19670118	弥生中期後半~後期	弥生：闊縫・竪穴住居	弥生土器・彷彿鏡・石器		
4	8824	南区豊野郷1丁目127-3	19880704~19880716	230	弥生：溝・古墳	弥生：溝・古墳・竪穴住居	219	
5	9653	南区日佐3丁目88-1	19961126~19961227	321	弥生後期	弥生：竪穴住居・土坑・溝	604	
6	201	南区日佐3丁目42-1	20020401~20030517	234	弥生中期後半~後期前半	弥生：甕棺墓・土壙墓・石棺墓	弥生土器・ガラス玉・鐵器	K30
7	225	南区日佐1丁目121-3	20020625~20020702	56	弥生後期	弥生：溝	弥生土器・石器	1133
8	347	南区日佐3丁目79-1, 109-128	20030916~20030919	100	弥生中期後半~古墳期	弥生：竪穴住居・土坑	弥生土器	年報 Vol.18
9	603	南区日佐3丁目107, 112-1	20060403~20060428	339	弥生後期	弥生：竪穴住居・土壙墓	弥生土器	1014
10	727	南区日佐3丁目191-2	20070801~20070811	69	古墳期初期・中期	古墳：溝		1188
11	1436	南区日佐3丁目231-1, 124, 127-1	20141215~20150818	1,560	弥生前期~後期・古墳期・古墳期後半~後期・古代	弥生：竪穴住居・貯藏穴・甕棺墓・土壙墓・土坑・古墳：方形周溝墓・円墳・古代：土坑	弥生土器・土師器・鋤形土器・石製品・陶器	1324
12	1534	南区日佐3丁目126-1	20151207~20160106	81	弥生前期末~中期前半	弥生：切妻窓・甕棺墓	弥生土器	
13	1628	南区日佐3丁目126-1	20160926~20161206	338	弥生前期末	弥生：竪穴・甕棺墓・土壙墓	弥生土器	

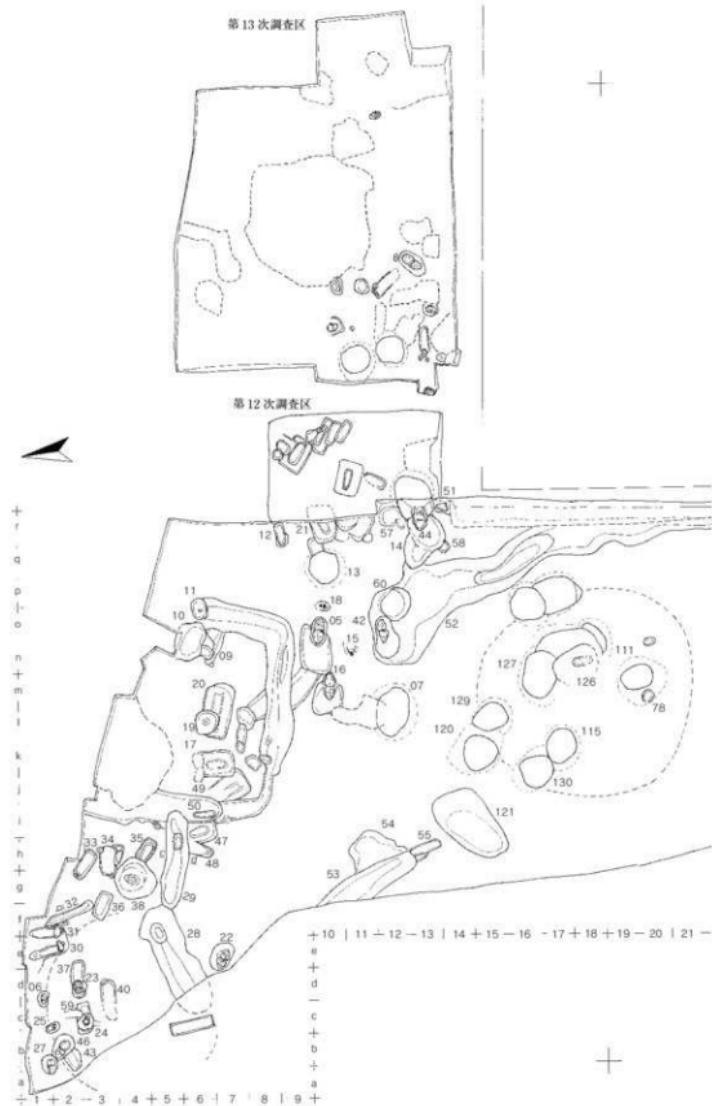
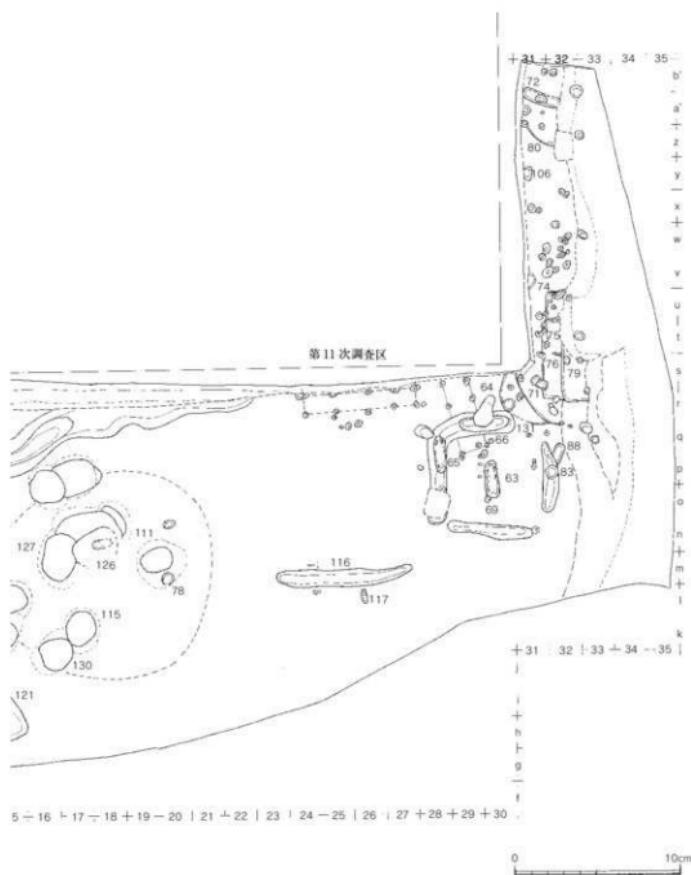


Fig.6 遺構配置図 (1 / 300)



2. 弥生時代の調査

弥生時代の遺構としては、竪穴住居、貯蔵穴、甕棺墓、土壙墓、土坑と溝など数多くの遺構を検出した。これらの遺構は、2度の確認調査では検出されておらず、これほどの遺構群が細い丘陵上に展開しているとは予測されていなかった。検出したこれらの遺構は、竪穴住居や貯蔵穴などの集落域を構成する遺構群と甕棺墓や土壙墓などの墓域を構成する遺構群とに大別される。これらの構成要素の異なる遺構群は、立地する丘陵の尾根を中心にして地形的な制約を受けながらもある一定の分布的傾向を示すことが窺える。

1) 竪穴住居 (SC)

77号住居 SC-77 (Fig8 PL. 1)

77号住居は、丘陵尾根が3号墳の墳頂から南へ緩やかに傾斜していく裾にある円形住居で、南半部は74・76号住居に削平されている。住居は、削平が著しく全容は判然としないが、直径が6mほどの円形プランをなす。壁高は、10~20cmで南側が低くなり、床面は、フラットで明瞭な貼床は確認できなかった。柱穴は71号土壙墓の下にあるP2を含めて3本 (P1~P3) が確認され、柱間は18mであることから6本柱と推考される。覆土は、黒色を帯びた暗茶褐色土の單一層で、弥生土器の壺片がわずかに出土した。

80号住居 SC-80

(Fig9 PL. 1・2)

80号住居は、調査区東南端の緩斜面上に位置する円形住居で南北壁の一部を残して北は調査区外に、南は削平を受けて消失している。住居の中央部には、72号土壙墓が掘り込まれている。現状からすると直径は6.5~7mに復原されようか。柱穴は、P1~P6のうち4本が検出され、柱間スパンを1.4~1.5m間隔で壁面に沿いながら円形に配されている。床面は、壁下から1mを残して削平されており、貼床は確認できなかった。遺物は、弥生土器片がわずかに出土した。

131号住居 SC-131

(Fig8 PL. 1)

131号住居は、調査区の南縁にある円形住居で、南半部は77号住居があるが削平が著しくその先後関係は判然としない。北西には63号方形周溝墓がある。住居は、やや大きく直径が8mほどの円形プランをなそう。

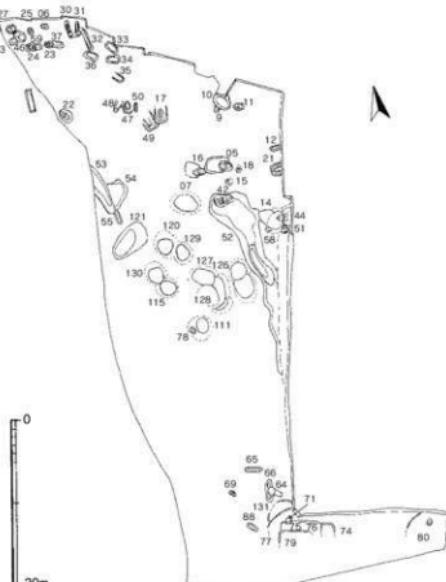


Fig.7 弥生時代の遺構配置図 (1/600)

壁高は、10cmで南側が低くなり、床面は、南側が削平によって緩傾斜しており、貼床は確認できなかった。柱穴はP4～P6の3本が確認され、柱間は2mであることから6本か8本柱と考えられる。覆土は、暗茶褐色土の單一層で、遺物は未検出。

74号住居 SC-74 (Fig.10 PL. 1)

74号住居は、丘陵尾根が南へ緩やかに傾斜していく裾にある方形住居で、北東隔壁を残して西壁は76・79号住居に、南半部は近世の開削によって大きく削平されている。壁高は、北壁が40cm、東壁が25～30cmで、床面は、フラットで5～7cmの厚さに黄褐色粘土ブロックを堅く敷き詰めて貼床をしている。壁下には周溝は巡っていない。覆土は、濃茶褐色土で、遺物は未検出。

76号住居 SC-76 (Fig.10 PL. 1)

76号住居は、南北の丘陵尾根が南へ緩やかに傾斜していく裾部にあり、北壁は77号住居を切り、南壁は79号住居に切られている。平面形は、北壁長が4.85mであることから一辺が4.8～5mの方形プランをなそう。壁高は、35～45cmで、フラットな床面には黄褐色粘土ブロックを3～5cmの厚さに突き固めて貼床としている。北壁下と東壁下には幅が10cm、深さが10cmの周溝は巡っているが、主柱穴は確認できなかった。覆土は、濃～暗茶褐色土で、覆土からは弥生土器の壺や甕がわずかに出土した。

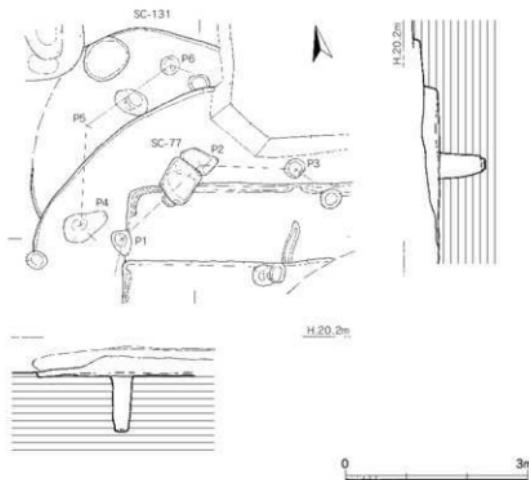


Fig.8 77・131号住居実測図(1/80)

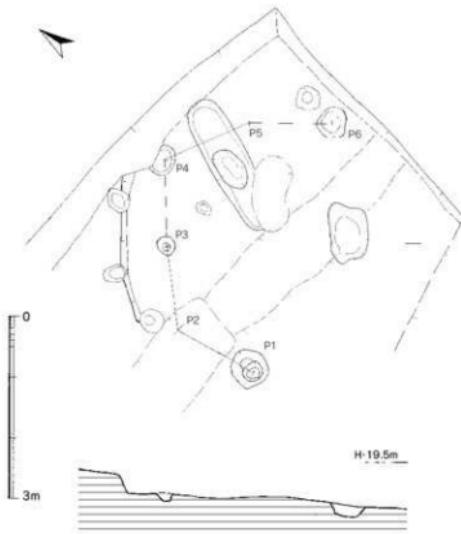


Fig.9 80号住居実測図(1/80)

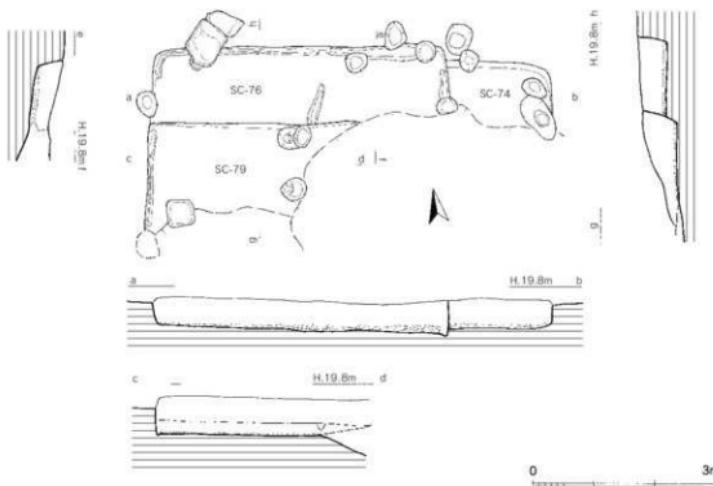


Fig.10 74・76・79号住居実測図 (1/80)

79号住居 SC-79 (Fig.10 PL. 1)

79号住居は、南北の丘陵尾根が南へ緩やかに傾斜していく裾部にあり、北壁は76号住居を切っている。平面形は、南壁と東壁の大半が開削によって消失しているが、一辺が4mほどの方形プランをなそう。壁高は、35cmで床面には厚さが2~3cmの黄褐色粘土ブロックを堅く敷き詰めて貼床をしている。壁下には周溝は巡っておらず、主柱穴は確認できなかった。覆土は、濃~暗茶褐色土で、覆土中からは弥生土器片がわずかに出土した。

2) 貯蔵穴 (SU)

7号貯蔵穴 SU-07 (Fig.11-12 PL.2・16)

7号貯蔵穴は、南北に延びる丘陵尾根の頂部が北にむかって傾斜してゆく斜面の上縁にあり、北壁は搅乱坑によって大きく削平されている。平面形は、東西長が310cm、南北長が200cmほどの楕円形プランを呈す。床面は、300cm×400cmの楕円形をなす。壁面は、入り口から100cmほど垂直に掘り込んだ後に大きくフラスコ状に膨らみ、床面より70~90cmで屈曲面を作つて床面へと窄まる。深さは、概ね250~280cmほどであるが半截時に崩落して図化できなかった。遺物は、床面から中層で弥生前期後半の壺が出土したほかに上層からも同期の壺や甕と紡錘車が出土した。

1~4は、壺。1は、口径が15.3cm。口縁部は、直口ぎみに立ち上がる頸部から大きくストレートに外反する。胴部は、肩の張った偏球形で頸部との境に三角凸帯1条を肩部にコ字凸帯1条を貼り巡らせている。2は、底径が10cmで形状や胎土から1と同一個体と考えられる。3は、口径が9.9cm、底径が6.2cm、器高が22.3cm。口縁部は、内傾する頸部から短く彎曲し、内唇に緩やかな稜を作る。胴部は、肩の張った偏球形で頸部との境には摘み出した小さな三角凸帯が巡る。口縁部から凸帯がヨコナデ、内面は押圧ナデ、外面は丁寧なナデ。胎土には、細~中砂粒と雲母を含む。外面は淡黄橙~橙色。内面はくすんだ淡黄灰褐色。5・6は、甕。5は、口径が23cm、器高は20.6cm。口縁部は大

きく外反し、胴部は倒卵形をなす。7.8cmの底部は、高台状をなす。胴部内面には、炭化物様の付着物がある。6は、底径が7.4cmで円孔がある。7は、4.17~4.26cm径の紡錘車。孔径は0.55cm、厚さは0.4~0.43cm。重さは14.5g。緑泥変岩。

13号貯蔵穴 SU-13 (Fig.13-14 卷頭PL.2・PL.16)

13号貯蔵穴は、調査区北斜面上縁の北東部にあり、すぐ東には21号土壙墓、西には18号甕棺墓がある。入口の平面形は、長辺が210cm、短辺が180cmの不整な楕円形プランを呈する。壁面は、南壁が南奥へ220cm、深さが220cmまで直線的に斜行した後に屈曲して50cmほど垂直に下る。東から西の三壁は小さく内傾して床面に至る。床面は、凹レンズ状に窪み、東壁際には、長辺が190cm、短辺が105cm、深さが140cmの2段掘りの小土坑が掘り込まれている。深さは315cm、標高は19.0m。遺物は、中層や下層から弥生土器の壺や甕がまとまって出土した。

8~11は、中層出土の壺。8は、口径が44.6cmの大型壺。口縁部は、内傾して立ち上がる頸部から短く外反し、上唇に粘土紐を貼付けて内唇にシャープな稜を作る。外唇は、中央が凹線状に浅く窪み、上下端にヘラ描きに刻み目を施している。淡明橙色。9は、底径が9.2cmの中型壺。胴部は、肩の張った球形で頸部は緩やかに屈曲して内傾する。胴部外面は、ヘラ先工具による研磨状のナデ。淡黄橙色~淡明赤橙色。10は、底径が10.2cmで淡黄橙色~淡黄白色。11は、底径が7.9cmで濃橙色。13~16は下層、12は最下層出土壺。13は、口径が12cm、底径が6cm、器高は22.6cm。口縁部は、緩やかに外擣する頸部から緩やかに外反し、頸部との境には緩やかな段状の稜を作る。胴部は、球形で頸部の境にはヘラ工具による凹線が巡る。胎土には、細~小砂粒を含み、淡黄橙色。15は、底径が9.5cmの中型壺。16は、底径が6.4cmの小型壺で底部は円盤貼付。12は、底径が7.2cmの小型壺。頸部は、偏球形の胴部から緩やかに屈曲して内傾し、その境には4条の細いヘラ描きの凹線を巡らせている。底部は、円盤貼付で胴部外面は押圧後に丁寧な研磨状のナデ調整。淡黄橙色。17~22は、中層出土の甕。17は、口径が20cm、底径が7.4cm、器高が21.6cm。口縁部は、短く「く」字状に外反し、外唇にはヘラ描きの刻み目を巡らしている。胴部は、短い砲弾形で口縁部下には1条のヘラ描きの凹線が巡る。底部には1cm径の円孔を焼成後に穿ち、蓋として転用か。内面には炭化物様の黒色物が付着している。18は、口径が27.5cm。口縁部は、如意状に外反し、外唇の下端にヘラ描きの刻み目を巡らす。一方、口縁部への屈曲面上には1条の三角凸帯を貼付けて刻み目を施している。19は、底径が6.4cmで中央に1cm径の円孔を外面から穿っている。23~25は、下層出土の甕底部。23は、底径が7.8cmで焼成後に1.2cm径の円孔を穿っている。内底面には炭化物様の淡黒色付着物がある。25は、底径が8.8cmの台付甕。端部は水平に摘み出し、胴部への変換点まで4cmの高さがある。胎土は、精良で赤橙色。26は、口径が18.6cm、底径が6.4cm、器高が12.1cmの鉢。口縁部は、玉葱状の半球形の胴部から短く「く」字状に外反する。口縁部はヨコナデ、胴部は押圧後にナデ。胎土は粗く、底部には2次被熱による赤変がある。27は、下層出土の凝灰岩質石庵丁片。

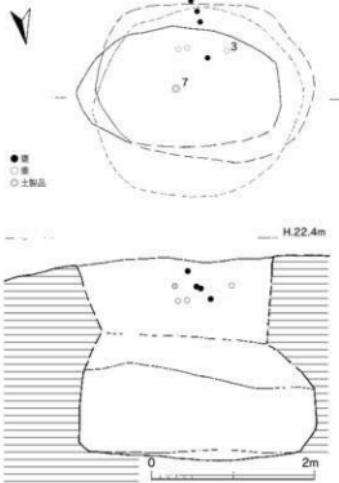


Fig.11 7号貯蔵穴実測図 (1/60)

14号貯蔵穴 SU-14 (Fig.15 PL.3·4·15)

14号貯蔵穴は、調査区の北東端に位置し、東壁は第12次調査区の4号貯蔵穴に削平されている。加えて両貯蔵穴は、44号壺棺墓が掘り込まれるために平面形は不確実である。フラットな床面は、直径が170~200cmの円形プランをなし、削平を受けて深さは84cmと浅い。標高は21.26m。遺物は未検出。

60号貯蔵穴 SU-60 (Fig.15)

60号貯蔵穴は、調査区の北東部にある小型の貯蔵穴で、上面には42号壺棺墓が掘り込まれている。入口の平面形は、長辺が205cm、短辺が160cmの楕円形プランを呈する。壁面は、北壁が50cmほど北へむかってフラスコ状に内側するほかは緩やかにしながら床面に至り、東壁際には床面から20cm以上に小さなフラット面を作る。床面は平坦で深さは178cm、標高は10.06cm。遺物は、弥生土器の壺や壺片がわずかに出土した。

111号貯蔵穴 SU-111 (Fig.16·17 PL.2)

111号貯蔵穴は、調査区の中央に位置する3号墳の南墳丘下にあり、上縁には7号土坑が掘り込まれている。入口の平面形は、直径が300cmの不整な楕円形を呈する。壁面は、70~100cmの深さまで小さくフラスコ状に内側した後に緩やかに窄まり、一部に段状面を作つて床面に至る。床面はフラットで西壁際には長さが70cm、幅が30cm、深さが15cmの楕円形の小ピットがある。機能的には、出入りの梯子段を支えた可能性も否定できない。検出面からの深さは275cmで、床面の標高は19.15m。遺物は、壺や石庖丁片がわずかに出土した。

28は、押圧剥離加工の柳葉形尖頭器。先端と基部の一部を欠く。安山岩。30は、底径が8cmの壺。

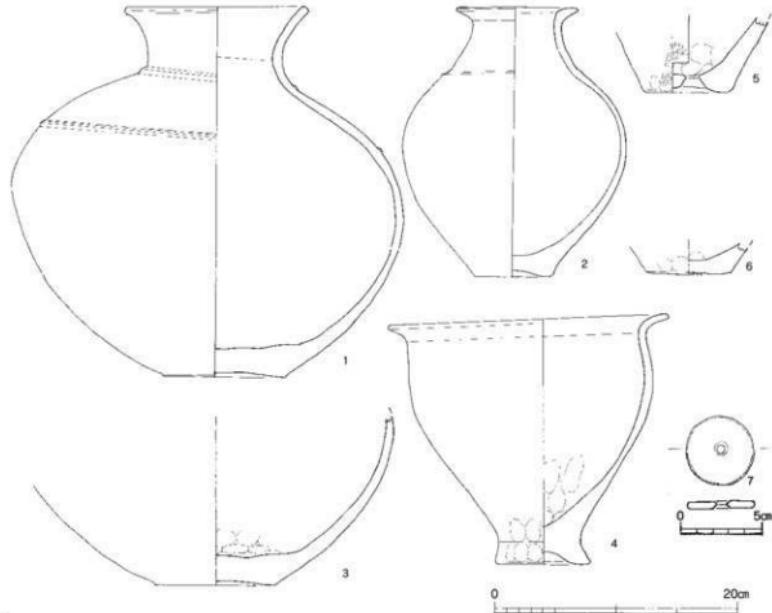


Fig.12 7号貯蔵穴出土遺物実測図 (1/3 · 1/4)

胎土はやや粗く、中砂粒を含む。橙褐色。29は、半月形をした安山岩質凝灰岩の石庵丁片。身幅は5.05cm、厚さは0.25~0.35cm。背下1.7cmに孔径が0.4cmの円孔を穿つ。

115号貯蔵穴 SU-115 (Fig.18 PL3・4・15)

115号貯蔵穴は、3号墳の西墳丘下に位置し、北西壁は、130号貯蔵穴の南東壁に削平されている。入口の平面形は、直径が170~235cmほどの不整な楕円形プランを呈する。壁面は、垂直に下った後に緩やかにフラスコ状に内彎して床面に至る。床面は、やや深い凹レンズ状をなし、南西壁隅に直径が45cm、深さが25cmの小ピットがある。出入りの梯子段を支えた柱穴の可能性が考えられる。遺物は未検出。

120号貯蔵穴 SU-120 (Fig.19)

120号貯蔵穴は、3号墳の北西墳丘下にあり、すぐ南には130号貯蔵穴、東には129号貯蔵穴が位置し、東壁は129号貯蔵穴の西壁を切っている。入口部の平面形は、直径が190~210cmの不整な円形プランをなす。壁面は、入口部から150~200cmまでは垂直に窄まり、そこで緩やかな屈曲面を造った後に西にむかって25~40cm斜めに掘り込んでいる。床面は、フラットであるが中央が10cmほど丸く窪んでいる。330cmで標高は18.88m。遺物は弥生土器甕片がわずかに出土した。

126号貯蔵穴 SU-126

(Fig.19-20 PL3・17)

126号貯蔵穴は、3号墳の墳頂下にあり、北壁は127号貯蔵穴の南壁を切っている。しかしながら、墳頂上に繁茂する椎の大木が根を張っていた。そのため、東半プランの一部を確認し、上層を浅く掘り下げたのみで完掘はできなかった。平面形は、直径が300~350cmの大型の円形プランをなそうか。遺物は、上層から弥生前期の甕や黒曜石、安山岩片が出土した。

31~34は、甕。31は、口径が45cmの大型甕。口縁部は、直口して立ち上がる頸部から緩やかに外反し、上唇に粘土紐を貼付け内唇に段を作る。外反する口縁下には段が付く。甕棺であろう。32は、口径が15.2cm。口縁部は、内傾する頸部から緩やかに外反し、薄く粘土紐を貼付けて口縁下に段を作る。頸部には、4本単位のヘラ描の線刻文をタテに施文している。胴部は、やや肩の張った球形で頸部との境には4~5mmの間を開けて3条のヘラ描きの凹線が巡る。底部は、円盤貼付。胎土は精良で細~中砂粒と雲母微細を含む明赤橙色。33・34は底部から胴部下半。35・36は甕。35は、底径が11.6cm。内外面には煤様の黒色物が付着している。36は、底径が8.4cmで底部には3.1~3.4cmの楕円形の円孔が穿たれている。内底面に

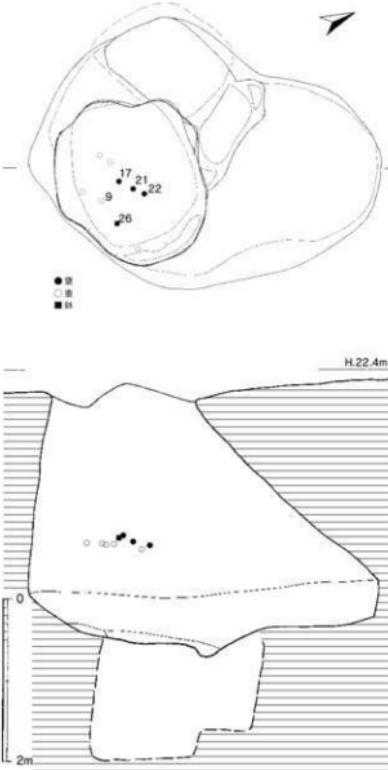


Fig.13 13号貯蔵穴実測図 (1/60)

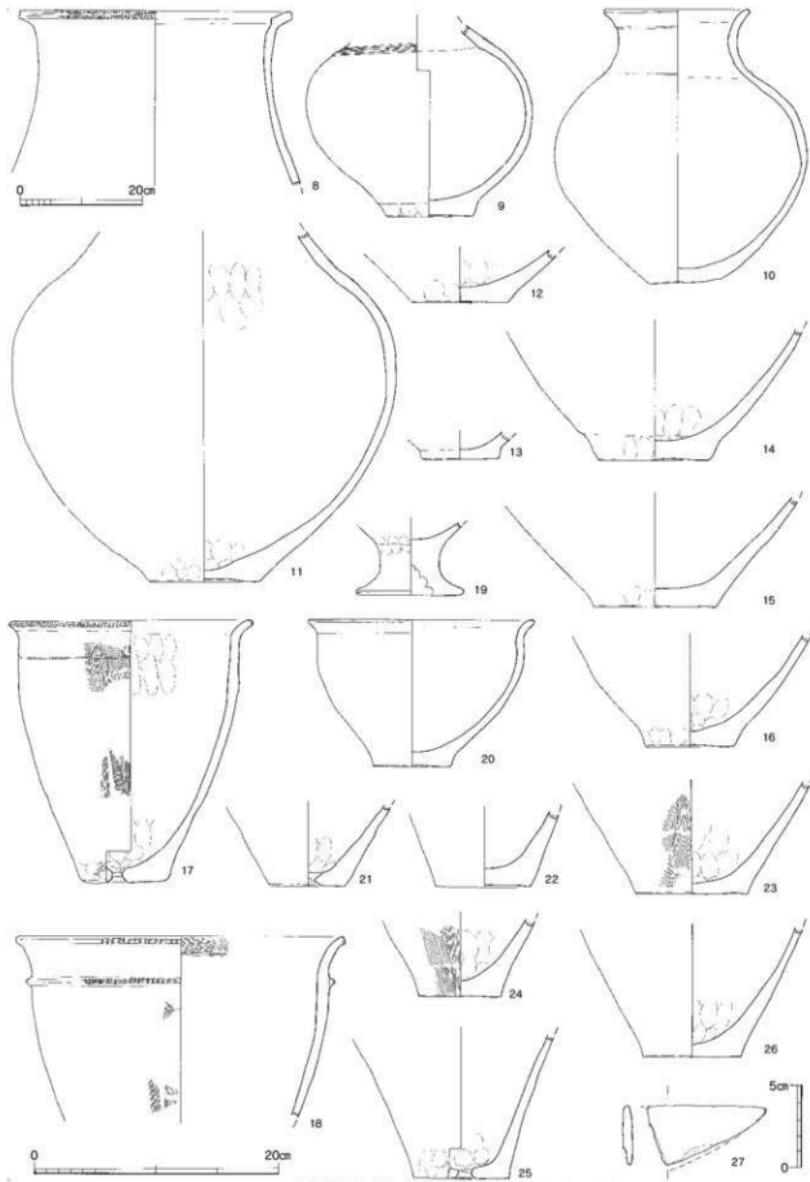


Fig.14 13号贮藏穴出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/8)

は、炭化物様の黒色物が付着している。37は、口径が40.2cmの鉢である。口縁部は、緩やかに外反する頸部から小さく如意状に屈曲し、外唇下端に刻み目を線刻する。体部は、浅い偏球形で頸部との境には明瞭な段を作る。口頸部内面がヘラ研磨のはかはナデ。胎土は、精良で僅少の小砂粒を含む。外面は橙～黒褐色、内面は茶褐色。

127号貯蔵穴 SU-127 (Fig.19 PL.3)

127号貯蔵穴は、3号墳の墳頂下にあり、南壁は126号貯蔵穴の北壁に削平されている。しかしながら、墳頂上に繁茂する椎の大木が根を張っていたために北半部のプランの一部を確認したのみで完掘はできなかった。入口部の平面形は、直径が240～270cmのやや不整な楕円形プランをなそうか。遺物は未検出。

128号貯蔵穴 SU-128 (Fig.19・21 PL.3-17)

128号貯蔵穴は、3号墳の墳頂下にあり、126・127号貯蔵穴より新しく、埋土上には3号墳の主体部である土壙墓が掘り込まれている。しかしながら、墳頂上に繁茂する椎の大木が根を張っていたために北東部の一部を確認したのみで完掘はできず、平面プランは確認できなかった。遺物は弥生土器壺がわずかに出土したのみである。

38は、口径が11.1cm、底径が6.4cm、器高が21.8cmの小型壺。口縁部は、内傾して立ち上がる頸部から大きく如意状に外反し、外唇に粘土紐を付けてシャープな段を作る。胴部は、やや肩の張った偏球形で肩部との境には四線状の段を作る。底部は円盤貼付。口縁部から頸部外面はヨコナデ、胴部内面は指先による押圧ナデ。胴部は、内面が押圧ナデ、外面は丁寧なナデ。胴部外面には黒色顔料の薄い塗布痕があり、内面にも炭化物様の黒色物が付着している。胎土は、精良で微細～細砂粒と僅少の雲母微細を含む。

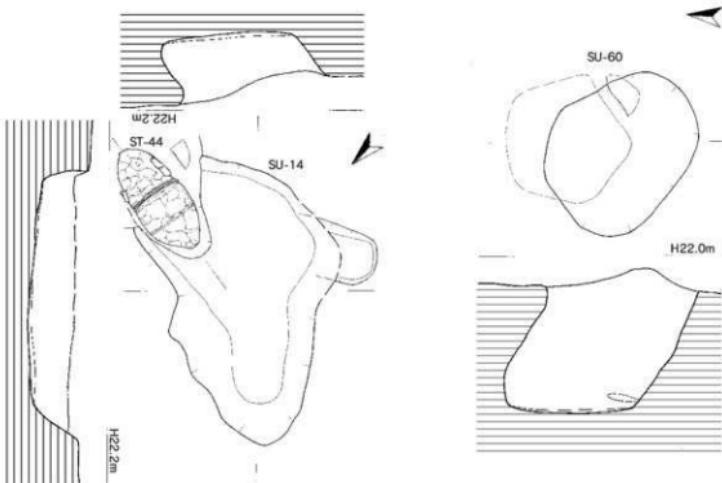


Fig.15 14・60号貯蔵穴実測図 (1/60)

129号貯蔵穴 SU-129 (Fig.19)

129号貯蔵穴は、3号墳の北西墳丘下にあり、すぐ南西には130号貯蔵穴、西には120号貯蔵穴が位置し、西壁は120号貯蔵穴の東壁に切られている。入口部の平面形は、直径が220~230cmの不整な円形プランを呈する。壁面は、入口部から東へむかって緩やかに傾斜して掘り込み、東壁の中程はわずかにラスコ状に内壘している。床面は、フラットで深さは220cm、標高は20.15m。遺物は未検出。

130号貯蔵穴 SU-130 (Fig.18 PL.3·4·15)

130号貯蔵穴は、3号墳の西墳丘下に位置し、南の115号貯蔵穴の北西壁を削平して掘り込まれている。入口の平面形は、直径が185~215cmの不整な円形プランを呈する。壁面は、緩やかにラスコ状に内壘した後に垂直ぎみに床面に至る。床面は、浅い凹レンズ状をなし、西壁隅に直径が50cm、深さが25cmの小ピットがある。出入りの梯子段を支えた柱穴の可能性が考えられる。遺物は未検出。

3) 貯蔵墓 (S T)

5号貯蔵墓 ST-05 (Fig.22·23 PL.4·18)

5号貯蔵墓は、調査区の北斜面に拡がる墳墓群の上縁にある接口式の成人墓で、上下壺ともに大型壺を用いている。貯蔵墓の3m南には42号貯蔵墓が並列して位置し、墓壙の南西隅は16号貯蔵墓の墓壙を切っている。墓壙は、はじめに幅が190cm、長さが250cmの豊穴を掘り、その西壁側に25cmほど掘り下げた横穴を水平に170cmほど掘り込んでいる。壺棺は、この横穴に壙底に貼り付けるようにして下壺を埋置し、その壺に口縁部を接して上壺を挿入しているが、下壺底部と墓壙壁の間には5cmほどの隙間がある。接口部に粘土目貼りは施されていない。主軸方位は、N-76° - Wにとり、ほぼ水平に埋置されているが下壺の方がやや高い。覆土は暗茶褐色土の單一層である。

上壺(39)は、口径が62~63.2cm、底径が10cm、器高が80cmの大型壺。砲弾形をなす胴部は、頭部との境に2つの横凹線を巡らして小さく内傾し、口縁部下は直立する。肉厚の口縁部は、外唇の上下端に刻み目を施し、小さく内傾する内唇はシャープに摘み出している。良質な胎土には細~小砂粒とわずかな雲母粒や中~粗砂粒を含む。濃橙褐色の内面は押圧ナデで、黒色顔料痕が残る。外面は淡黄橙色。

下壺(40)は、口径が62.6~66.8cm、底径が11cm、器高が81cmの大型壺で、土圧による変形が著しい。L字状の口縁部は、小さく摘み出した内唇にむかってわずかに内傾する。胴部は砲弾形をなし、最大径部に1条の低い三角凸帯が巡っている。粘土紐幅は6~7cm。胎土は粗く、細~中砂粒

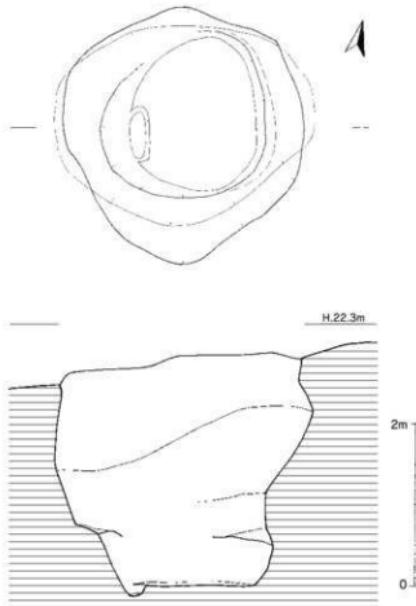


Fig.16 111号貯蔵穴実測図 (1 / 60)

と雲母微細、赤鉄鉱小塊を含む。焼成は良好。内面はくすんだ押灰褐色、外面はくすんだ黄橙色。

6号壺棺墓

ST-06

(Fig.22~24)

PL4.18)

6号壺棺墓は、
調査区北西端に

抜がる壺棺墓群中に位置し、すぐ東には30号土壙墓、南には23・24号壺棺墓、西には25・46号壺棺墓がある。壺棺墓は、上壺に鉢、下壺に壺を用いた覆口式の小児墓である。墓壙は、はじめに堅穴を掘り、その東側に20cmほど斜墻を掘った後に小さな段を作つて更に10cmほど掘り下げている。壺棺は、その斜墻壁に口縁部を打ち欠いた壺を埋置し、その壺を覆うように鉢を被せて上壺としている。小型壺が棺外に副葬されていたが破片のため位置は特定できなかった。壺棺は、N-56°-Wに主軸方位をとり、35.5°の傾斜で埋置されている。

上壺(41)は、口径が39.5cm、底径が9.4cm、器高が27.3cmを測る中型の鉢。口縁部は、半球形の胴部上半にはシャープな三角凸帯を巡らし、それを境に直口して如意状に摘み出している。この三角凸帯と口縁部下端にはヘラ工具による刻み目を施している。内面は指頭押圧ナデ、外面は丁寧な研磨状のナデ調整で黒色顔料の塗布痕がある。胎土は良質で微細～小砂粒を多く含む。外面はくすんだ黄橙色～明赤橙色、内面は淡明黄橙色。

下壺(42)は、底径が10.8cm、器高が47.5cmの大型壺で口縁部は丁寧に打ち欠いている。胴部は、玉葱状の球形で頭部との境には浅い凹線状の段を作る。頭部は垂直に立ち上がる。調整は、外面はナデ、内面が指頭押圧ナデ。外面はナデで全体に黒色顔料痕が残っている。胴部下位に3cm×4.5cmの水抜き孔を焼成後に穿っている。胎土は良質で、微細～小砂粒を含み、内面は淡黄橙色、外面はくすんだ黄橙色。

45は、底径が6cmの小型壺で口頭部を欠く。胴部から頭部へと続く肩部には3条のヘラ描きの凹線を施しているが、中央

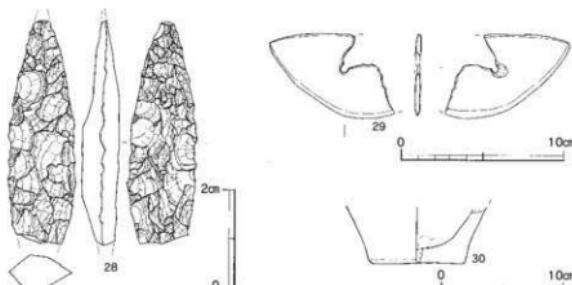


Fig.17 111号貯蔵穴出土遺物実測図 (1/1・1/3・1/4)

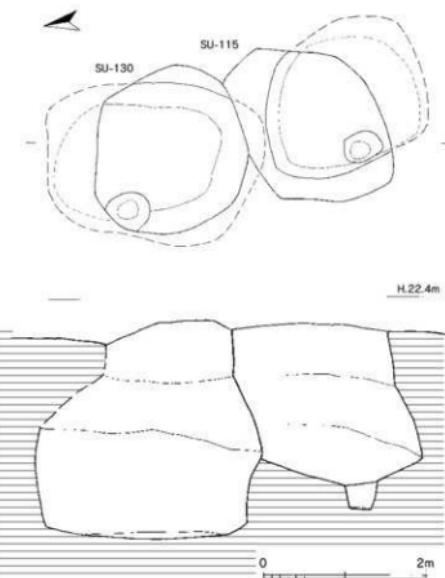


Fig.18 115・130号貯蔵穴実測図 (1/60)

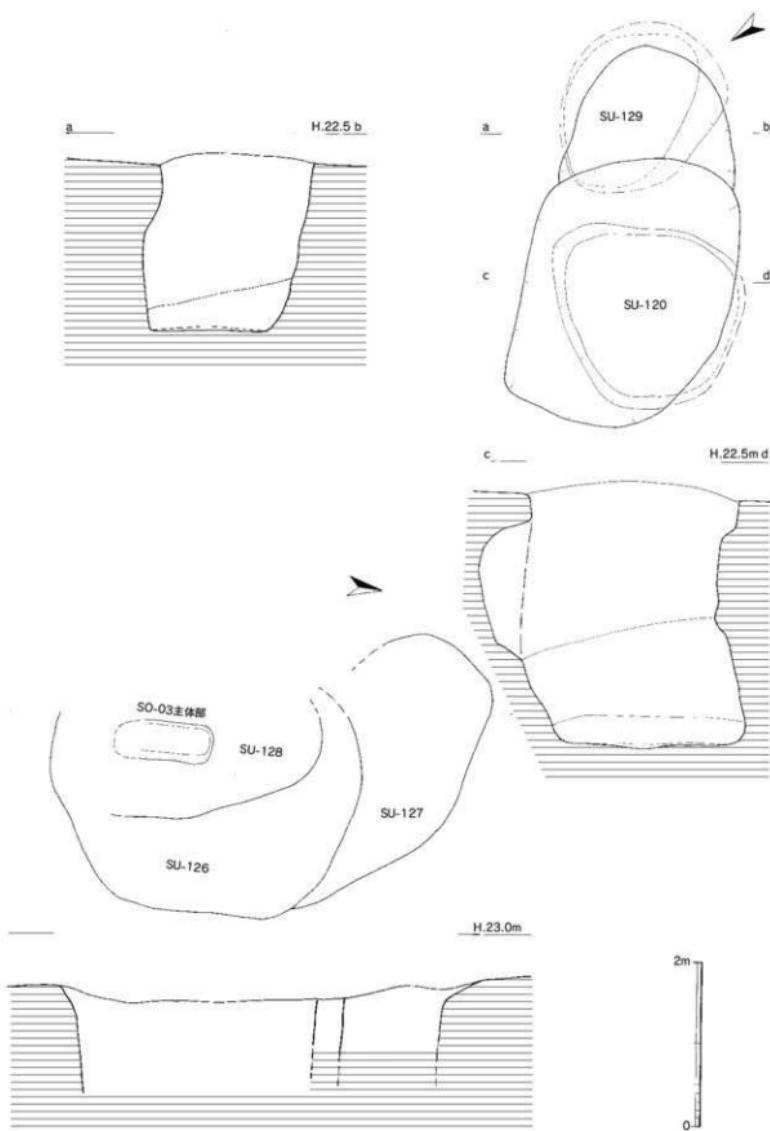


Fig.19 120・126～129号貯蔵穴実測図 (1 / 60)

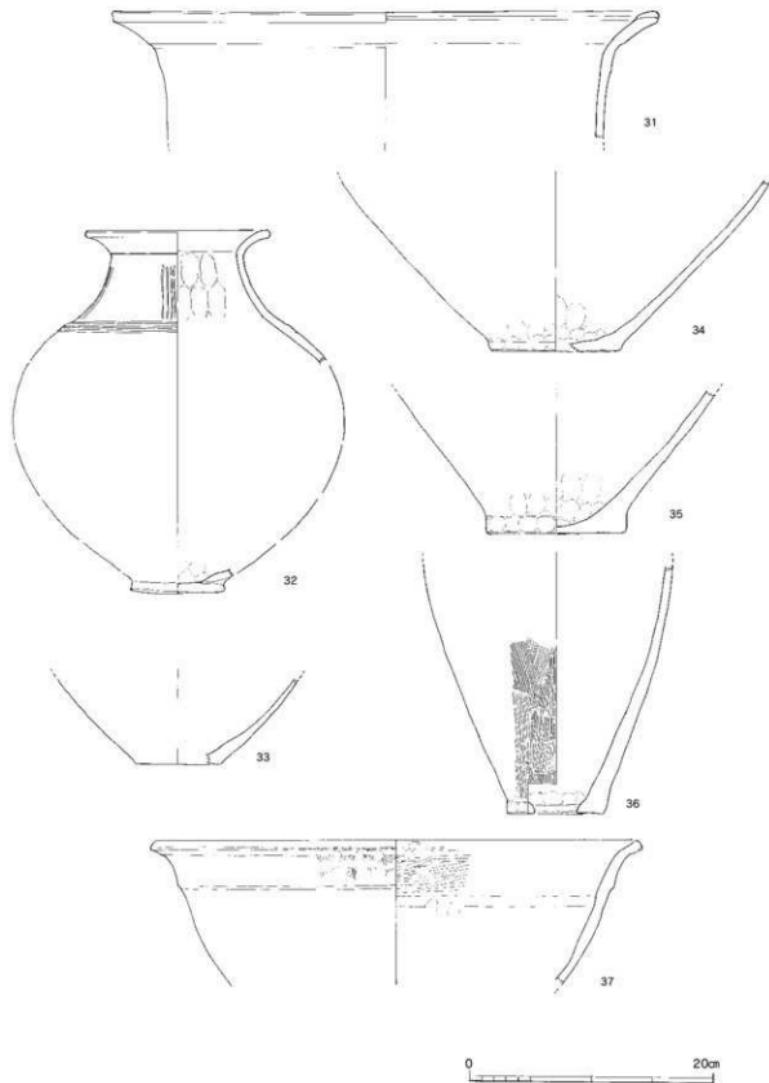


Fig.20 126号贮藏穴出土遺物実測図 (1/4)

の凹線は途中で途切れている。内面は押圧ナデ、外面はナデで下半部はヘラ先工具による研磨状のナデ調整。胎土には細～石英小砂粒を含む。外面は明赤橙色、内面はくすんだ黄橙色。

15号壺棺墓 ST-15

(Fig.22-23 PL.19)

15号壺棺墓は、調査区の北斜面に拡がる墳墓群の上縁部に位置し、並列する5号壺棺墓と42号壺棺墓の間にある。壺棺は、上壺に鉢、下壺に壺を用いた垂口式の小児墓であるが、椎の大木の根が壺棺墓を巻き込むようにして生い茂っているために墓壙は判然としないが、梢円形状に掘り込んだ堅穴に約8.5°の角度で埋置されたものと考えられる。主軸方位は、N-90°-Eにとる。

上壺（43）は、口径が35cmの小型壺と考えられる。口縁部は、L字状をなす口縁部は、状唇が反り、内心はシャープに摘み出す。胎土は良質で、細～小砂粒と僅少の雲母微細を含む。濃赤橙色。

下壺（44）は、口径が42cm、底径が10.6cm、器高が66cmの大型壺。胴部は、やや長い玉葱状をなし、頭部との境に三角凸帯を巡らしている。頭部は、やや内傾ぎみに直口しながら外反して肉厚の水平な口縁部が付く。口縁部は、外唇がやや下がりざみで中央に凹線状の窪みがある。調整は、口縁部がヨコナデのほかは丁寧な押圧ナデ。胎土は良質で、細～小砂粒を多く含む。濃赤橙色。

16号壺棺墓 ST-16 (Fig.25-26 PL.4-18)

16号壺棺墓は、調査区の北斜面に拡がる壺棺墓群の上縁部にあり、すぐ北には主軸方位を揃えるように縦列して並ぶ5号壺棺墓が墓壙の東端を切っている。壺棺は、上下壺ともに大型壺を用いた接口式の成人墓である。墓壙は、はじめに190cm～200cmの方形の堅穴を掘り、その東壁に奥へ100cm、深さが10cmほどの低くなった浅い斜壙を掘り込んだ2段掘り状の構造をなしている。この2段目の墓壙は、下壺の大きさにあわせるように効率的かつコンパクトに掘り、棺床は墓壙底に貼り付くように挿入して埋置している。また、合口部には下から口縁に沿って灰白色粘土を巻いて目貼りをしている。主軸方位はN-81.5°-Eにとり、埋置角はほぼ水平に近い5°である。

上壺（46）は、底径が12cm、器高が77cmの大型壺で口径は61～68cmと土圧による歪みが著しい。口縁部は、内唇が強く張り出した逆「L」字状をなし、外唇の上端にはヘラ工具による刻み目がある。砲弾形をなす胴部上位には1条の三角凸帯が巡っている。調整は口縁部と凸帶部がヨコナデ、胴部は外面が押圧ナデでタタキ状の痕跡がある。粘土紐幅は6～7cm。内面は強い押圧ナデで仕上げ、黒色顔料の塗痕が残る。胎土はやや粗く、微細～石英小砂粒と雲母微細を多く含み。黄橙～淡明赤橙色。

下壺（47）は、底径が12.2cm、器高が78.5～75.5cm、口径が64～75.5cmの大型壺で土圧による歪みが著しい。逆「L」字状の口縁部は、わずかに内傾している。胴部は上半がわずかに内弯する砲弾形をなしている。胴部中位には1条の三角凸帯が巡る。口縁部と凸帶部がヨコナデのほかは押圧ナデ調整。胎土は良質で、微細～粗砂粒多く含み、色調は淡明黄褐色。

18号壺棺墓 ST-18 (Fig.25-26)

18号壺棺墓は、丘陵北斜面に拡がる壺棺墓群の東縁に位置し、すぐ西には5号壺棺墓がある。壺棺墓は、上下壺に小型壺を用いた接口式の小児墓であるが、棺床の一部を残して大半が消失しているため

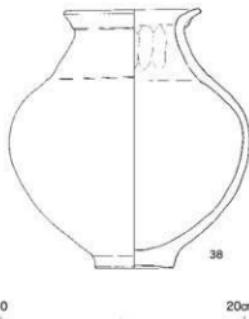


Fig.21 128号貯蔵穴出土遺物
実測図(1/4)

に詳細は明らかでない。墓壙は、現状から堅穴を掘った後に小さく斜壙を穿ったものと思われる。主軸方位をN-67°-Eにとり、接口部に粘土目貼りはない。

上壙(48)は、口径が28.8cmの小型壙で、下壙とともに大半が消失している。L字状の口縁部は、小さく外傾して端部は細丸く納めている。胎土は粗く、細～小砂粒を多く含む。淡橙茶褐色。下壙は固化できなかった。

22号甕棺墓 ST-22 (Fig.25・26 PL.19)

22号甕棺墓は、調査区の北西端にある覆口式の成人墓で、上下壙ともに大型の甕を用いているが棺

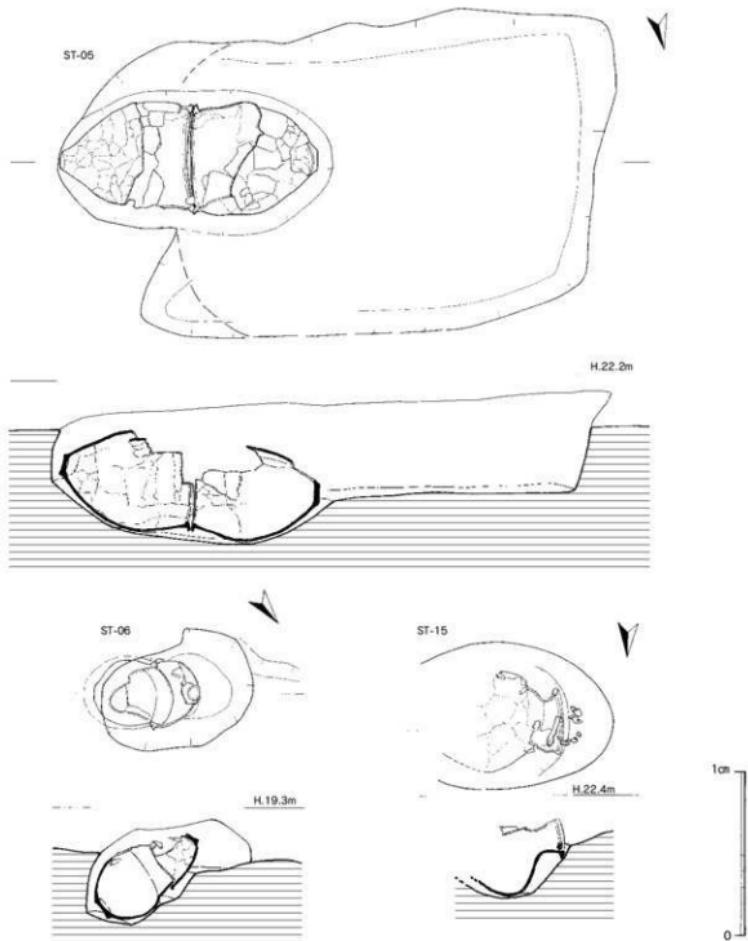


Fig.22 5・6・15号甕棺墓実測図 (1 / 30)

床を除いてその大半が消失している。壺棺墓の北には北西に延びる細尾根を切斷して開削した40号墳の後背溝があり、その溝中には壺棺片が混入していることから古墳の造営に際して削平されたものと考えられる。墓壙は、緩やかな斜壙であり、その中に下壺を挿入した後に上壺を覆うようにして被せている。主軸方位は、N-58°-Wにとり、約7.5°の緩やかな傾斜をもって埋置されている。

上壺（49）は、口径が80~82cmの大型壺。肉厚で逆L字状ぎみの口縁部外唇には上下端にヘラ工具による刻み目を細かく施文している。口縁部下と胴部中位には3条のヘラ描きの凹線を巡らし、胴部の凹線を境に胴部は膨らみながら底部にむかって窄まる。口縁部はヨコナデ、内面は押圧ナデ、外面は丁寧なナデで黒色顔料の塗布痕が残る。胎土は粗く、細~石英粗砂粒多く含む。くすんだ淡黄褐色。

下壺（50）は、口径が59.6cm、器高が71cmに復原される大型壺。肉厚の口縁部は内傾し、外唇の

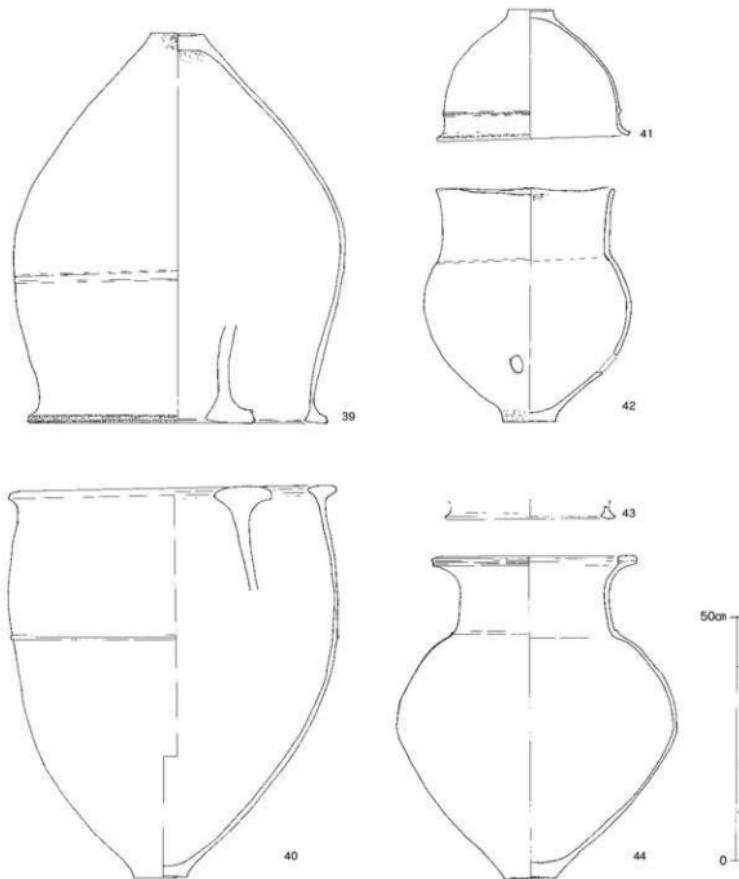


Fig.23 5・6・15号壺棺実測図 (1 / 10)

上下端にはヘラ工具による細かい刻み目が巡る。この口縁部下と胴部と頭部との境には3条のヘラ描き四線が巡るが、胴部の凹線は各条が完結せず、一部で4条になっている。胴部は、やや長い玉葱状をなしている。口縁部はヨコナデ、外面は研磨条の丁寧なナデ、内面は押圧ナデで口縁部下は粗いハケ目調整。胎土は粗く、細～石英粗砂粒を含み、外面は明赤橙～淡明黄橙色、内面は明赤橙色。

23号甕棺墓 ST-23 (Fig.27-28 PL.5)

23号甕棺墓は、調査区の北西方に細長く伸びた尾根の先端部に拡がる甕棺墓群中にあり、すぐ西には24号甕棺墓が縦列的に位置している。甕棺墓は、37号土壤墓上に埋置された覆口式の小児墓で上甕には鉢、下甕には壺を用いている。墓壙は、はじめに不整円形の堅穴を掘り、その壙底に東へ30～40cmの横穴を穿ち、その後底に壺の底を接するように挿入している。甕棺は、主軸方位は、N-84°-Wにとり、約24°の傾斜をもって埋置されている。

上甕(51)は、口径が45.2cm、底径が11cm、器高が25.7cmの大型鉢。肉厚の口縁部は、半球形の胴部から短く外反し、内唇下端にシャープな棱を作り、調整は、外面がヘラ先状工具による研磨状のナデ、内面は口縁部下が1～2mm幅のハケ目、胴部は押圧ナデ。内面には、黒色顔料状の付着物があり、外面にも薄く残る。胎土は良質で、多くの微細～石英小砂粒と少量の雲母微細粒を含む。色調は、内面が明橙～黄橙色、外面は明橙色。

下甕(52)は、口径が38～39.2cm、底径が11.8cm、器高が56.2cmの大型壺で、頭部は、小さく直口ぎみに内傾し、口縁部は短く外反する。玉葱状をなす胴部の張りは弱く、頭部との境には緩やかな段を有す。調整は、内面がヨコナデ～押圧ナデ、胴部下半には研磨状の粗いナデ。胎土は、良質で細～石英中砂粒を多く含み、淡黄褐色。

24号甕棺墓 ST-24 (Fig.27-28 PL.5・18)

24号甕棺墓は、調査区の北西方に細長く伸びる尾根の先端部に拡がる甕棺墓群中にある覆口式の小児墓で、上甕には鉢、下甕には壺を用いている。甕棺墓のすぐ東には23号甕棺墓が縦列的に、また北西方には46号甕棺墓が隣接している。墓壙は、はじめに円形の堅穴を掘り、その東壁に深さが15cmほどの浅い斜壙を掘って下甕を埋置している。下甕下には5～6cmの隙間があり、底には暗茶褐色土を充填して棺床の安定を図っている。甕棺は、主軸方位は、N-74.5°-Wにとり、29°の傾斜をもって埋置されている。

上甕(53)は、口径が38.3cm、底径が10cm、器高が27.4cmの中型鉢。口縁部は、玉葱状をなして直口ぎみに立ち上がる胴部から小さく如意状に外反する。調整は、口縁部内外が指頭押圧後に細かいハケ目、胴部は内面が押圧ナデ、外面は丁寧なナデ。胎土は良質で細～石英中砂粒と僅少の雲母微細を含む。外面は淡黄橙色～赤橙色、内面は淡灰黄褐色～黒色。

下甕(54)は、口径が33.1cm、底径が10.8cm、器高が44.4cmの中型壺。口縁部は、小さく内傾する頭部から緩やかに外反する。外唇の上下端にはヘラ描きの刻み目を巡らし、内唇は上下から摘み出してシャープな棱を作る。倒卵形の胴部は肩の張りが弱い。口縁部はヨコナデ、頭部～胴部は、内面が指頭押圧ナデ、外面は丁寧なナデ。底部近くに水抜き孔を穿っている。胎土はやや粗く細～粗砂粒を多く含む。外面は淡明黄橙色～橙褐色、内面は淡明黄橙色。

25号甕棺墓 ST-25 (Fig.27-28 PL.5・18)

25号甕棺墓は、南北に伸びる丘陵尾根の頂部から北西方に派生した細尾根の先端部に立地し、周辺

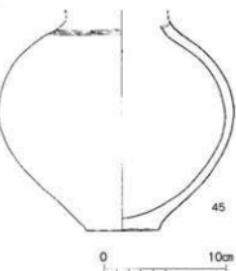


Fig.24 6号甕棺墓副葬
小甕実測図(1/4)

域には6・24・27・46号壺棺墓が弧を描くように隣接している。壺棺は、中型壺を用いた単口式の小児墓である。墓壙は、はじめに楕円形状の豊穴を掘り、そこから北へ50cm、深さが15cmほど斜壙を掘り込んだ2段掘りの構造をなしている。壺棺は、その斜壙の上縁に口縁部を置いて22.5°の角度で壙底に壺の胴部を接して挿入されている。口縁部下には、幅が6~8cmの浅い溝が掘り込まれており、木蓋をもって覆われていたものと思われる。主軸方位は、N-10°-Wにとる。

堀（55）は、口径が30cm、底径が11.6cm、器高が44.3cmの中型壺。口縁部は、短く内傾しながら弧を描くように外反して立ち上がる。胴部は、肩の張った玉葱状をなす。調整は、口頭部外面がヨコナデ、内面は目幅が1mmの細かいハケ目。胴部は外面が研磨、内面は指頭押圧ナデ。胴部の内外面には黒色顔料痕があり、全面に塗布されていた可能性もあり得る。胎土は良質で、細~石英中砂粒と僅少の雲母微細を含む。くすんだ黄橙色。

27号壺棺墓 ST-27 (Fig.27~29 卷頭PL.3 PL.6-18)

27号壺棺墓は、調査区の北西部に拡がる墳墓群中のもっとも北西端に位置し、すぐ南東には46号壺棺墓や43号土壙墓が、東には25号壺棺墓がある。壺棺墓は、下壺に大型の壺を用い、それに口縁部を打ち欠いた壺を挿入した呑口式の成人墓である。墓壙は、はじめに90cm×110cmほどの豊穴をやや深く掘り、壙底に小さな段を造った後に100cmほどの斜壙を穿っている。壺は、この斜壙の壙底に胴部を接して下壺を埋置し、その下壺の中に口縁部を欠いた上壺を深く挿入している。下壺の底部と墓壙壁の間は埋土の充填がなく、隙間が生じている。また、上壺の上縁には口唇部を欠いた小型壺が供獻されていた。主軸方位は、N-81°-Eにとり、40.5°の傾斜をもって埋置されている。

上壺（56）は、底径が12cmの口縁部を打ち欠いた大型壺で、現高は55cm。胴部と頭部との境には緩やかな屈曲面を作り、直下にヘラ描きの浅い凹線を3条巡らせている。頭部は緩

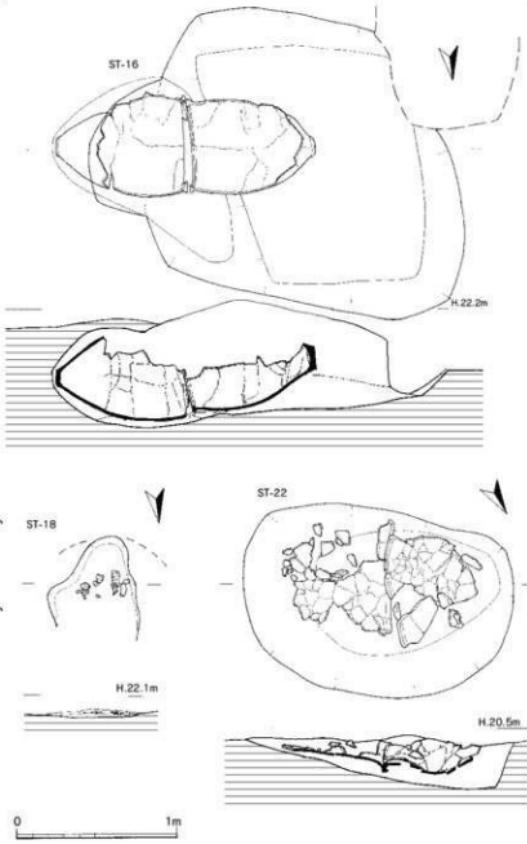


Fig.25 16・18・22号壺棺墓実測図 (1 / 30)

やかに内傾し、口縁部下で直口ぎみに立ち上がり、破断面に1条のヘラ描きの凹線が残っている。調整は、頸部がナデ、胴部は強い押圧ナデ。外面と胴部内面に黒色顔料の塗布痕が観られ、内外全面に塗布されていた可能性がある。胎土には微細～石英粗砂粒を含み、くすんだ黄灰色～黄橙色。

下甕(57)は、口径が62cm、底径が15.2cm、器高が82.4cmの大型甕で全体に歪みが著しい。口縁部は、小さく内傾する頸部から大きく外反して立ち上がる。上唇には粘土紐を貼り付けて肉厚にし、内唇には緩やかな段を付けている。外唇の下端にはヘラ描きの刻み目を残っている。胴部はスマートな倒卵形的で、頸部との境には緩やかな段を作る。頸部外面は押圧後にタテハケ目、胴部上半には1.5～2cm幅の凹凸があり、タタキ痕の可能性がある。下半部は押圧ナデ。胎土には細～石英中砂粒と雲母微細を多く含む。淡黄橙色。

58は、底径が6.2cmの小型甕。口縁部は、内傾する頸部が一旦直口して大きく外反し、頸部との境

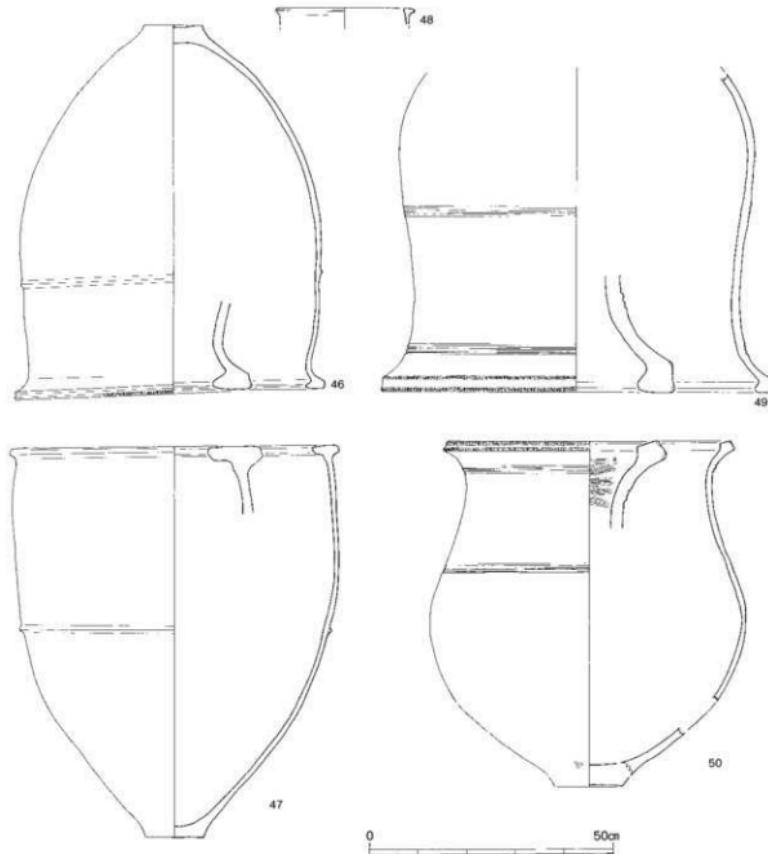


Fig.26 16・18・22号甕棺実測図 (1 / 10)

には段を作る。胴部は偏球形で、頭部との境には浅いヘラ描きの凹線2条を巡らしている。胎土はやや粗く、微細～石英小砂粒を多く含む。淡明黄橙色で胴部外面は淡黒灰色。

42号壺棺墓 ST-42 (Fig.30-31 PL.6-19)

42号壺棺墓は、調査区北部の丘陵頂部に位置し、北へ3mの距離には5号壺棺墓が並列して埋置している。壺棺は、上下壺とともに大型の壺を用いた接口式成人墓で、下壺側の墓壙は60号貯蔵穴の埋土上に掘り込まれている。墓壙は、はじめに2段掘りの浅い竪穴を掘り、その東側に浅い斜壙を掘り込んでいる。壺棺は、その斜壙底に13°の傾斜で下壺を棺床を接するように挿入した後に上壺の口縁部を接して覆っている。主軸方位は、N-89°-Wにとる。西側の墓壙壁際から土製錘車が出土したが、副葬遺物かは判然としない。

上壺（59）は、口径が59cm、底径が11.6cm、器高が80cmの大型壺。水平な逆L字状の口縁部は、

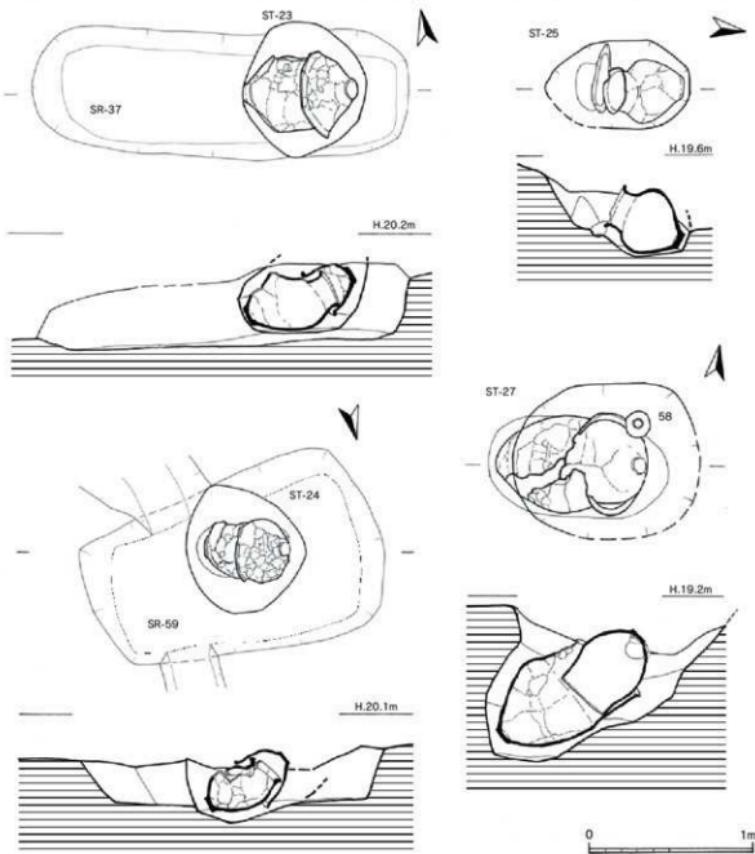


Fig.27 23・24・25・27号壺棺墓実測図 (1 / 30)

外唇はコ字状に、内唇は大きく摘み出して丸く納めている。胴部はシャープな砲弾形を呈し、中位よりやや上に1条の三角凸帯を巡らしている。口縁部と凸帯部がヨコナデ、内面は押圧ナデ、外面はナデであるが凸帯下には波打つような凹凸がありタタキ痕の可能性がある。胎土は微細～中砂粒のほかに雲母微細を多く含む。外面は淡明橙色、内面は淡黄橙色。

下壺(60)は、口径が50cm、底径が10cm、器高が75cmの大型壺。L字状の口縁部は、小さく内傾し、内外唇ともに丸く納めている。胴部はスマートな砲弾形をなし、中位よりやや上に1条の三角凸帯を張り巡らしている。口縁部と凸帯部がヨコナデのほかは内外面ともに押圧ナデ調整。胎土は良質で、多くの石英小砂～粗砂粒のほかに僅少の雲母微細を含む。外面は名刀色、内面は淡灰黄色～淡灰橙色。

44号壺棺墓 ST-44 (Fig.30-31 PL.6-19)

44号壺棺墓は、調査区北東部の丘陵上縁にあり、すぐ南には51号壺棺墓が直交するように埋置されている。壺棺は、上下壺とともに大型壺の口縁部を接した接口式成人墓で、墓壙は14号貯蔵穴の埋土上に掘り込まれている。墓壙は、はじめに楕円形の堅穴を深く掘り、そこから80cmほど緩やかな斜擴を掘り込んだ2段掘りの構造をなしている。壺棺は、その斜擴に約7.5°の傾斜をもって下壺を挿入し、口縁部を接して上壺を被せている。この上下壺が接する口縁部下には白色粘土を敷いて目貼りをしているが、下壺は土圧によって崩落している。主軸方位は、N-84°-Wにとる。

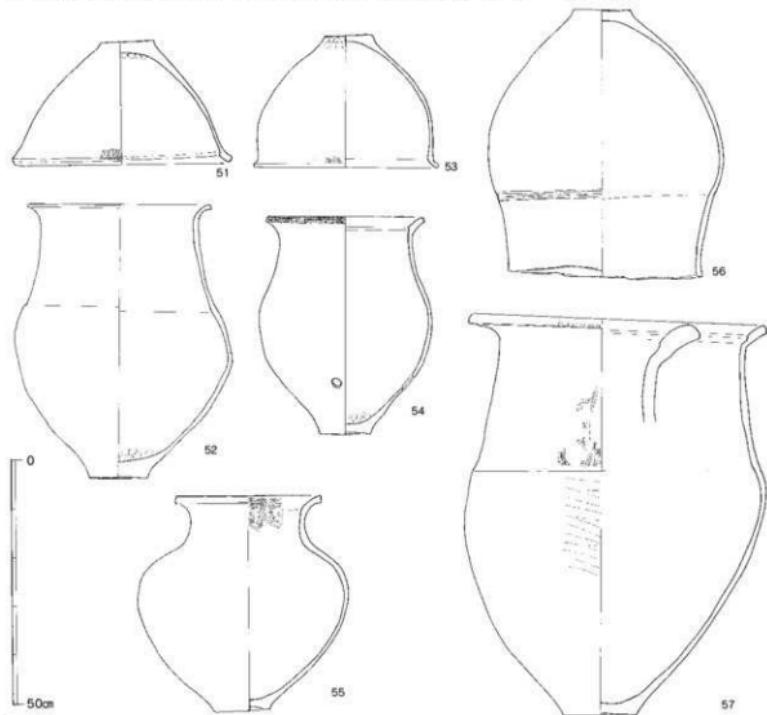


Fig.28 23・24・25・27号壺棺実測図 (1 / 10)

上壺（61）は、口径が62cm、底径が12.2cm、器高が78.4cmの大型壺で、土圧による歪みが著しい。水平に仕上げた逆L字状の口縁部は、外唇を丸く、内唇はシャープに角張って整えている。胴部はシャープな砲弾形を呈し、中位に粘土紐を摘み出して作った小さな三角凸帯を1条巡らしている。口縁部と凸帯部がヨコナデ、外面は丁寧なナデ、内面は押圧ナデ調整。粘土紐幅は6～7cm。胎土には多くの微細～小砂粒と少量の中～粗砂粒を含む。明赤橙色～淡明黄橙色。

下壺（62）は、口径が58.2cm、底径が10cm、器高が76.2cmの大型壺で、土圧と成形時の歪みがある。逆L字状の口縁部は水平に仕上げ、端部は内外唇ともに丸く整えている。砲弾形の胴部中位には1条の三角凸帯を巡らしている。口縁部と凸帯部がヨコナデ、胴部は押圧ナデ。胴部内面には黒色顔料痕が薄く残っており、全体に塗布されていたと考えられる。粘土紐幅は5～7cm。胎土は良質で、多くの細～中砂粒と少量の赤鉄鉱塊を含む。明赤橙色。

46号壺棺墓 ST-46 (Fig.32～34 卷頭PL.3 PL.6.19)

46号壺棺墓は、調査区の北西部に拡がる墳墓群中にあり、西側の墓壙壁は43号土壙墓の東小口壁を切っている。壺棺墓は、楠の大木の根に巻き込まれておらず、その根を抉んだ西には27号壺棺墓が、北には25号壺棺墓が、南には24号壺棺墓がある。壺棺墓は、下壺の大型壺に口縁部を打ち欠いた壺を挿入した呑口式の成人墓である。墓壙は、はじめに幅が110cm、長さが130cmの楕円形の豊穴を掘り、そこから更に緩やかな斜壙を160cmほど掘り込んでいる。壺棺は、この斜壙底に下壺を接して埋置し、その下壺の中に口縁部を欠いた上壺を挿入している。また、上壺の上縁には小型壺が供獻されていた。主軸方位は、N-45°-Wにとり、22°の傾斜をもって埋置されている。

上壺（63）は、底径が15cm、現器高が65.2cmの口縁部を打ち欠いた大型壺で土圧による歪みが著しい。胴部は、やや長い玉葱状を呈し、肩部にヘラ描きの浅い凹線を巡らして屈曲面を作る。頭部は、この屈曲面から小さく内傾ぎみに立ち上がり、口縁部下で直口する。胴部の最大径部に2.8cmの水抜きの円孔を穿っている。調整は、頭部外面が研磨状のナデ、内面は押圧後にナデ。胴部内面は指頭押

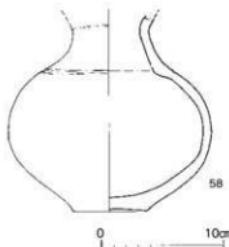


Fig.29 27号壺棺墓副葬
小壺実測図(1/4)

Tab. 2 壺棺墓一覧表

遺構No	合口形式	器種	墓壙形態	墓壙法量		主軸方位	理置角	性	副葬品	備考
				長辺×短辺×深(cm)						
ST-0.5	接口	壺+蓋	2段掘り方形	275×198×95		N-76°-W	7°	成人		
ST-0.6	覆口	鉢+蓋	2段掘り楕円形	95×75×65(+α)		N-56°-W	35.5°	小兒	小型壺	下壺口縁打欠き、穿孔あり
ST-1.5	呑口	鉢+蓋	2段掘り (?) 楕円形	135×90×50(+α)		N-90°-E	8.5°	小兒		
ST-1.6	接口	壺+蓋	2段掘り不整方形	200×200×78(+α)		N-81.5°-W	5°	成人		
ST-1.8	覆口	壺+蓋	楕円形			N-67°-W				下壺口縁打欠き
ST-2.2	覆口	壺+蓋	楕円形	130(+α)×125×33(+α)		N-58°-W	7.5°	成人		灰白色粘土貼り、上壺外間に黒色顔料塗布
ST-2.3	覆口	鉢+蓋	不整円形	65×85×43(+α)		N-84°-W	24°	小兒		SR-37→ST-23
ST-2.4	覆口	鉢+蓋	不整円形	65×65×45(+α)		N-74.5°-W	29°	小兒		SR-59→ST-24
ST-2.5	単口	壺	2段掘り楕円形	90×55×52		N-10°-W	22.5°	小兒		木蓋、内外面に黒色顔料塗布
ST-2.7	呑口	壺+蓋	2段掘り楕円形	110×93×95		N-81°-E	40.5°	成人(?)	小型壺(?)	ST-46→ST-27 上壺：内外面黒色顔料塗布
ST-4.2	接口	壺+蓋	2段掘り不整円形	155×155×45(+α)		N-89°-W	13°	成人	上製紡錘車	
ST-4.4	接口	壺+蓋	浅い2段掘り楕円形	120×90(+α)×70(+α)		N-84°-W	7.5°	成人		
ST-4.6	呑口	壺+蓋	楕円形	180×110×80(+α)		N-45°-W	22°	成人	小型壺	ST-4.6→ST-2.7 上壺：内外面黒色顔料塗布、穿孔あり
ST-5.1	相口	壺+蓋?				N-2°-E	8.5°	成人		

圧ナデ。内面全体と頭部外面には明瞭な黒色顔料痕があり、内外面全体に塗布されていたと考えられる。胎土には細～中砂粒含む。外面は淡黄橙色、内面は濃赤橙色～くすんだ橙褐色。

下壺（64）は、壺の形状を残した壺で口径が60.5cm、底径が15.2cm、器高が76.4cm。胴部は倒卵形を呈し、肩部にはヘラ描きの凹線を巡らしているが、各凹線が完結せずところによって2～3本になる。頭部は、この肩部からわずかに内傾しながら直口し、大きく外反して口縁部を作る。口縁部は肉厚で、小さく内傾し内唇にはシャープな棱を作り、外唇は上下端にヘラ工具による刻み目を施文している。調整は、口縁部がヨコナデ、頭～胴部は外面が丁寧なナデ、内面は押圧ナデ。内面と頭部外面には明瞭な黒色顔料痕があり、器面全体に塗布されていたと考えられる。胎土は粗く、細～石英粗砂粒を多く含む。明赤橙色。

66は、口径が10cm、底径が5.9cm、器高が16.5cmの小型壺。口縁部は、鋭く内傾する頭部から大きく外反し、頭部との境にはシャープな段を作る。胴部は偏球形で、頭部との境には浅い凹線状の段が付く。口縁部はヨコナデ、内面は指頭押圧ナデ、外面は研磨状の丁寧なナデ調整。胴部外面には薄いながら黒色顔料痕が残る。胎土は、精良で微細～細砂粒を含む。淡茶褐色。

51号壺棺墓 ST-51

(Fig.32・33 PL.6)

51号壺棺墓は、調査区北東部の丘陵上縁部にある成人墓ですぐ北には44号壺棺墓が直交するように接して

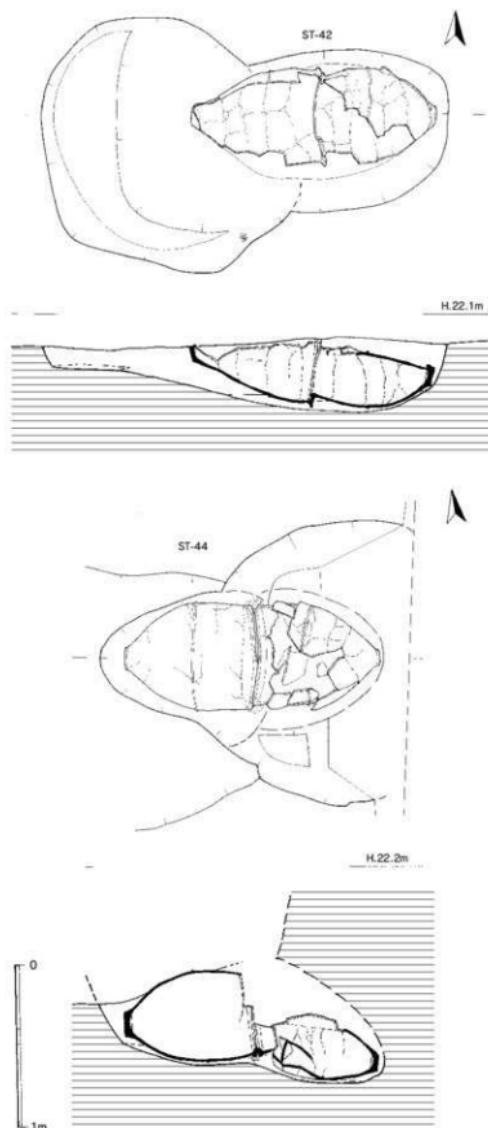


Fig.30 42・44号壺棺墓実測図 (1 / 30)

いる。壺棺は、上壺の棺床を除いて大半が住宅地の擁壁建設によって消失しているが、上下壺ともに大型壺を用いた接口式の合わせ壺と考えられる。墓壙は、丘陵尾根の緩斜面上に楕円形の堅穴を掘り、その中に8.5°の傾斜をもって壺を埋置している。主軸方位は、N-2°-Eにとる。

上壺（65）は、口径53cm、底径9.4cmで器高は検出状況から84cmに復原される大型壺。逆L字状の口縁部は、上縁を水平に仕上げて内唇に大きく摘み出して丸く納めている。胴部は砲弾形をなし、中位には摘み出したような1条の三角凸帯が巡る。薄い器厚のため胴部下半と底部は未接合で出土状況図を基に復原したが口径と器高が不整合でプロポーション的に矛盾がある。胎土は良質で微細～中砂粒を含む。淡黄橙色。

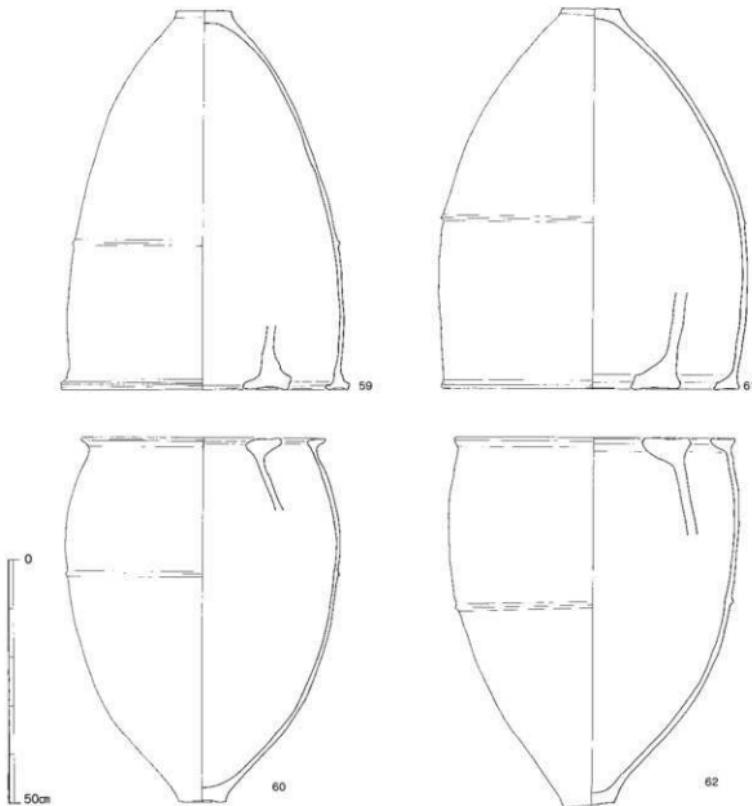


Fig.31 42・44号壺棺実測図 (1/10)

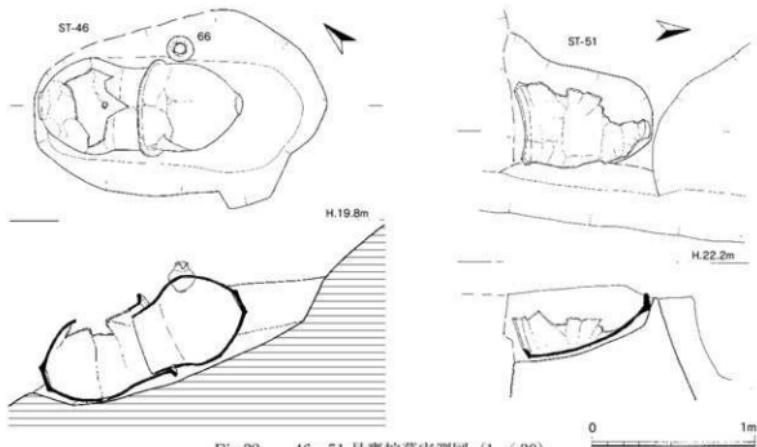


Fig.32 46・51号墳実測図 (1 / 30)

4) 土壙墓 (S R)

12号土壙墓 SR12

(Fig.35 PL.7)

12号土壙墓は、調査区の北斜面に拡がる墳墓群上縁の東端に位置し、2m南には21号土壙墓がある。墓壙は、はじめに幅が約75cm、長さが170cmの長方形プランの竪穴を浅く緩やかに掘った後に垂直に35cmほど掘り込んだ2段掘り的構造をしている。床面はほぼフラットで小口壁にはシャープな擦過痕的な稜線が観られることから木棺墓の可能性も考えられる。主軸方位はN-84°-Eにとり、副葬品等の遺物は未出土。

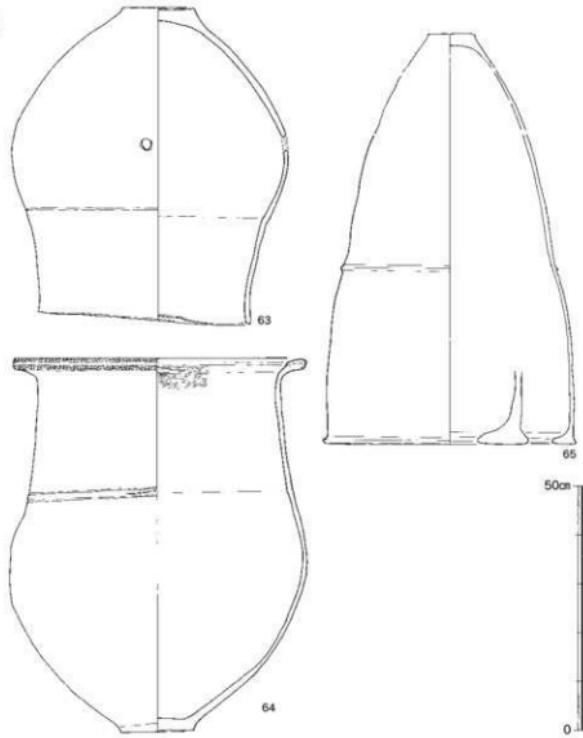


Fig.33 46・51号墳実測図 (1 / 10)

17号土壙墓 SR-17 (Fig.35 PL.7)

17号土壙墓は、調査区の北斜面に拡がる墳墓群のはば中央部に位置し、南西隔壁は49号土壙墓を切っている。墓壙は、はじめに幅が155cm、長さが254cmほどの長方形プランの堅穴を掘り、その中央に幅が45~55cm、長さが140cmの2次墓壙を掘り込んだ2段掘りの構造をなしている。2次墓壙の深さは15cmでフラットな床面は、浅い凹レンズ状の断面形をなす。この2次墓壙の上縁には青緑色粘土が薄く帯状に遺存している箇所があり、木蓋の目貼りかと思われが、その深さでは不都合が生じ木棺の棺材を固定した粘土材の可能性も否定できない。主軸方位はN-7°-Eにとり、覆土中からは弥生土器小片がわずかに出土した。

21号土壙墓 SR-21 (Fig.36 PL.7)

21号土壙墓は、調査区の北斜面に拡がる墳墓群上縁の東端に位置し、北へ2mの距離には12号土壙墓が主軸をほぼ同じくして並んでいる。墓壙は、東半部が調査区外に延びているために全容は明らかではないが、幅が140cm、長さがおよそ170cmの不整な長方形プランの堅穴を掘った後、その中央に幅が44cm、長さがおよそ90cm、深さが52cmの2次墓壙を垂直に掘り込んだ2段掘り的構造をなしている。床面はほぼフラットである。この2次墓壙の上縁には7~10cmの粘土帶が薄く遺存しているところがある。加えて両側壁に沿って2~3cmの厚の灰褐色粘質土層が認められることから木蓋の木棺墓の可能性も考えられる。主軸方位はN-72.5°Eにとり、遺物は何ら出土しなかった。

30号土壙墓 SR-30 (Fig.37-38 卷頭PL.4-PL.20)

30号土壙墓は、調査区の北側斜面に沿って北西に延びた細い尾根の端部に拡がる墳墓群の北東端にあり、すぐ南西には37・59号土壙墓が主軸を直交するように位置している。墓壙は、はじめに幅が190cm、長さが260cmほどの堅穴を掘り、その中に31号土壙墓と主軸方位を揃えるようにして2次墓壙を掘り込んだ2段掘りの構造をなしている。この中で30号土壙墓は、1次墓壙の西側にある。墓壙は、幅が48cm、長さが222cmの長楕円形プランを呈し、深さが42cmの壁面は垂直に立ち上がる。この2次墓壙の南小口壁上には、幅が35cm、長さが68cm、厚さが10cmの花崗岩の板石が横架されており、この下に頭部を埋置した標石墓と考えられる。また、東側壁に沿った胸の位置に鉄鎌と刀子が重ねて副葬されていた。主軸方位はN-11°-Wにとる。

67は、長さが12cm、身幅が2.1cm、背厚は0.3cmの鎌。柄に装着する基部はU字状に折り返し、刃部は浅く内彎し、先端は小さく鍔状に曲がる。68は、刀子。刀部の長さは7.9cm、背厚は0.4cmで闊は0.25cm。背の棱は明瞭で刃部も鋭利である。

31号土壙墓 SR-31 (Fig.37-38 卷頭PL.4-PL.20)

31号土壙墓は、調査区の北側斜面に沿って丘陵頂から北西に延びた細い尾根の端部に拡がる墳墓群の中にあり、すぐ南西には37・59号土壙墓が主軸を直交するように位置している。墓壙は、はじめに幅が190cm、長さが260cmほどの堅穴を掘り、その中に30号土壙墓と主軸方位を揃えるようにして2次墓壙を掘り込んだ2段掘りの構造をなしている。この中で31号土壙墓は、1次墓壙の東側に位置する。墓壙は、幅が55~70cm、長さが215cmの長楕円形プランを呈し、垂直に立ち上がる壁面は深さが46cmを測る。この2次墓壙の南小口壁上には、幅が35cm、長さが70cm、厚さが12cmの板状の花崗岩が横架されており、この下に頭部を埋置した標石墓と考えられる。また、頭部横に南東隔壁際には鉄斧と鎚が重ねた状態で副葬されていた。主軸方位はN-4°-Eにとる。

69は、鎚。基部と刃先を欠くが、長さは22.2cm、厚さは0.3cm。刃部は、刀子状の片刃で内面に

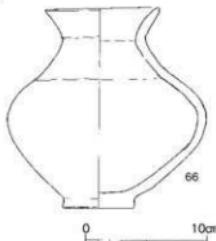


Fig.34 46号壺棺墓副葬
小壺実測図(1/4)

0.9cm反り、外面には細かい布目痕がある。70は、鍛造鉄斧。基部は、袋状に折り返す。鋭利な刃部はバチ形をなし、幅は5.2cm。背厚は0.7cm、身厚は1.3cm、長さが11.6cm。身には目の粗い布目痕が銷着している。未分析であるが、目の細かい鉈は絹、粗い鉄斧は麻の可能性が考えられる。

33号土壤墓 SR-33 (Fig.39 PL.8)

33号土壤墓は、調査区の北斜面に拡がる墳墓群の北西部にある土壤墓で、南～南西方には34・36号土壤墓が縦に並ぶように位置している。平面形は、幅が75～83cm、長さが183cmの長方形プランを呈し、壁高が50cmの壁面は急峻に立ち上がる。床面は、フラットで断面形は浅い凹レンズ状をなしている。小口壁の両隅には5～10cmほどのシャープな抉り込みがある。これは側板材の打設によって生じた擦過溝で、側板材で小口板を挟み込んだ木棺墓と考えられる。板材の背面には、真砂土を含んだ暗褐色度が充填されていた。主軸方位はN-47°-Wにくる。覆土中からは、土器細片がわずかに出土した。

34号土壤墓

SR-34 (Fig.39 PL.8)

34号土壤墓は、調査区の北斜面に拡がる墳墓群の北西部にある土壤墓で、西は20号方形周溝墓の西周溝で囲まれている。また、北には33号土壤墓、南には35号土壤墓が並ぶよう位置している。墓壙は、幅が105cm、長さが180cmの長方形プランを呈し、壁面は急峻に立ち上がる。床面は、西小口壁にむかって緩く傾斜しており、その小口壁に沿って深さが10cm、幅が55cmの2次墓壙の掘り込みが70cmほど東へ延びて消失している。ただし、これが2次墓壙かは即断し

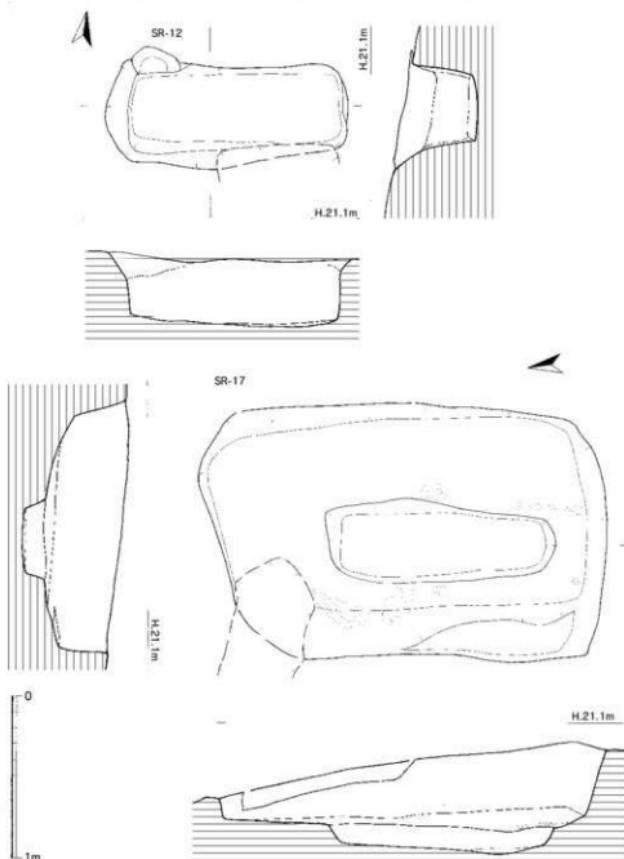


Fig.35 12・17号土壤墓実測図 (1 / 30)

難い。主軸方位はN-75°-Wにとる。覆土は、明黄褐色～灰黄褐色・黒褐色土で、遺物は出土しなかった。

35号土壙墓 SR-35

(Fig.39·40 PL.8)

35号土壙墓は、調査区の北斜面に拡がる墳墓群の北西部にある土壙墓で、すぐ北には33・34号土壙墓が、並列的に位置している。西小口壁は、38号土坑に削平されているが、墓壙は、はじめに幅が90cm、長さが175cm+aの長方形プランの堅穴を掘り、その壙央に幅が50~65cm、長さが135cmの長楕円形プランの2次墓壙を掘り込んだ2段掘りの構造をなしている。2次墓壙の深さは10~15cmと浅く、この上縁に木蓋を被せるには不都合

であることからここに板材を立て挟んだ木棺墓の可能性が考えられなくもない。1次墓壙の壁面は、急峻に立ち上がり、床面はほぼフラットである。主軸方位はN-53°-Wにとる。覆土は、黄褐色粘土ブロックを含んだ暗褐色～黒褐色土で、打製石錐3点が出土した。

71~75は、打製石錐。71・75は、丁寧な押圧剥離加工の局部磨削製石錐。横断面は凸レンズ状をなし、基部は平基。72・74は、押圧剥離加工で横断面は凸レンズ状。基部は小さく内彎している。74は、長さが2.8cm、基部幅が1.5cm。73は、有歯形石錐。

36号土壙墓 SR-36 (Fig.41 PL.9)

36号土壙墓は、調査区北斜面の北西方に細長く延びる尾根に拡がる墳墓群中にあり、すぐ東には34号土壙墓が、西には37号土壙墓が縦列的に位置している。土壙墓は、幅が88cm、長さが145cmの長方形プランを呈し、壁高が57cmの壁面はやや緩やかに立ち上がる。床面は、平坦である。主軸方位は、N-58°-Wにとる。覆土は黒色～灰黄色土で、遺物は何も出土しなかった。

37号土壙墓 SR-37 (Fig.41)

37号土壙墓は、調査区の北西方に細長く延びる尾根の先端部に拡がる墳墓群中にあり、すぐ西には59号土壙墓が縦列的に位置している。土壙墓は、幅が75cm、長さが230cmの隅丸長方形プランを呈し、西小口壁側は23号甕棺墓に切られている。壁面は、急峻に立ち上がるが東小口壁はやや緩やかに立ち上がる。床面は、ほぼ平坦であるが、西小口壁から東小口壁にもむかって緩やかに傾斜している。主軸方位は、N-81°-Wにとる。覆土は暗茶褐色土の単一層で、遺物は何も出土しなかった。

43号土壙墓 SR-43 (Fig.41·42)

43号土壙墓は、調査区を南北に延びる尾根の北端から北西方に派生した細尾根の先端部に位置し、

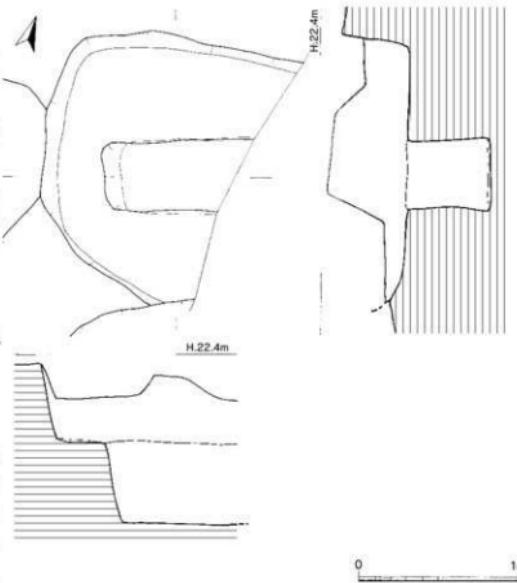


Fig.36 21号土壙墓実測図 (1 / 30)

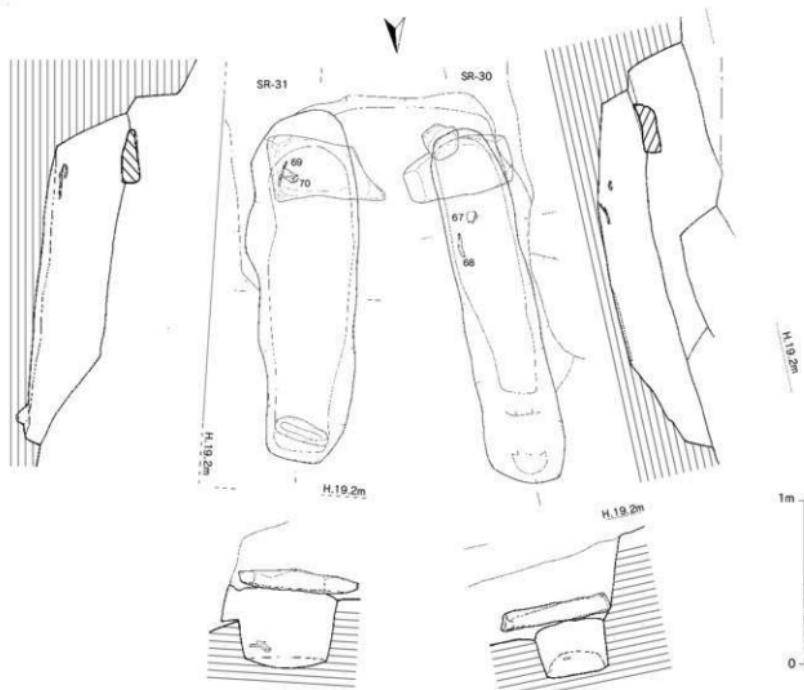


Fig.37 30・31号土壤墓実測図(1／30)

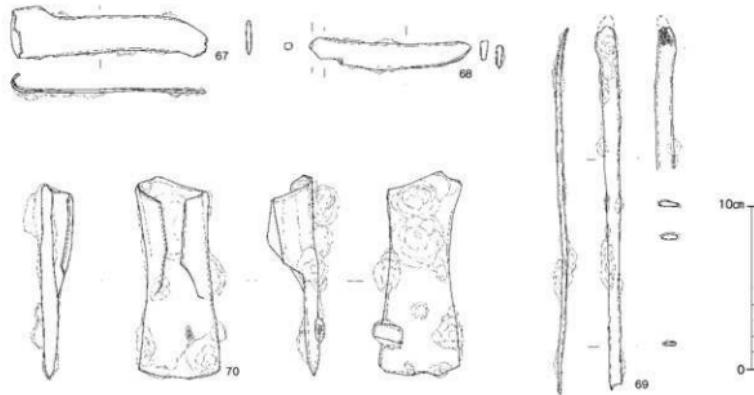


Fig.38 30・31号土壤墓出土遺物実測図(1／3)

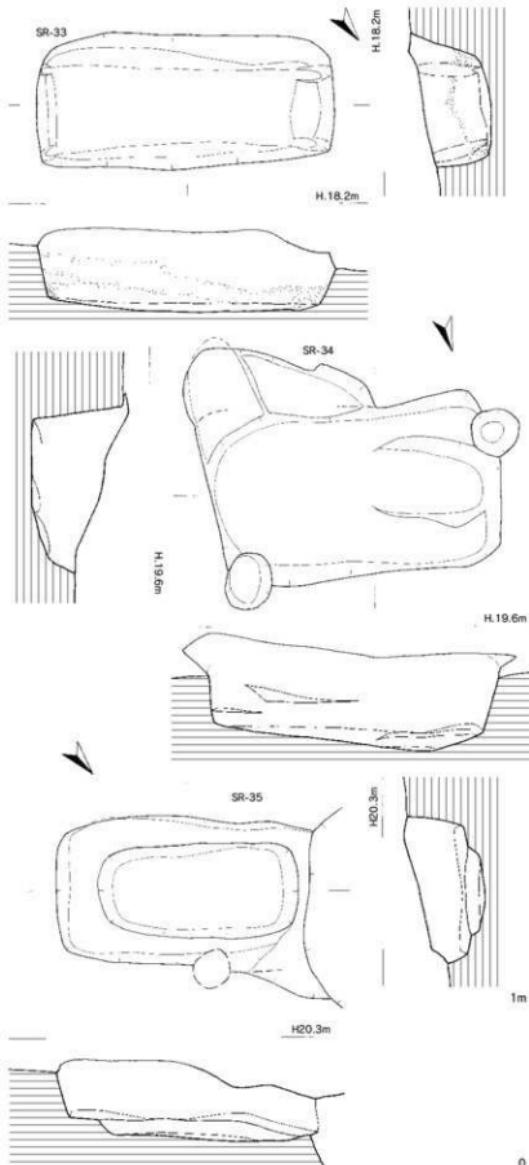


Fig.39 33・34・35号土壤墓実測図 (1/30)

東小口壁側は46号壺棺墓に削平されている。そのために全容は明らかでないが、平面形は、幅が70cm、長さが120~130cmに復原される側壁がやや膨らんだ長方形プランを呈する。壁高が37cmの壁面は、やや緩やかに立ち上がる。床面は、中央がやや高く、側壁側は西から東へむかって低くなる。主軸方位はN-73°-Eにとる。覆土は、一部に黄褐色粘土部録を含んだ淡黒褐色土の単一層で、灰白色土器片が出土した。

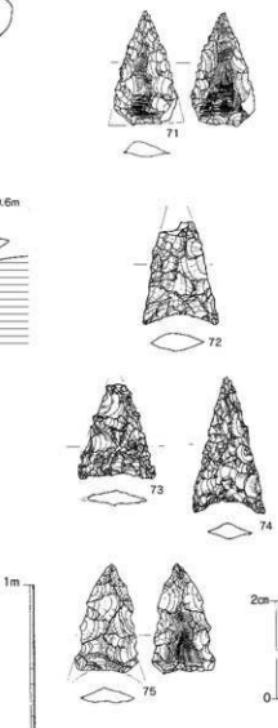


Fig.40 35号土壤墓出土遺物実測図 (1/1)

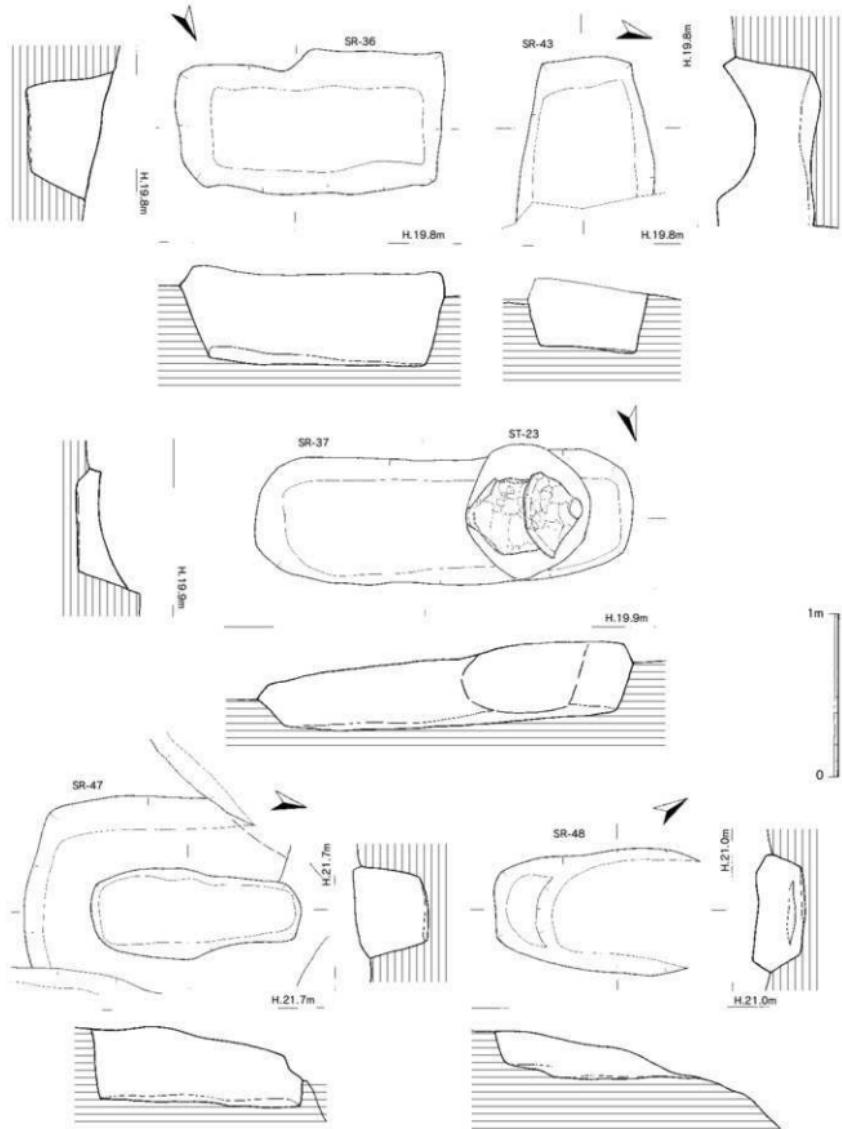


Fig.41 36・37・43・47・48号土壤墓実測図 (1 / 30)

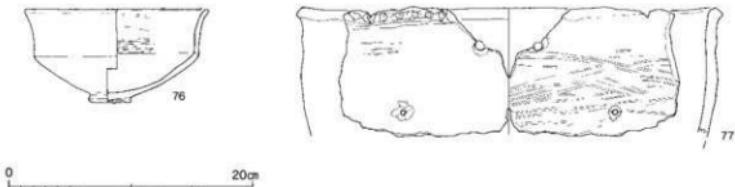


Fig.42 43号土壤墓出土遺物実測図 (1/4)

76は、口径が15cm、器高が7.7cm浅鉢。口縁部は、直口する頭部から小さく外反する。底径が3.4cmの底部は、浅い高台状をなす。口頭部はヨコナデ、体部はナデ。胎土は、精良で小砂粒を含む。淡黄橙色。77は、口径が34.8cmの壺。口縁部は、直口して立ち上がる胴部端に粘土紐を貼付けて摘み出し、その外唇に刻み目を施している。口縁部はヨコナデ、胴部内面は条痕、内面はナデで煤が付着している。2ヶ所に円孔がある。胎土は、精良で僅少の小砂粒を含む。外面は黄褐色、内面は暗褐色。

47号土壤墓 SR-47 (Fig.41 PL.9)

47号土壤墓は、調査区北斜面の西寄りにあり、西側壁を48号土壤墓に、東側壁を50号土壤墓に削平されている。墓壙は、はじめに幅が150cm、長さが220cmほどの竪穴を掘り、その壙央に長さが129cm、幅が40~55cmの楕円形プランの2次墓壙を掘り込む2段掘りの構造をなしている。この2次墓壙の小口壁幅は、北側が40cm、南側が55cmと差異があり、その形状から南小口壁を頭位としたとも推考される。壁高が45cmの壁面は、急峻に立ち上がり床面は浅い凹レンズ状をなす。断面形は、箱形。主軸方位はN-12.5°-Wにとる。遺物は未出土。

48号土壤墓 SR-48 (Fig.41 PL.9)

48号土壤墓は、調査区北の最高所から北西に延びる細尾根上に拡がる墳墓群のやや高みにある土壤墓で、東側壁は47号土壤墓を切り、北小口壁は29号溝に削平されている。平面形は、幅が75cmの長方形プランを呈し、南小口壁には床面から5cmほど上に幅が40cm、奥行きが18cmの小さなテラスを造っている。浅い凹レンズ状をなし、深さが30cmの壁面はやや緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-28°-E。覆土は、暗茶~淡黒茶褐色土で遺物は何も出土しなかった。

49号土壤墓 SR-49 (Fig.43 PL.9)

49号土壤墓は、調査区の北斜面に拡がる墳墓群のほぼ中央部に位置し、南東隅壁は17号土壤墓に、北西隅壁は20号方形周溝墓の西周溝に切られている。床面は、幅が175cm、長さが230cm+aに復原される長方形プランをなす。西側壁から35cm、東側壁から55cmの床面には、幅が15~20cm、深さが6~9cmの浅い溝が壁面に沿って掘り込まれているが、南小口壁下には掘り込まれていない。これはこの溝に側板を打ち込み、小口板をその側板で挟み込んだ木棺墓と考えられる。主軸方位はN-24°-Wにとる。覆土は、暗茶褐色土で副葬品等の遺物は土器小片がわずかに出土した。

50号土壤墓 SR-50 (Fig.43)

50号土壤墓は、調査区の北斜面に拡がる墳墓群中のほぼ中央部に位置し、その上縁は20号方形周溝墓の西側周溝に、北西隅壁は、29号溝によって削平されている。墓壙は、はじめに幅が120cm、長さが225cmほどの竪穴を掘り、その中央の幅が40cm、長さが140cmの2次墓壙を掘り込む2段掘りの構造をなしている。1次墓壙の壁面はやや緩やかに、2次墓壙は急峻に立ち上がり、床面は浅い凹レンズ状をなしている。主軸方位はN-4°-Eにとる。遺物は何も出土しなかった。

55号土壤墓 SR-55 (Fig.43 PL.10)

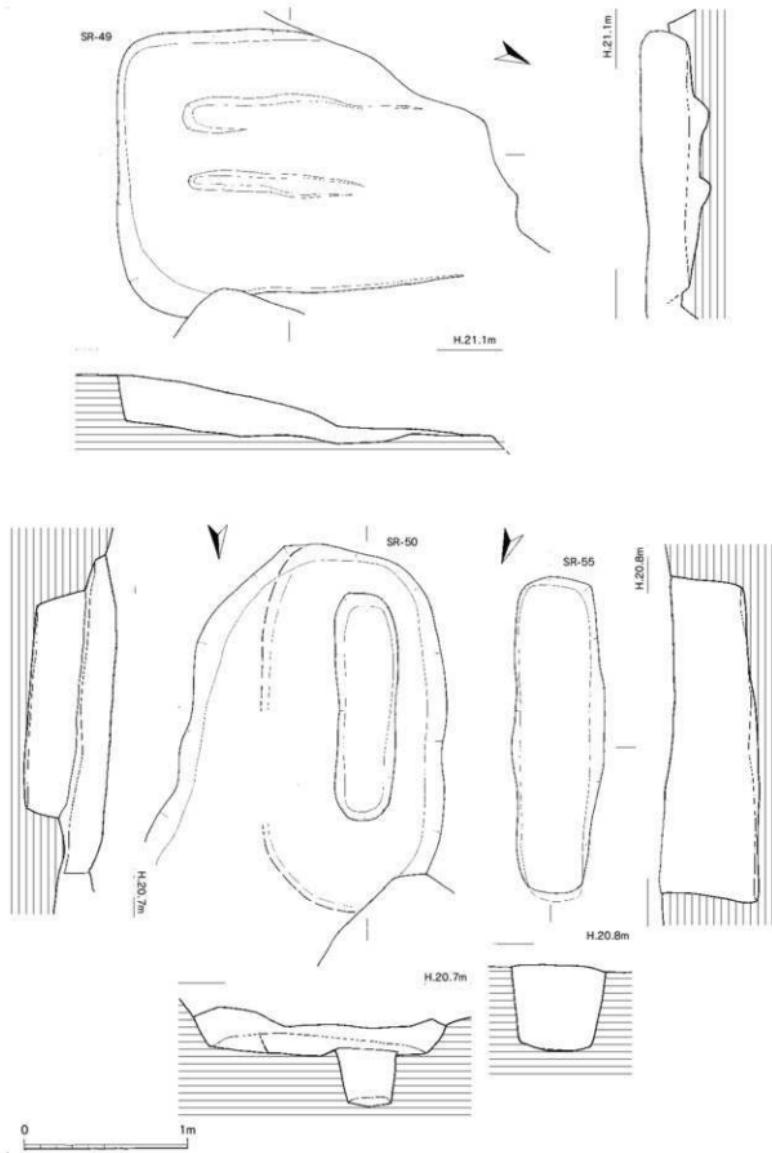


Fig.43 49・50・55号土壤墓実測図 (1 / 30)

55号土壙墓は、調査区北西部の緩斜面上に位置し、北小口壁は53号溝に切られている。墓壙は、幅が55cm、長さが200cm、深さが60cmの長方形プランをなす。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がるが、北小口壁は、袋状に小さく内湾して立ち上がる。浅い凹レンズ状の床面は、北小口壁にむかって緩やかに傾斜し、断面形は箱型をなす。南小口壁幅が47cm、北小口幅が38cmであることから南を頭位、北を足位としたものであろう。主軸方位はN-11°-Wにとり、遺物は弥生土器と土師器の小片がわずかに出土した。

58号土壙墓 SR-58 (Fig.44)

58号土壙墓は、調査区の北斜面上縁に沿って拡がる墳墓群の東端に位置する土壙墓で、2m東には51号甕棺墓がある。上縁は14号貯蔵穴によって削平されている。そのため全容は明らかでないが、平面形は、幅が57cmの隅丸長方形プランを呈し、長さは130~150cmほどに復原される。壁高が48cmの壁面は急峻に立ち上がり、床面はフラットで断面形は箱型をなす。主軸方位はN-57°-Eにとる。遺物は出土しなかった。

59号土壙墓 SR-59 (Fig.44)

59号土壙墓は、調査区の北西に細長く延びる尾根の先端部に拡がる墳墓群中にあり、すぐ東には37号土壙墓が、西には43号土壙墓が縦列的に位置している。土壙墓は、幅が85~115cm、長さが180cmの長方形プランを呈し、その中央部には24号甕棺墓が掘り込まれている。壁面は、急峻に立ち上がり、壁高は36cm。床面は、浅い凹レンズ状をなしている。主軸方位は、N-85°-Eにとる。覆土は暗茶褐色土の單一層で、遺物は何も出土しなかった。

65号土壙墓 SR-65 (Fig.45)

65号土壙墓は、調査区を南北に延びる尾根が緩やかなフラット面を形成する南部に位置し、その上縁は63号方形周溝墓の北周溝によって削平されている。平面形は、幅が65cm、長さが229cmの隅丸長方形プランを呈する。深さが63cmの壁面は、垂直に立ち上がり、フラットな床面は、東小口壁下

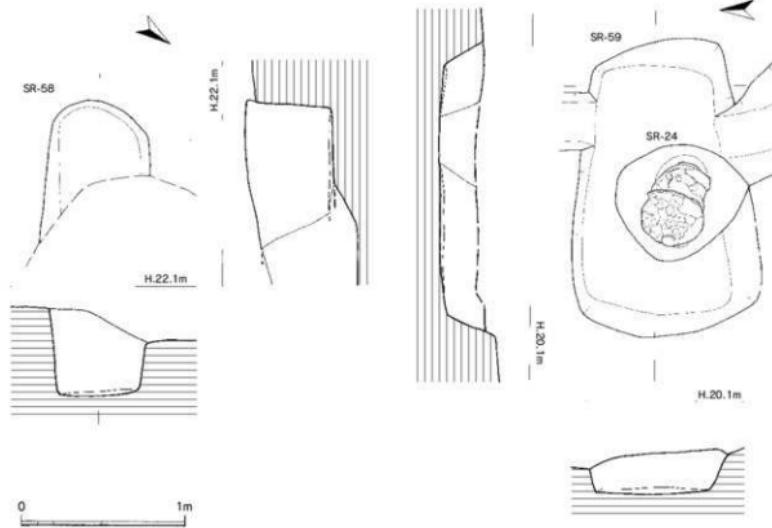


Fig.44 58・59号土壙墓実測図 (1/30)

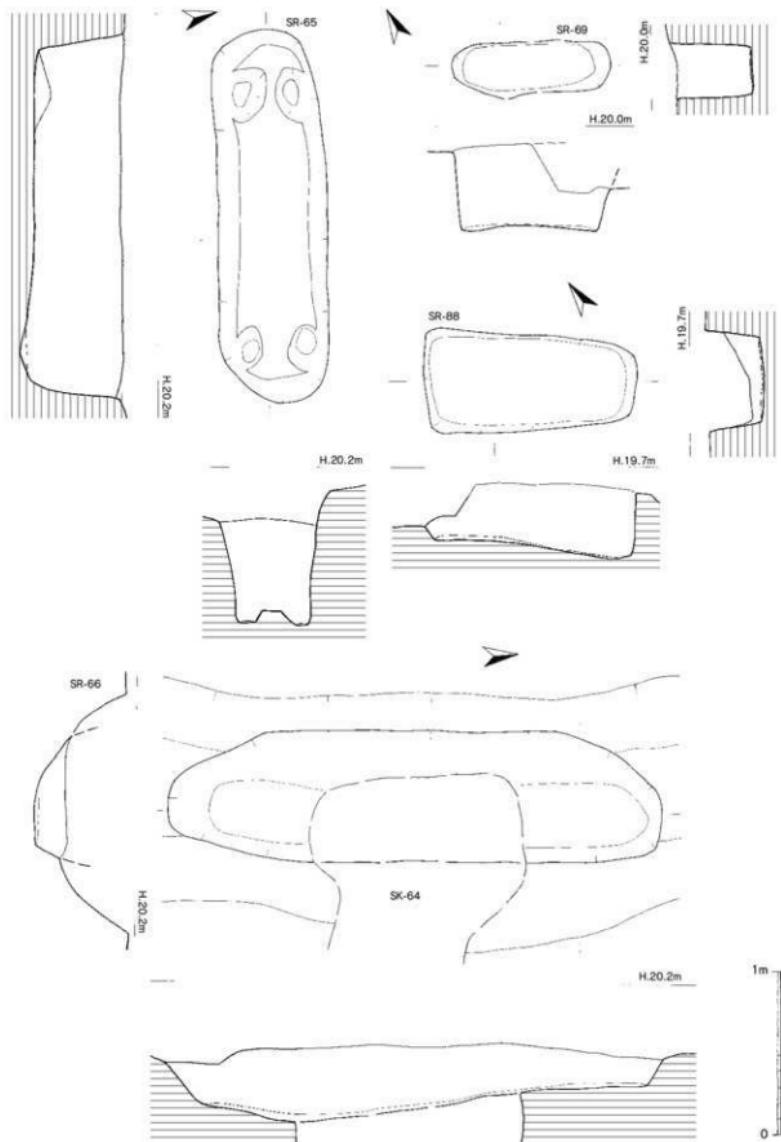


Fig.45 65・66・69・88号土壤墓実測図 (1 / 30)

が6~7cmほど低くなっている。小口壁下には、側壁に沿うような幅が15~20cm、長さが25~34cmの楕円形の掘り込みがある。

これは板材を固定した角石の抜跡と考えられ、木棺墓の可能性が高い。主軸方位はN-89.5°-Eにとる。覆土中からは、弥生土器と土師器細片がわずかに出土した。

66号土壙墓 SR-66 (Fig.45 PL.13)

66号土壙墓は、調査区南側の緩斜面に位置する63号方形周溝墓の東周溝の中にある大型の土壙墓である。東側壁が64号土坑に削平されているが、平面形は、幅が80cm、長さが303cmの葉巻状の楕円形プランを呈する。残存する壁高は、23cmであるが方形周溝墓の検出レヴェルを勘案すると60cmほどに復原され、壁面は緩やかに立ち上がる。断面形は、浅い舟底状をなし、床面は北から南へ緩やかに傾斜している。主軸方位はN-35°-Eにとる。遺物は、弥生土器小片がわずかに出土した。

69号土壙墓 SR-69 (Fig.45 PL.13)

69号土壙墓は、調査区を南北に延びる尾根が緩やかなフラット面を形成する南部に位置し、東半部は63号方形周溝墓の主体部によって削平されている。平面形は、幅が32cm、長さが98cmの長楕円形プランを呈する。深さが53cmの壁面は、東小口壁が緩やかなほかは垂直に立ち上がる。フラットな床面は、西小口壁から壙央にむかって高まった後に再び東小口壁へむかって下がっている。主軸方位はN-60°-Wにとる。遺物は出土しなかった。

71号土壙墓 SR-71 (Fig.46-47 PL.10-20)

71号土壙墓は、調査区南側の緩斜面上にある石蓋土壙墓で、77号住居の埋土上に掘り込まれている。平面形は、幅が40cm、長さが96cmの隅丸長方形プランを呈する。壁高が46cmの壁面は急峻に立ち上がる。床面はフラットで、床面には2~3cmの黄灰褐色土を敷き詰め、その上面に1cmに満たない厚さでベンガラを敷いている。土壙墓上には、55×70cm、厚さが6cmの頁岩質の板石と33cm×65cm、厚さが15cmの花崗岩を蓋石として被せているが、東側壁は住居の緩い埋土のために壁面の崩落がある。花崗岩の蓋石から北へ20cmの地点に鉄鎌が棺外副葬されていた。また埋土中からは土師器細片がわずかに出土した。棺外覆土中からは土

師器細片がわずかに出土した。主軸方位は、N-39°-Eにとる。

78は、基部の折り返しを欠く鎌で、柄の装着を安定するために0.2cmの段差がある。刃部の長さは18.4cm、明瞭な稜を作る背の厚さは0.3cm。大きく内湾する刃部の幅は3.5~4.4cmで先端は鍔状に鋭く曲がる。

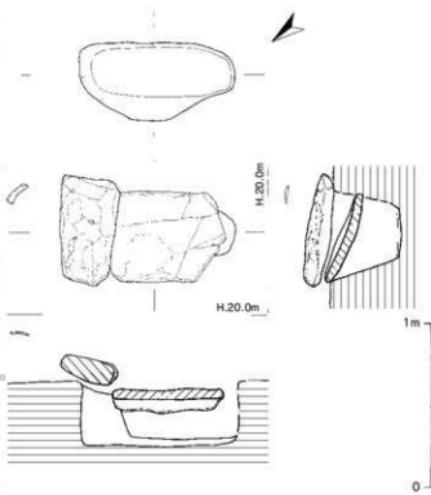


Fig.46 71号土壙墓実測図 (1/30)

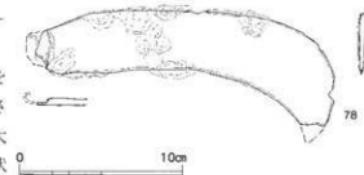


Fig.47 71号土壙墓出土遺物実測図 (1/3)

Tab. 3 土壙墓一覧表

遺構 No	形 式	墓壙形態	法 量		主軸方位	時 期	備 考
			長軸×短軸×深(cm)	長軸×短軸×深(cm)			
SR-12	土壙墓	2段掘り長方形	150+a×75×50	137×50×35	N.84°-E	弥生末?	木蓋の木棺墓?
SR-17	土壙墓	2段掘り長方形	254×155×69	140×55×69	N.7°-E	弥生末?	SR-49→SR-17 壁床上にベンガラ散布。中央部に枕石状の粘土塊
SR-21	土壙墓	2段掘り長方形	160+a×170×100	90×44×52	N.72.5°-E		木蓋上壙墓か?
SR-30	標石墓	2段掘り長方形	250+a×190×40	222×48×42	N.11°-W		S R-31と同一墓域。鉄鏪・刀子副葬
SR-31	標石墓	2段掘り長方形	250+a×190×40	215×55~70×46	N.4°-E		S R-30と同一墓域。鉄斧・鍔副葬
SR-33	木棺墓	2段掘り長方形	183×82×52		N.47°-W		
SR-34	土壙墓	長方形	180×105×60		N.75°-W		
SR-35	木棺墓?	2段掘り長方形	175+a×90×45	135×60×25	N.53°-W	S K-38→S R-35、打製石器5点	
SR-36	土壙墓	長方形	145×88×57		N.58°-W		
SR-37	土壙墓	長方形	232×75×53		N.81°-W	SR-37→ST-23	
SR-43	土壙墓	長方形	115+a×70×37		N.73°-E	SR-43→ST-46	
SR-47	土壙墓	2段掘り長方形	195×140×18	129×55×40	N.12.5°-W	SR-43→ST-46	
SR-48	土壙墓	長方形	120+a×75×30		N.28°-E	SR-47→SR-48+SD-29	
SR-49	木棺墓	長方形	230+a×175×37	125+a×45×35	N.24°-W	弥生末?	
SR-50	土壙墓	2段掘り長方形	225×120×55	140×40×32	N.4°-E	SR-50→S D-29	
SR-55	土壙墓	長方形	195×55×53		N.11°-W	後期	SD-53→SR-55
SR-58	土壙墓	隅丸長方形	130~150 (?) ×57×48		N.57°-E	前期	SR-58→SU-14
SR-59	土壙墓	長方形	180×85~117×36+a		N.85°-W		SR-59→ST-24
SR-65	土壙墓	長方形	229×65×63		N.85°-E	S D-62との切り合い不詳→要確認	
SR-66	土壙墓	長方形	302×81×45		N.3.5°-E	S R-66→SK-64→S-63	
SR-69	土壙墓	長方形	98×32×53		N.60°-W	S R-63→S R-69	
SR-71	石蓋土壙墓	長方形	96×40×46		N.39°-E	後期	SR-71→S P 123 鉄鏪棺外副葬
SR-72	土壙墓	長方形	232×67×44		N.27°-E	古墳後期	S R-72→S R-73 金環副葬
SR-88	土壙墓	長方形	130×50~65×45		N.52°-W		

88号土壙墓 SR-88 (Fig.45)

88号土壙墓は、調査区の南側に抜がる緩斜面の南端に位置し、西小口壁は63号方形周溝墓の南溝に削平されている。墓壙は、幅が50~65cm、長さが126cmの長方形プランを呈する。壁面は、急峻に立ち上がり、壁高は45cm。床面は、西小口壁から東小口壁にむかって10cmの比高差で低くなっている。断面形は箱形である。主軸方位は、N-52°-Wにとる。遺物は何ら出土しなかった。

5) 土 坑 (S K)

9号土坑 SK-09 (Fig.48・49 PL.11)

9号土坑は、調査区北斜面の東寄りに位置し、北半部は10号土坑によって削平されている。平面形は、幅が115cmの長方形プランを呈し、長さは…cmほどになろうか。高さが90cmの壁面は、急峻に立ち上がり、坑底は平坦で断面形は箱形をなす。覆土は、黒~暗茶褐色土の單一層で石斧片や弥生土器小片がわずかに出土した。

79は、玄武岩の太型蛤刃石斧。80は、身幅が3.1cm、厚さが3.4cmの柱状片刃石斧片。貞岩質。

10号土坑 SK-10 (Fig.48・50・51 PL.11-17)

10号土坑は、調査区北斜面のやや東寄りに位置し、南壁は9号土坑を切り、その上縁は20号方形周溝墓の北周溝に削平されている。平面形は、南北長が210cm、東西長が265cmの楕円形プランを呈する。坑底は、凹レンズ状をなし壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は、黒~黑茶褐色土で坑底からは弥生前期の壺や甕、石斧片、鐸型土器製品が出土したほかに上層からは鋤先口縁壺や須恵器壺などが出土した。

82は、壺の頸部から胴部片。胴部と頸部の境屈曲面に2条の凹線を巡らし、その下の胴部にタテ方

向の凹線を6条施文している。全体としてヨコ凹線間に6~8条単位のタテ凹線を施文するタイプであろう。凹線はいずれもヘラ描き。83は、鋤先口縁の壺で頸部は直口ぎみに立ち上がり、緩やかに外反しながら口縁部に至る。84は、底径が4.8cmの小型壺。口縁部は、直口ぎみの頭部から緩やかに外反し、内面に弱い稜を作る。胴部は、玉葱状の偏球形で頸部との境には1条のシャープな三角凸帯が巡る。淡明赤橙色。85は、底径が5.2cmの小型壺。胴部は肩の張った偏球形で内傾する頸部との境には小さく摘み出した三角凸帯が巡る。淡黒灰色~淡茶褐色。86は、底径が9cmの中型壺。胴部は肩の張った偏球形をなす。明黄橙色。87は、底径が10.8cmの壺底部。88は、壺の底部で底径は8.4cm。

89~94・96~102は、甕。89は、口縁部が短く「く」字状に外反する甕で、口径は21.9cm。くすんだ黄橙色。底径は101が7.4cm。100は、7.2cm。98は6.2cm。91は、口径が24cm、底径が7.8cm、器高が30cmの上げ底の甕。砲弾状の胴部は直口ぎみに立ち上がり、口縁部は短いL字状をなす。外面は目幅が2mmの粗いタテハケ目、内面は押圧ナデ。外底面には2次被熱による赤変がある。くすんだ淡黄橙色。90は、口縁部が短く外反する甕で口径は23cm。押圧ナデ仕上げの外面には2次被熱による赤変がある。91は、口径が24cm、底径が7.8cm、器高が30cm。口縁部は短い逆L字状をなす。外面は目幅の粗いハケ目、内面は押圧ナデ。胎土は粗く細~中砂粒が多く含む。外底面には2次被熱による赤変がある。93は、口径が14.4cm。口縁部は外縁に粘土紐を貼り付けて凸帯状に摘み出している。96~102は、底部。底径が96~97が8cm、99が7.2cm。95は、口径が23.6cmの鉢。口縁部は、短い半球形の胴部からのびて小さく外方に摘み出す。103は、天井部径が6.4cmの甕蓋。体部は大きく反りぎみに開く。濃赤橙色。104は、口径が8cm、器高が7.4cmの小型壺。口縁部は、球形の胴部から緩やかに外反する。淡明黄橙色。105は、口径が15.2cm、底径が9cmの生焼けの須恵器坏。107は、細石刃片。108は、鐸型土製品で下端部を欠く。天井幅は3.42~3.73cm、裾幅は6.24~7.47cmで立面的には台形状をなしている。裾には、横から中央までと下から直交する孔を竹管状工具で抉入している。胎土は精良で雲母微細と赤鉄鉱塊を含み、明赤橙色。109

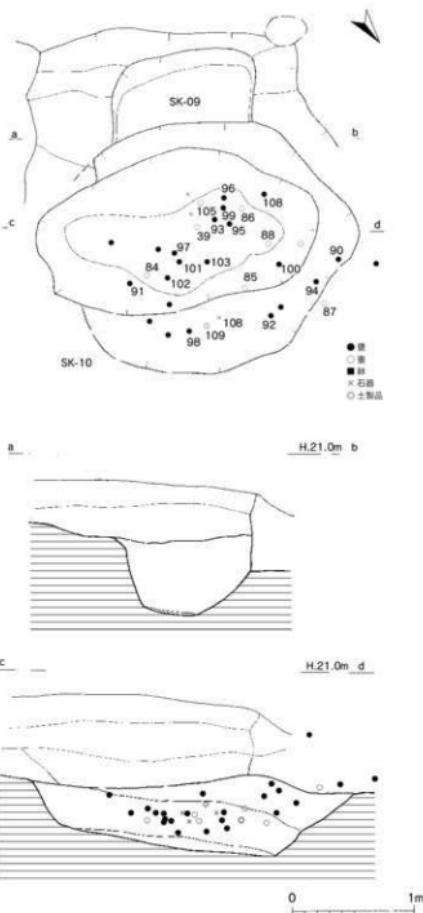


Fig.48 9・10号土坑実測図 (1/40)

は、玄武岩の大型蛤刃石斧片。

11号土坑 SK-11 (Fig49・52)

11号土坑は、調査区北斜面の東端に位置し、すぐ西には10号土坑がある。平面形は、幅が80cm、長さが125cmの長方形プランを呈し、壁面は急峻に立ち上がる。壁高は75cm。坑底は、浅い凹レンズ状をなし、坑央には直径が23~27cm、深さが21cm逆円錐状のピットがあり、落とし穴の機能を有した可能性が考えられる。遺物は石庖丁片1点が出土した。81は、安山岩質凝灰岩の石庖丁片。背下15cm×0.7cm径の紐通し孔を穿つ。

45号土坑 SK-45 (Fig53)

45号土坑は、調査区北斜面の西寄りにあり、上縁は29号溝に削平されている。平面形は、幅が50cm、長さが92cmの長方形プランを呈する。壁面は、やや緩やかに立ち上がり、深さは32cmと浅いが本来は50~60cmであった可能性がある。北側壁の15cmほど上面には小型丸底壺があり、これが土坑に伴うものか溝に伴うものかは即断しがたい。プラン的には土壙墓の可能性が否定できない。

54号土坑 SK-54 (Fig54・55 PL11-17)

54号土坑は、調査区北部にある3号墳の北西の裾部に位置し、西半部は53号溝に削平されている。平面形は、幅が115~160cmの不整形で坑底は凹凸のある凹レンズ状をなしている。覆土は、黒茶~黒褐色土で、弥生壺、甕、器台片が散乱状態で出土した。

113~122は、上げ底の甕底部。上げ底高は、4~17mmであり、10mm前後がもっとも多い。底径は、113が7.5cm。114~117が6.2cm。115が6.6cm。116が6.6cm。119が7.2cm。120が8.3cm。121が7cm。118~122が6.8cm。123は、口径が4.6cm、底径が5.5cm、器高が11cmの手捏ねの支脚。上縁と下縁は、指先で強く押厚して1cmほど窪み、筒状にはならない。外面には2次被熱による赤変があり、干割れが著しい。111~112は、口縁部を短くL字状に摘み出した甕で、上唇は小さく外傾して細丸く納めている口径は、111が27.8cm、112が20.6cm。124~125は、安山岩質凝灰岩の石庖丁片。125は、背下2cmに紐通し孔がある。

64号土坑 SK-64 (Fig56・57 PL13)

64号土坑は、南側緩斜面の裾部のあり、西壁上縁は63号方形周溝墓の東周溝と66号土壙墓によって削平されている。平面形は、長さが210cm、幅が60~120cm瓢状の不整な楕円形プランを呈する。壁面は、急峻に立ち上がるが北壁は貯藏穴様のラスコ状に膨らむ。床面は、浅い凹レンズ状をなす。覆土は、暗褐色~黒褐色土で坑底には炭屑が薄く堆積していた。遺物は、弥生土器の壺や甕、器台がわずかに出土した。

127は、安山岩質凝灰岩の半月形をした石庖丁片。厚さは0.3~0.7cmで背下2cmに円孔を穿つが、その横に穿ちかけた円孔痕がある。126は、長さが3.4cm、幅が2.82cmの削器。最大厚は0.95cmで重さは7.02g。

78号土坑 SK-78 (Fig58・59 PL11)

78号土坑は、調査区の中央部に位置する3号墳の南墳丘下にあり、111号貯藏穴の埋土上に掘り込まれている。土坑は、径が70~78cmの楕円形プランを呈し、壁

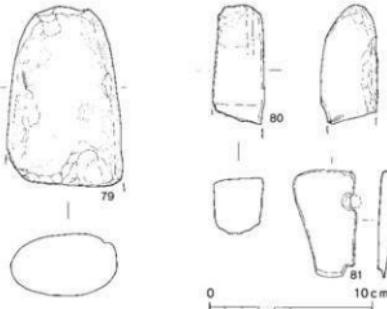


Fig.49 9・11号土坑出土遺物実測図 (1/3)

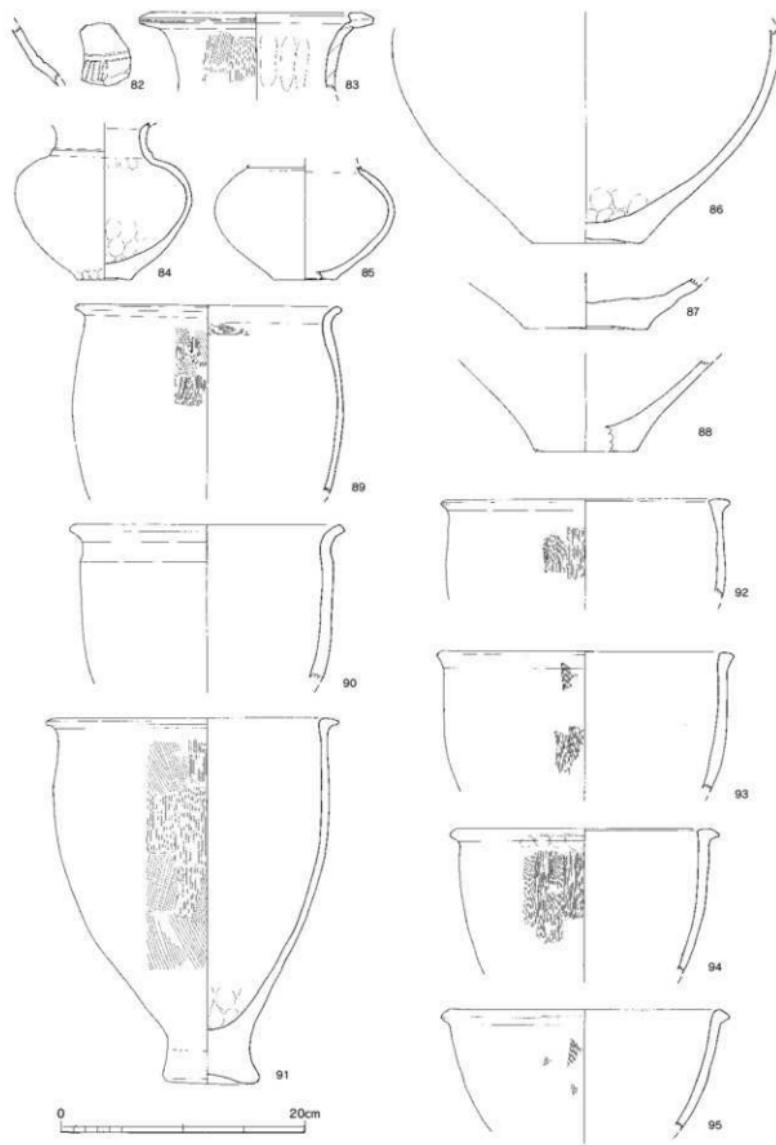


Fig.50 10号土坑出土遺物実測図1 (1/4)

面は急峻に立ち上がる。坑底は、坑央が浅く凹レンズ状に窪む。覆土は、黒色土の單一層で壙底には甕が倒置的な状態で出土した。

128は、口径が21.5~24.6cmの甕で垂みが著しい。口縁部は、如意状に短く外反し口唇部にはヘラ工具による刻み目を7mm間隔で施している。調整は、口縁部内面が粗いハケ目後にヨコナデ、胴部は内面が押圧ナデ、外面は目幅が約2mm粗いハケ目。胎土は粗く、細~石英中砂粒を多く含み、色調は暗橙褐色。

121号土坑 SK-121 (Fig.60・61)

121号土坑は、調査区の北部にある3号墳の北西の裾部にある大型の土坑で、すぐ東には120号貯蔵穴、北西には55号土壙墓が位置している。平面形は、幅が200~305cm、長さが500cmの不整な長方形プランを呈する。坑底は、深い凹レンズ状をなし、壁面は緩やかに立ち上がる。壁高は、傾斜面に

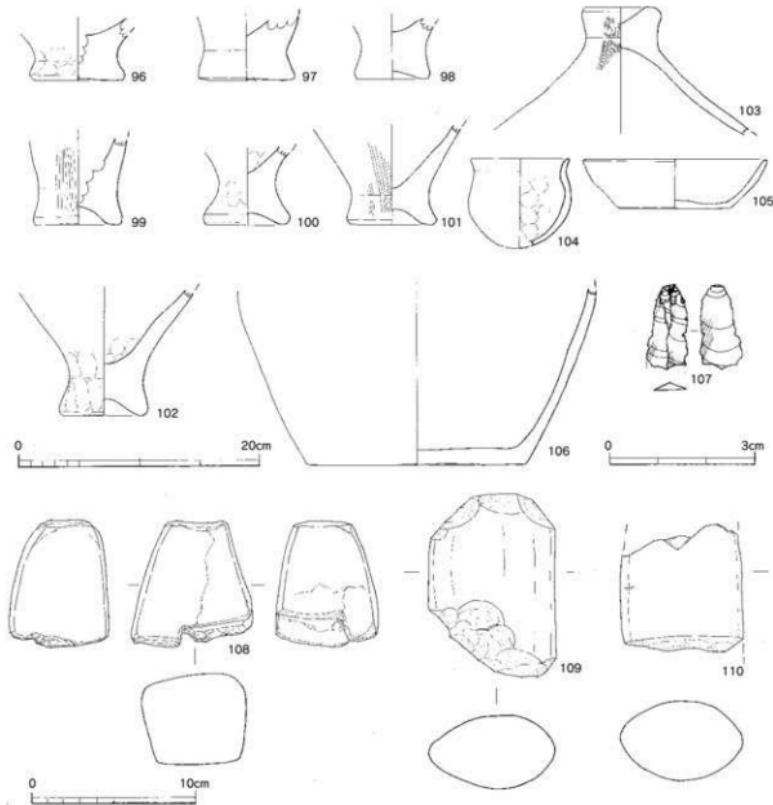


Fig.51 10号土坑出土遺物実測図2 (1/1・1/3・1/4)

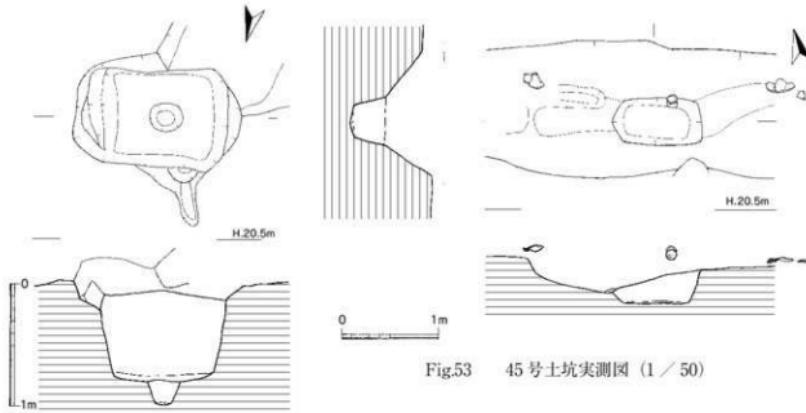
Fig.52 11号土坑実測図
(1/40)

Fig.53 45号土坑実測図 (1/50)

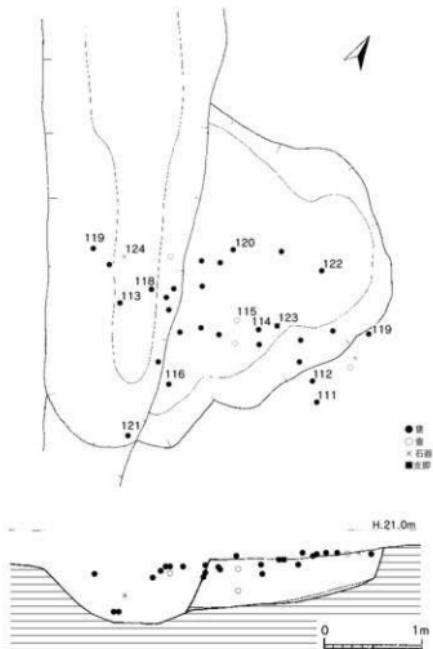


Fig.54 54号土坑実測図 (1/50)

立地する所以か10~50cmと歪である。覆土は暗茶褐色土の單一層で、弥生土器の甕片が出土した。

129~132は、上げ底の甕底部。底径は129が7.5cm、130は7.6cm、131は5.4cm、132は6.2cm。130~132の外面には2次被熱による赤変がある。

5) 溝 (SD)

32号溝 SD-32 (Fig.6-62)

32号溝は、調査区の北西端に位置する溝で、西には31号土壙墓、南には30号土壙墓がある。溝幅は43cm、深さは45~52cmで断面形は逆台形をなし、緩斜面に立地する制約から南が高く、北へむかって低くなっている。遺物は土師器細片がわずかに出土したが、31号土壙墓との前後関係は判然とせず時期決定には至らない。

52号溝 SD-52 (Fig.6-63 PL.17)

52号溝は、3号墳の東側にあり、北から緩やかに蛇行し南へ延びる。北端は、60号貯藏穴を削平し、42号甕棺墓に切られている。溝幅は、北端が450cm、南端が200cmと南へ下るに従って狭くなる。

133は、直径が4.44~4.48cm、厚さが

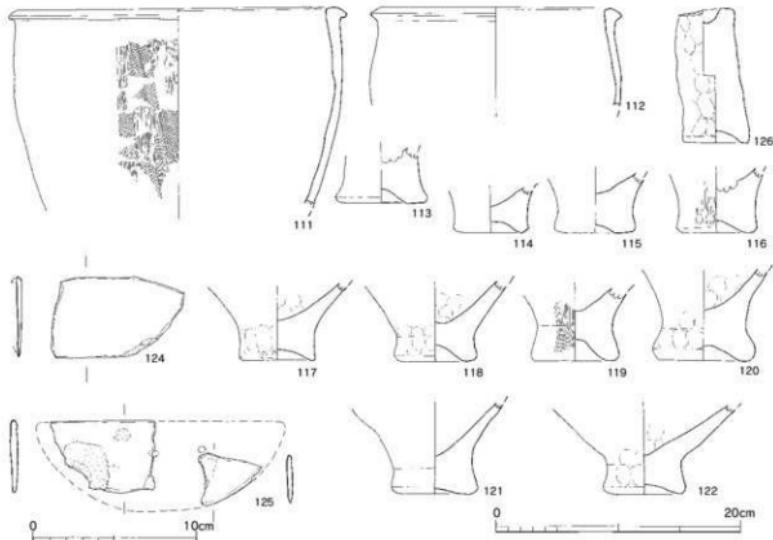


Fig.55 54号土坑出土遗物实测图 (1/3·1/4)

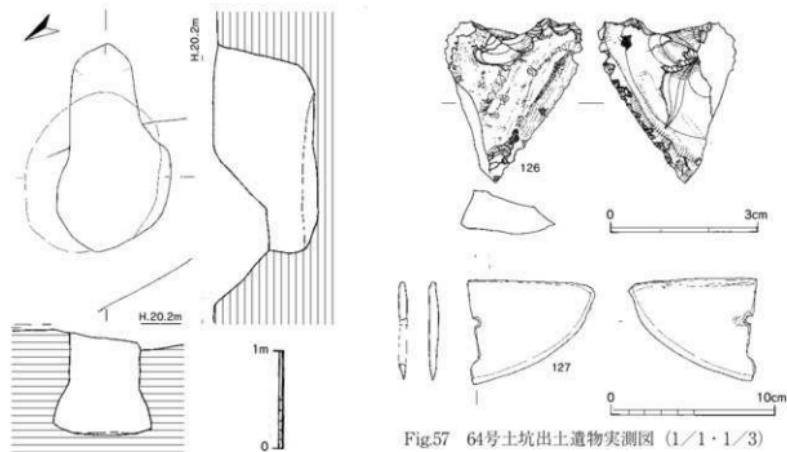
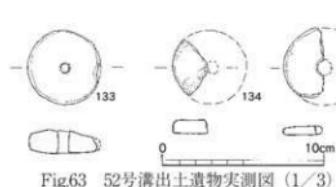
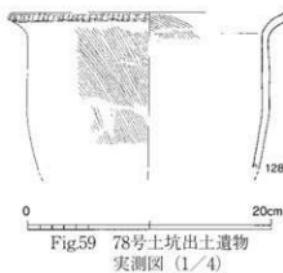
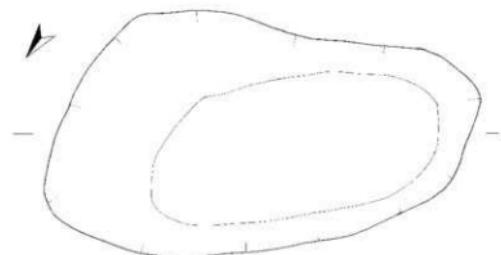
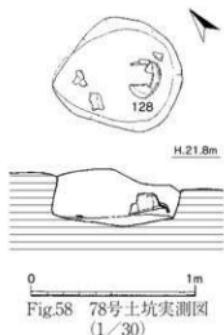


Fig.56 64号土坑实测图 (1/50)

Fig.57 64号土坑出土遗物实测图 (1/1·1/3)



0.92~1.42cm、孔径が0.5cmの土製紡錘車。胎土は粗く、微細~小砂粒を含み、淡黄褐色。重さは25, 9g。134・135は、滑石製紡錘車。134は、厚さが0.73~0.84cm。135は、厚さ0.22~0.53cmで口径は0.8cm。

53号溝 SD-53 (Fig.6)

53号溝は、調査区中央部の西端にあり、54号土坑を削平している。溝幅は150cmで深さは56~61cmの壁面は緩やかに立ち上がる。溝底は凹レンズ状で断面形は舟底状をなし、南東から北西へむかって低くなる傾向がある。遺物は、出土しなかった。

3. 古墳時代の調査

古墳時代の遺構は、事前の踏査や確認調査では、南北に延びる丘陵尾根の頂部にある1基の円墳とその裾野で3基の低墳丘墳が目視確認されていた。同時に確認調査では、北西隅の試掘溝で鉄剣片が出土しており、墳丘は判然としないながらも古墳の存在が十分に予測されていた。ところが結果的には、方形周溝墓2基と円墳2基および後期の土壙墓1基などを検出した。このうち古墳は、丘陵頂部の1基（3号墳）のみが円墳で、低墳丘墳であろうと予測した3基（1・2・4号墳）は、古墳ではないことが判明した。同時に、確認調査時に鉄剣が出土した遺構は細い丘陵尾根を形成した円墳であった。

1) 方形周溝墓 (SG)

20号方形周溝墓 SG-74 (Fig.65~67 PL. 12·13·20)

20号方形周溝墓は、調査区の北側に折る緩斜面の中央部に位置し、構築の際しては17・49・50号土壙墓を削平している。周溝は、北周溝を除いてコ字状の矩形に巡っているが、その地形と比高差を勘案すると北周溝が開削されていたかは即断し難い。南周溝と東周溝の断面形は、壁面が緩やかに立ち上がる舟底状をなしているが、西周溝は削平によるものか浅い箱形をなしている。東西幅は13.3mであり、西周溝が10mを残していることを勘案すれば、周溝墓は、一辺が12~13mの規模で、周溝を含めた墓域面積は156m²、内法面積はおよそ100m²となろうか。未削平の南周溝の幅は180cm、深さは90cm。溝底は凹レンズ状をなし、断面形は緩やかなU字状をなす。周溝内からは、弥生土器壺や甕片と土師器甕、壺のほかに墓壙の埋土中から鉈片が出土している。

主体部は、墓域内中央のやや南周溝寄りの高所に南周溝と主軸方位を揃えるようにして位置している。主体部は、主軸方位をN-70°~Wにとる土壙墓である。墓壙は、はじめに幅が172cm、長さが330cm、深さが47cmの堅穴（1次墓壙）を掘り、その壙央に幅が80cm、長さが260cmの2次墓壙を掘り込んでいる。この2次墓壙の壁面に沿って白色粘土帯を帶状に貼り巡らしている。粘土帯の横断面は、2次墓壙壁から13~18cmほど水平に延びて壙底にむかって緩傾斜している。白色粘土の上層には、腐植土層と思われる黒色土を含んだ灰茶褐色~明灰褐色の粘土層が緩やかな弧を描くように堆積している。この白色粘土帯は、木棺の棺台として機能したものと考えられる。加えて白色粘土上に弧を描く腐植土層があることを勘案すると割竹型木棺の可能性を考えられなくもない。

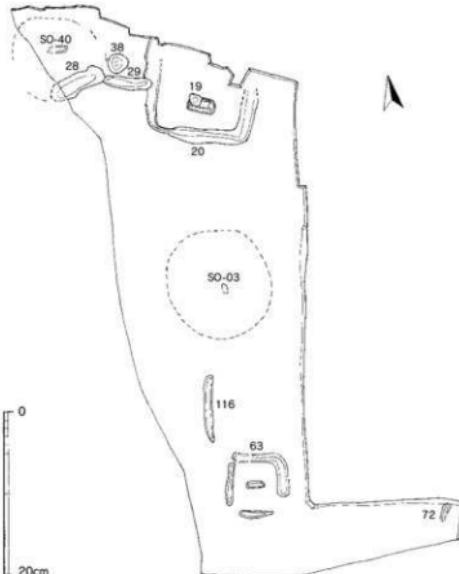


Fig.64 古墳時代の遺構配置図 (1 / 600)

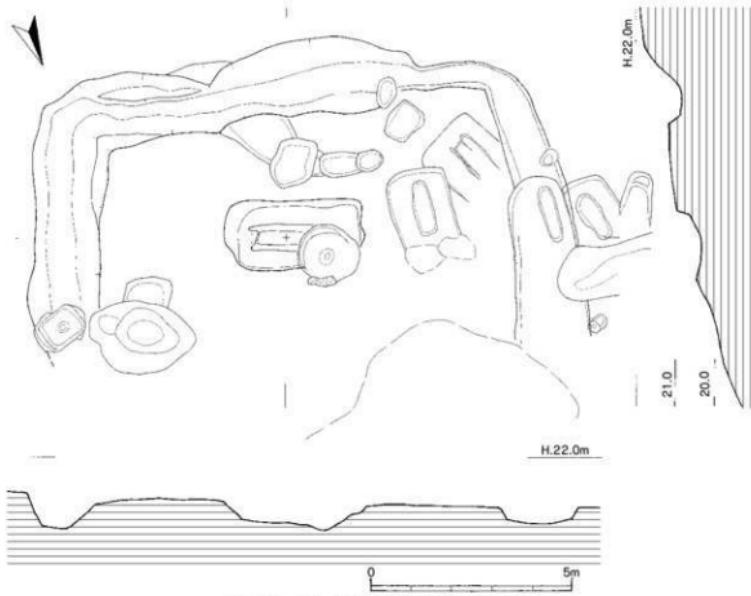


Fig.65 20号方形周溝墓実測図 (1/120)

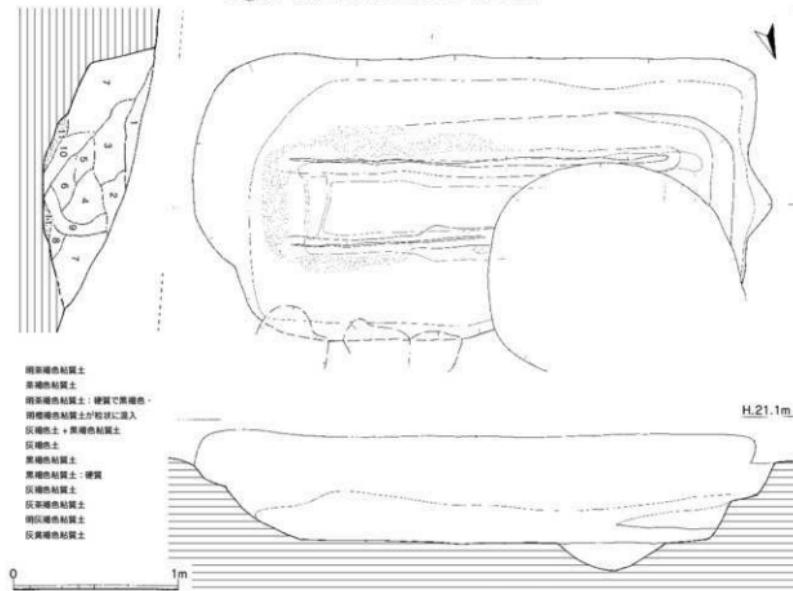


Fig.66 20号方形周溝墓実測図 (1/30)

136は、口径が14.6cmの土師器壺。口縁部は短く直口する頸部からストレートに外反する。胴部外面は細かいハケ目、内面はヘラケズリ。淡明黄橙色。137・138は、鉈片。137は刃部片で内面の反りは浅い。138は、茎片。

63号方形周溝墓

SG-63 (Fig.68~70 PL. 13)

63号方形周溝墓は、3号墳から南北に伸びた尾根が緩やかな平坦面を形成する調査区の南端にある。北周溝は65号土壙墓を、東周溝は66号土壙墓を、南周溝は88号土壙墓を切っている。周溝は、北周溝と東周溝が矩形に繋がる。西周溝と南周溝は各々が単独であり、北西隅と南西隅、南東隅にはブリッジの通路がある。周溝の長さは、南周溝が4.3m、西周溝が5.3mで外法は、東西長が7.8m、南北長が8mあり、墓域面積は64m²、内法面積は33m²で、その中央に体部がある。各周溝の断面形は、逆台形で溝底のレヴェルは北から南へ、東から西へ低くなっている。その築造が地形の傾斜に制約されたことが窺える。周溝内からは土師器壺片や鉈片が出土した。

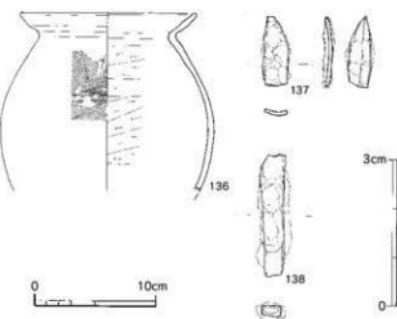


Fig.67 20号方形周溝墓出土遺物実測図
(1/1・1/4)

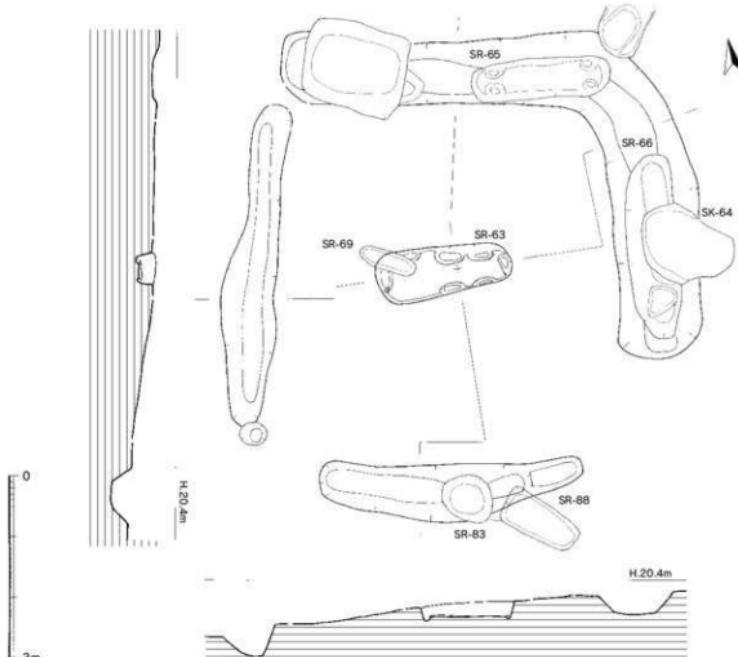


Fig.68 63号方形周溝墓実測図 (1/80)

主体部は、周溝内の中間に位置する土壙墓で北西隔壁は、69号土壙墓を切っている。墓壙は、長さが226cm、幅は西小口幅が86cm、東小口幅が58cmで西に頭位を取ったと考えられる。壁面は急峻に立ち上がり、壙高は40cm。南側壁の西寄りに2ヶ所、北側壁に3ヶ所と両小口壁に各々1ヶ所、長さが33~47cm、幅が15~20cm、深さが7~10cmの楕円形の窪みがある。こ

の窪みは、石材の抜き痕と考えられ、箱式石棺の可能性がある。主軸方位はN-89.5°-W。遺物は、土師器片と弥生土器片がわずかに出土した。

139は、天井幅が4.33~4.7cm、長さが6.2cm+aの鐸型土製品で裾部を欠くが、立面的には長方体をなす。天井には、棒状工具によるタテと直交するT字状の凹みがある。胎土は精緻で焼成は堅致。淡明橙色。140は、頁岩質の扁平片刃石斧片。

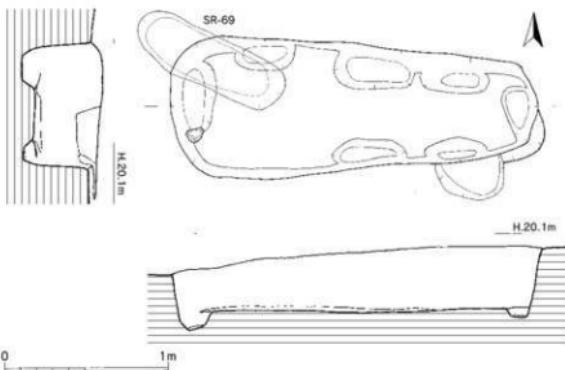


Fig.69 63号方形周溝墓主体部実測図 (1/30)

2) 古墳 (SO)

3号墳 SO-03 (Fig.71~73 PL. 14)

3号墳は、調査区の東寄りを南北に延びる尾根の頂部に位置する円墳で事前の踏査で目視確認されており、現況測量では、直径が13~15mのやや大きい円墳と予測されていた。そこで墳頂を中心にして東西方向と南北方向にトレンチを設定して墳丘と主体部の確認を図った。北トレンチと東トレンチでは、墳頂下で126~128号貯蔵穴を検出した。しかしながら、西トレンチと南トレンチでは大きな椎の根に阻まれてその全容は確認できなかった。

主体部は、土壙墓で126~128号貯蔵穴の上面に掘り込まれていた。平面形は、西側壁と南小口壁が木痕に遮られて明確ではないが、幅が70cm、長さが180cmの隅丸方形プランをなそう。床面は平坦で、深さが35cmの壙面は垂直に立ち上がる。壙面と床面は、軟弱な貯蔵穴の埋土を固めるためか黄褐色粘土粒や小塊を敷き詰めて強固にしていた。木蓋等の痕跡はなく、壙内から遺物は出土しなかった。

40号墳 SO-40 (Fig.74~77 PL. 15・20)

40号墳は、調査区を南北に延びる丘陵の尾根から北西に延びる小支丘の先端に立地する円墳である。確認調査時には、鉄剣の基部が出土して古墳の存在が予測されたが、繁茂する雑木に遮られて確認は出来なかった。雑木伐採後の現況測量では標高20.0mの等高線上で不明瞭ながら墳裾状の変換線が認められたが、後背面の墳裾は不明確であった。墳丘の盛土は消失していたが、後背の尾根上で幅が200~240cm、長さが650cm、深さが110cmの溝が検出された。古墳は、背面を直線的な短い溝で墳

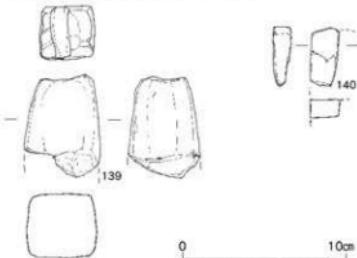


Fig.70 63号方形周溝墓出土遺物実測図 (1/3)

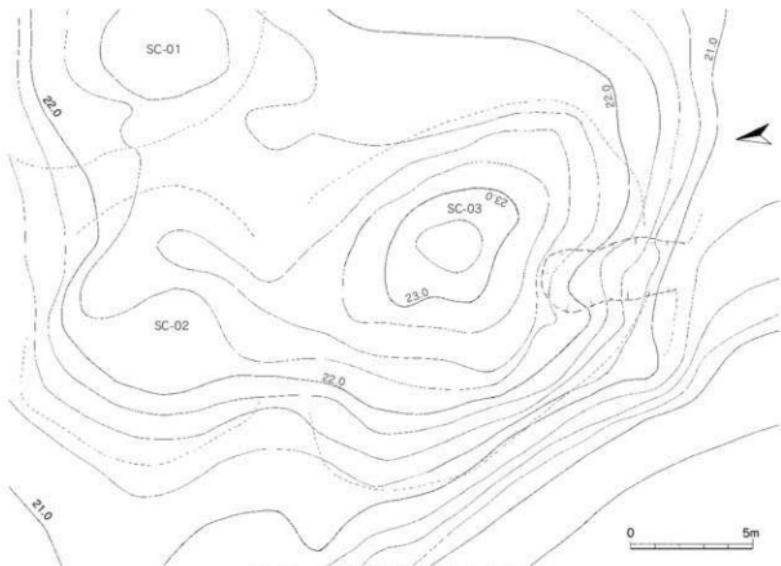


Fig.71 3号墳現況測量図 (1 / 200)

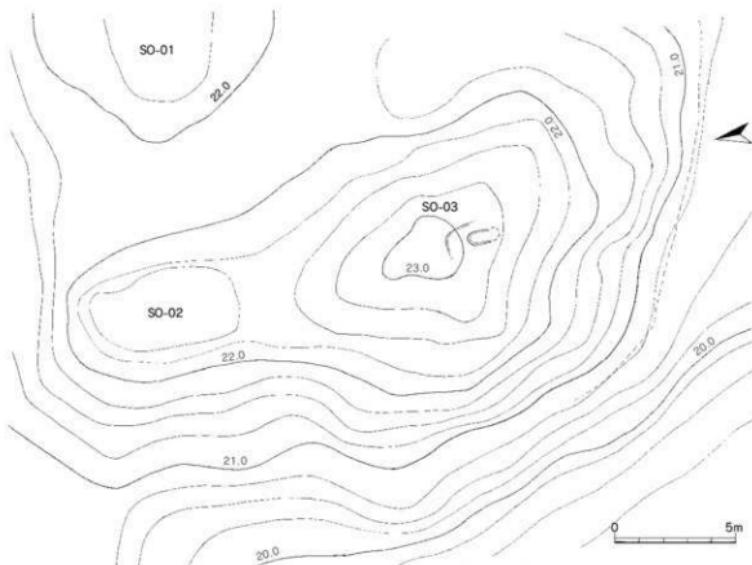


Fig.72 3号墳地山整形測量図 (1 / 200)

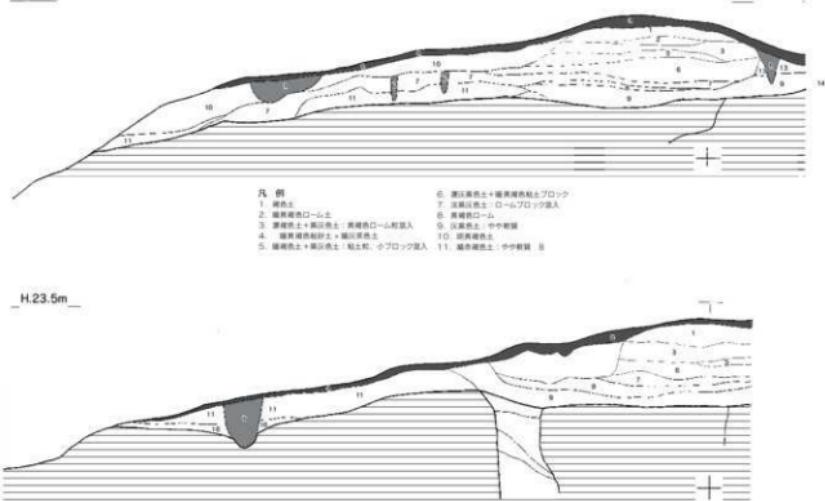


Fig.73 3号墳土層断面実測図 (1/60)

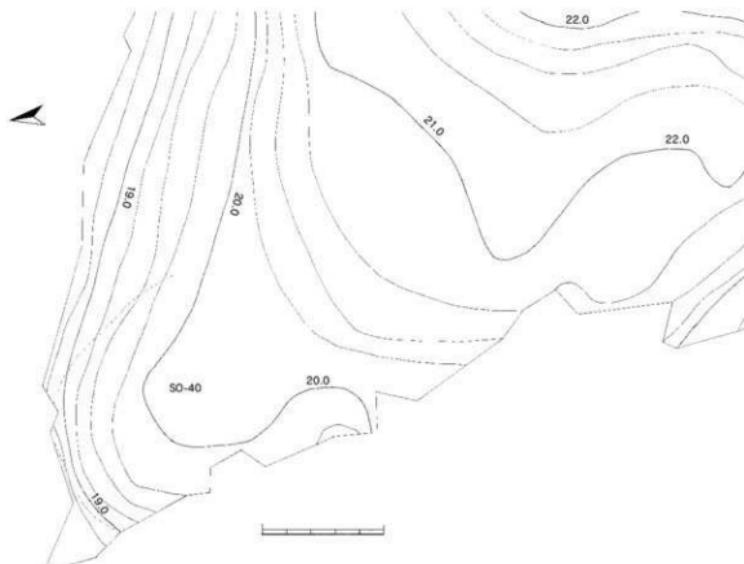


Fig.74 40号墳現況測量図 (1/200)

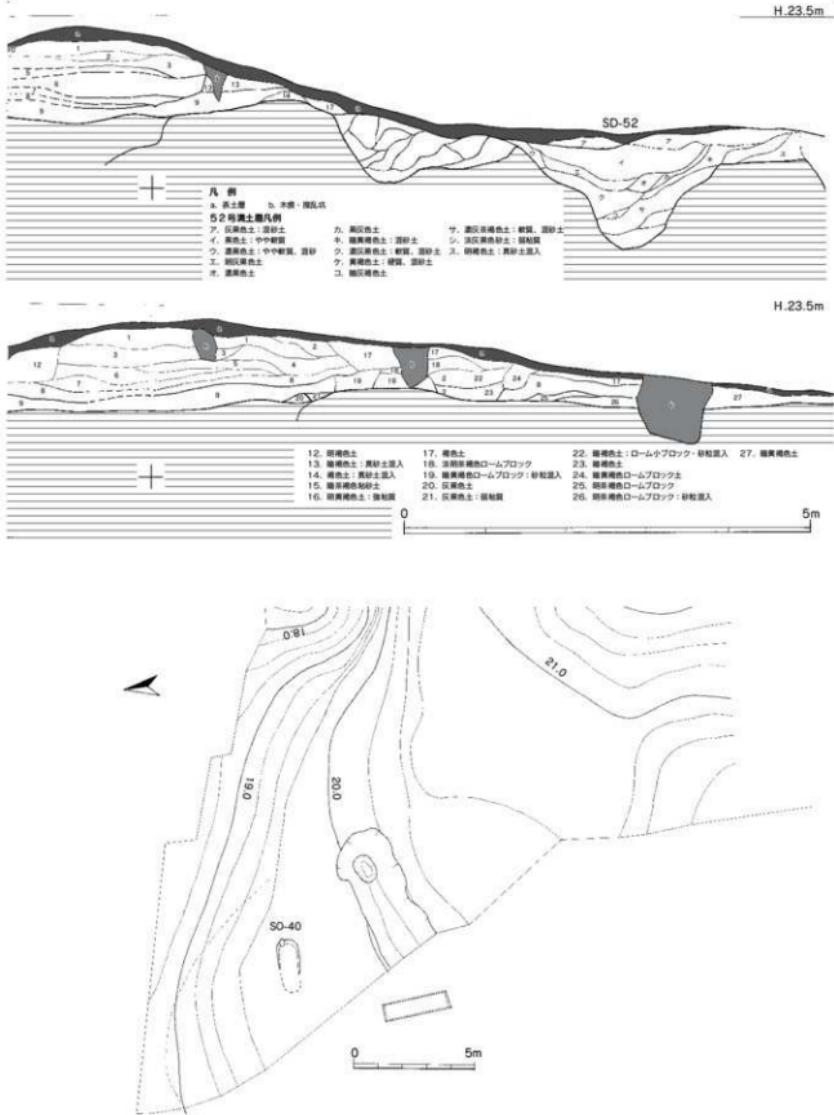


Fig.75 40号墳地山整形測量図 (1/200)

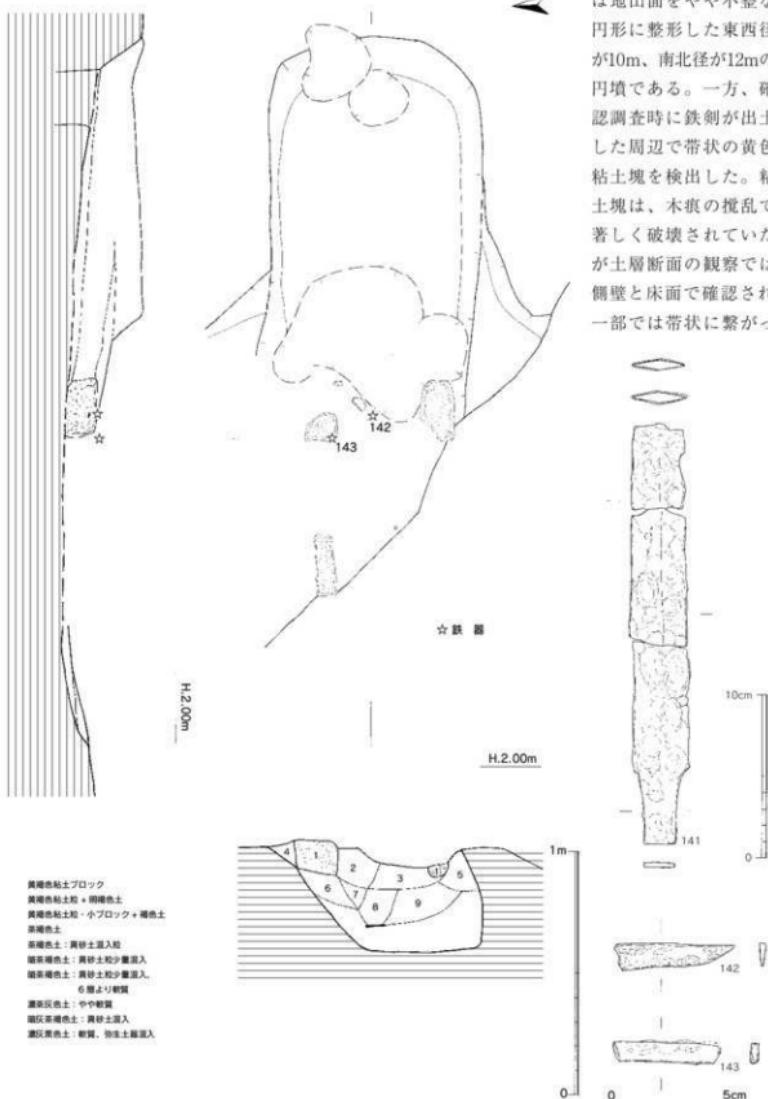
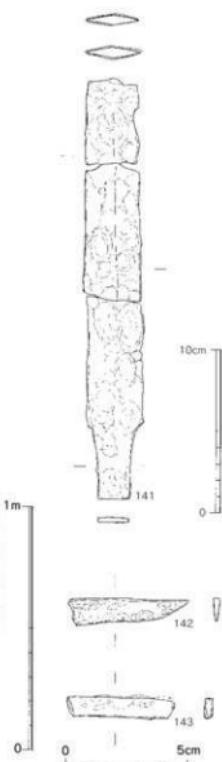


Fig.76 40号墳主体部実測図 (1/20)

丘と尾根を画し、墳裾は地山面をやや不整な円形に整形した東西径が10m、南北径が12mの円墳である。一方、確認調査時に鉄剣が出土した周辺で帶状の黄色粘土塊を検出した。粘土塊は、木痕の搅乱で著しく破壊されていたが土層断面の観察では側壁と床面で確認され、一部では帯状に繋がつ

Fig.77
40号墳出土遺物
実測図 (1/2.1/3)

ており、主体部が木棺墓の可能性がある。墓壙埋土内から刀子片2点とガラス玉1点が出土した。

141は、剣先を欠く現長が25.8cmの鉄劍片である。茎長は4.4cm、幅は1.87~2.53cm、厚さは0.33cm。関は0.2~0.5cm。刃部長は、20.6cm。鎬は明瞭で断面形は菱形をなす。鎬厚は0.61cm。142・143刀子片。142は、現長が4.7cmの刃部。背の稜は明瞭で刃部は鋭く、断面形は逆三角形をなす。

3) 土壙墓 (SR)

72号土壙墓 SR-72 (Fig.78-79 PL. 2-20)

72号土壙墓は、調査区南東端に位置する土壙墓で、73号土坑と80号住居の埋土上に掘り込まれている。平面形は、幅が67cm、長さが232cmの隅丸的な長方形プランを呈する。壁高が44cmの壁面はやや緩やかに立ち上がり、浅い舟底状をなす床面は、北小口から南小口へむかって緩やかに傾斜している。床面上の北東部寄りで金環一对が出土した。高所を頭位と仮定すると右肩口付近に副葬されたものである。主軸方位はN-27°-E。遺物は、金環一对と須恵器坏片、土師器小片が出土した。

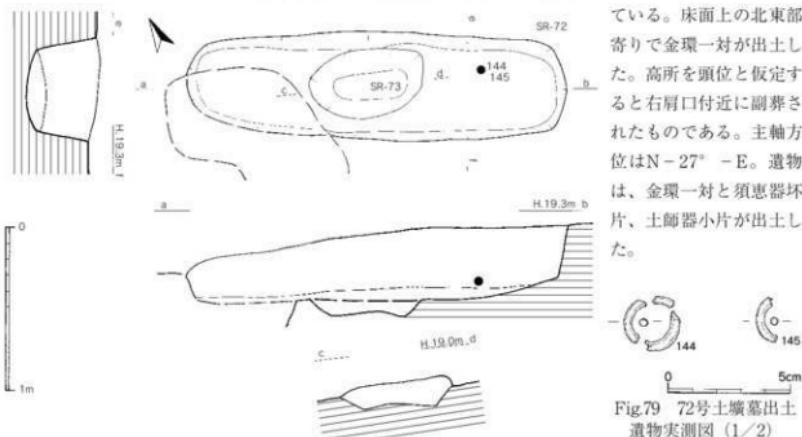


Fig.78 72号土壙墓・73号土坑実測図 (1/30)

Fig.79 72号土壙墓出土
遺物実測図 (1/2)

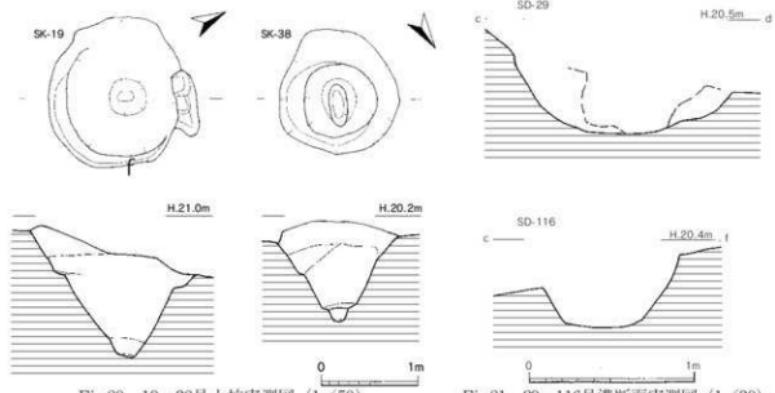


Fig.80 19・38号土坑実測図 (1/50)

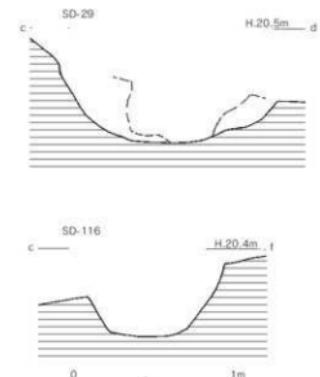


Fig.81 29・116号溝断面実測図 (1/30)

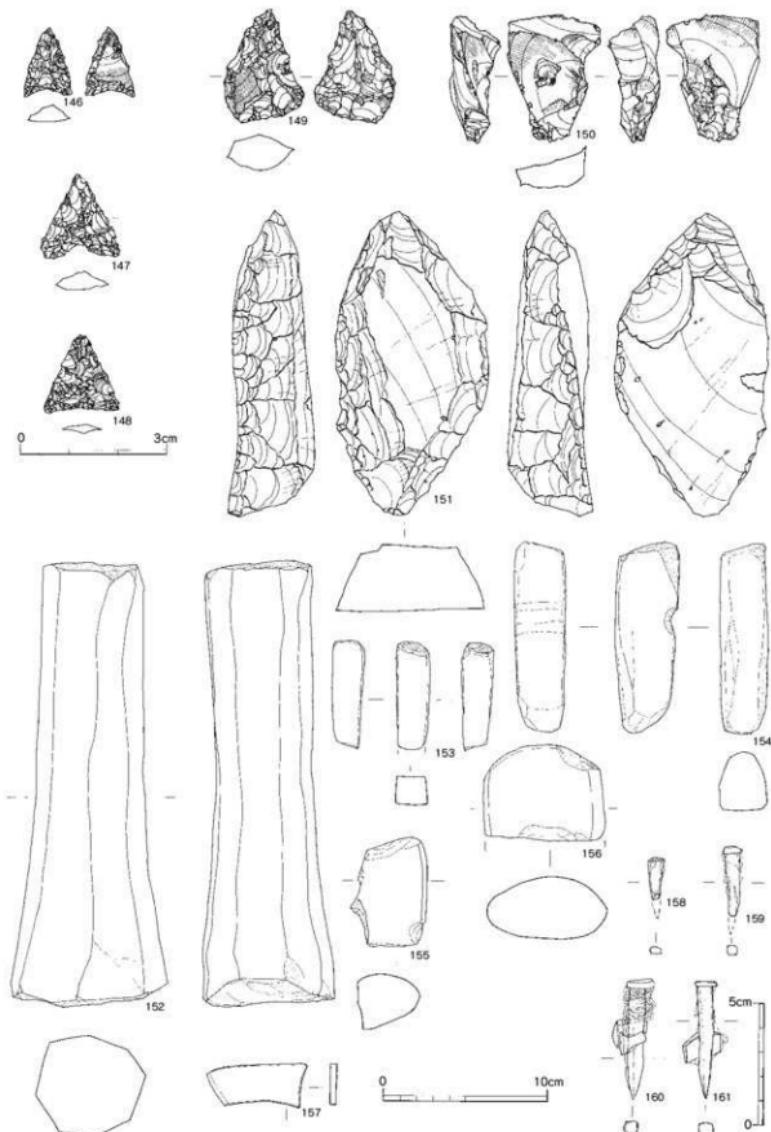


Fig.82 包含層出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/3)

144・145は金環である。いずれも復原径が2.3cm、内径は1.6cm、厚さは0.34～0.38cm。

4) 土坑 (SK)

19号土坑 SK-19 (Fig.80 PL.12)

19号土坑は、調査区北斜面のやや東寄りに位置し、南壁は20号方形周溝墓の主体部を切っている。平面形は、直径が140～152cmの円形プランをなす。深さは105cmで壁面は緩やかな掘り鉢状をなし、上縁から20cmの深さに東壁から南壁にのびる半月状の幅狭いフラット面を作る。坑底は、浅い凹レンズ状をなし、標高は19.55m。覆土は、茶～暗茶褐色土の單一層で、須恵器甕や土師器片が出土した。

3号土坑 SK-38 (Fig.80)

3号土坑は、調査区北斜面のやや西寄りにある大型の土坑で、35号土壙墓の西小口壁を切っている。平面形は、直径が250cmのやや不整な円形プランを呈する。壁面は、坑底から東壁が85cm、西壁が105cmの高さまで急峻に立ち上がり、屈曲線を形成して緩やかに上縁に至る。壁高は180cmで断面形は逆円錐形状をなす。坑底には、幅が20cm、長さが40cm、深さが15cmの楕円形の掘り込みがある。

5) 溝 (SD)

29号溝 SD-29 (Fig.6-81)

29号溝は、調査区の北西斜面に位置する全長が5.95mの東西筋の短い溝で、東端は20号方形周溝墓の西周溝を切り、西端は、40号墳の背面を画す溝に切られている。溝幅は、130～140cm。溝底までの深さは、南側が70cm、北側が35～40cmで斜面に制約された立地状況を示している。溝底は、凹レンズ状をなす。溝底上面から小型丸底甕が出土したが、劣化による細片化で図化できなかった。

116号溝 SD-116 (Fig.6-81)

116号溝は、調査区南西部の緩斜面に位置する南北筋の溝で、南東へ6mの距離には63号方形周溝墓の主体部が、北へ6mの距離には111号貯蔵穴がある。溝の延長は8.35m、溝幅は85～105cmの細長い溝である。壁面は、やや緩やかに立ち上がり、壁高は15～40cmで20cmほど東西の比高差がある。丘陵尾根から西に低くなる緩斜面に沿って開削された溝の制約を示している。溝底はフラットで、断面形は浅い逆台形をなす。覆土は、上層から暗茶褐色土、茶褐色土、黄褐色土。

4. 包含層出土の遺物 (Fig.82 PL.17-20)

146～149は、打製石鎌。146は長さが1.46cm、基部幅が1.0cm、重さは0.37g。147は、長さが1.78cm、基部幅が1.68cm、重さは0.68g。148は、長さが1.68cm、基部幅が1.52cm、重さは0.45g。149は、長さが2.4cm、基部幅が1.66cm、重さは2.49g。150は、長さが2.6cmの剥片。151は、長さが6.16cm、幅が3.2cm、厚さが1.65cm、重さが34.34gの安山岩の角錐状石器。152は、上縁幅が5.7cm、基部幅が8.1～9.5cm、長さが27.3cmの砥石。砥面は8面あり、断面形は歪な八面体をなす。砂岩質。153は、細粒砂岩質の手持ち型砥石。幅は1.64～1.87cmで断面形は方形。砥面は4面。研磨は細密で仕上げ砥か。154は、刃部を欠いた柱状片刃石斧。基部より6cm下に抉りが入る。粘板岩質堆積岩。155・156は、玄武岩の大型蛤刃石斧。156の基部幅は7.2cm。157は、凝灰岩の石庖丁片。158～157は、釘。断面形は方形で160には2本、161には1本の釘片が接着している。

5. おわりに

第11次調査では、弥生時代の堅穴住居6棟、貯蔵穴13基、甕棺墓13基、土壙墓20基とのほかに土坑や溝と古墳時代の初めの方形周溝墓2基、円墳2基を検出した。これは事前の予測を覆すもので、これほどの多様な遺構が検出されたことは驚愕に値する。本調査区で検出された遺構のうち集落域を構成する堅穴住居は、弥生中期後半と後期の2時期があり、前期後半に開削された貯蔵穴群とは大きな時間差がある。一方、墓域の一端を構成する土壙墓は、前期後半と後期とに二分されるが前期のものが圧倒的に多い。対して数的には少ないが、後期の土壙墓は、同時埋葬の標石墓や石蓋土壙墓ときわめ

て特徴的であり、いずれにも鉄斧や鎌、鎌、刀子などの鉄製品を副葬しており、前期の土壙墓群とは好対照である。一方、甕棺墓は数的には少ないが、時代的に大きな画期の前期後葉から中期初めに造墓されたものであり、若干の検討を加えてみたい。編年的には、K I c式（金海式）からk II a式（城越式）、k II b式（汲田式）期で、朝鮮製青銅器が副葬され始める時期にあたる。ここで本調査区の甕棺を観ると次第に大型化し、それに伴って壺から甕へと形の変化が明確に認められる。K I c式の25号甕棺墓は、肩の張った胴部から頸部が直口して立ち上がり、壺の形を明確に留めており、もっとも古い。23・24号甕棺墓は、壺の形を留めながらも肩の張りが弱く大型化し始め、27・46号甕棺墓になるとその傾向は一段と顕著で壺の形状は失われ甕に近くなる。22号甕棺墓がその典型的な組合せである。統いてK II a式期以降になると口縁部はL字からT字へと変化し、胴部も長胴化して頸部も直口ぎみに開き、最大径も高くなっていく。この形状の変化と同時に口縁部の形態も外反する内唇に粘土紐を貼り付けたものが、次第に水平にした内唇の上面に粘土紐を貼り付けて厚くなり、ひいてはL字状から逆L字、T字状へと変化していく。これを基にその分布状況を俯瞰すると、k II c式の一群は、調査区北西端の緩斜面上に立地する。これに対してk II a式の一群は、南北に延びる尾根が北へむかって傾斜していく上縁にまとまって拡がっている（Fig.83）。換言すれば、甕棺墓域は、前期後葉に南北の長い尾根線から北西方へ延びる細尾根の斜面上にI群の墓域を形成し、続く中期初めには尾根上の高所に墓域を移してII群が形成される。こうして観ると両者間には明らかに墓域の棲み分けが見え、これが造墓集団の相違かるいは単なる墓域の移動かは詳細に検討すべき事象である。同時に本調査区だけではなく、甕棺墓や土壙墓などが拡がる1・6・9次調査区や環壕などの集落域が拡がる2・3・5・8・9次調査区と合わせて南北に長い中位段丘上に展開する集落域とその構成員を埋葬した墳墓域を時空間の中で検討することが求められる。又、23・46号甕棺の内面には黒色顔料が全面に塗布されていた。副葬品を有する甕棺の多くに朱やベンガラを塗布しているのとは対照的であり、葬送に際して朱と黒および無色の間に何らかの儀礼的差異があった可能性が示唆される。

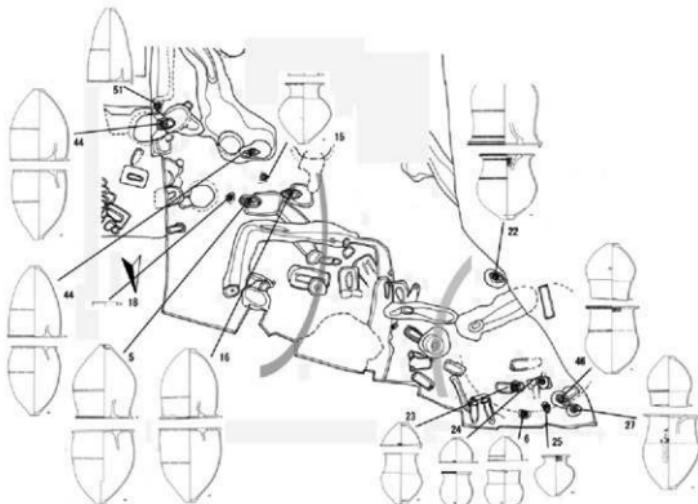


Fig.83 甕棺墓変遷図

P L A T E



1) 調査前全景（南から）



2) 調査区南東部住居群（南から）



3) 75・76・77・79・131号住居
(南から)



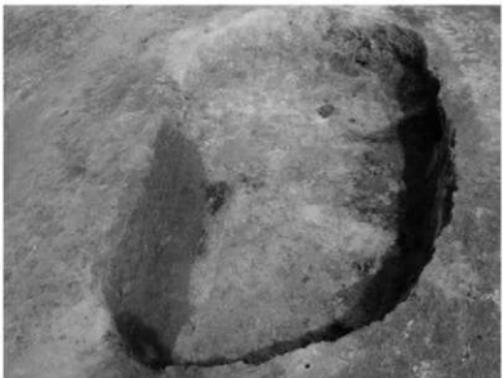
1) 80号住居・73号土塁墓（南から）



2) 7号貯蔵穴（北西から）



3) 111号貯蔵穴検出状況（南から）



1) 115号貯蔵穴（南から）



2) 115号貯蔵穴断面（西から）



3) 126～128号貯蔵穴（東から）



1) 5号甕棺墓（北から）



2) 6号甕棺墓（北西から）



3) 16号甕棺墓（南から）



1) 23号漆棺墓・37号土塚墓(北から)



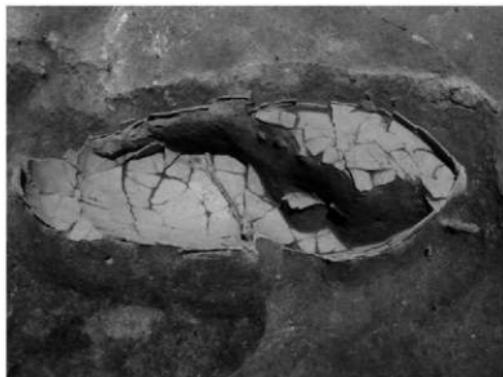
2) 24号漆棺墓(東から)



3) 25号漆棺墓(東から)



1) 27・46号壺棺墓（北から）



2) 42号壺棺墓（南から）



3) 44・51号壺棺墓（南東から）



1) 12号土壤墓(北から)



2) 17号土壤墓(北から)



3) 21号土壤墓(南西から)



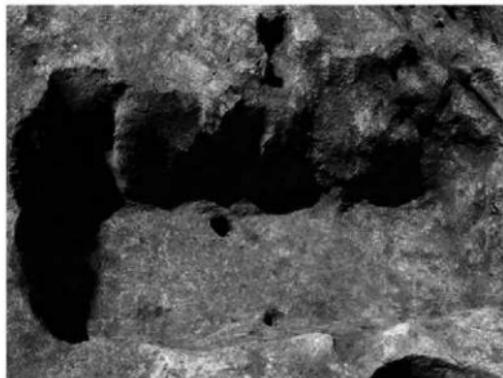
1) 33・34号土壤墓（北から）



2) 35号土壤墓（東から）



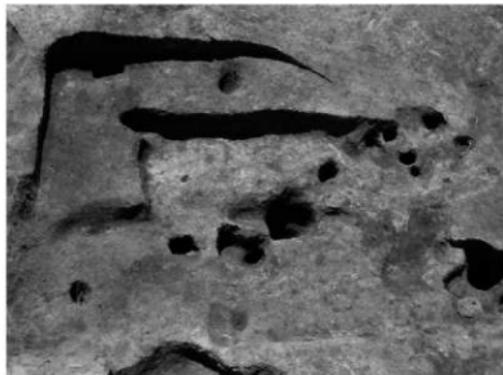
3) 35号土壤墓遺物出土状況（東から）



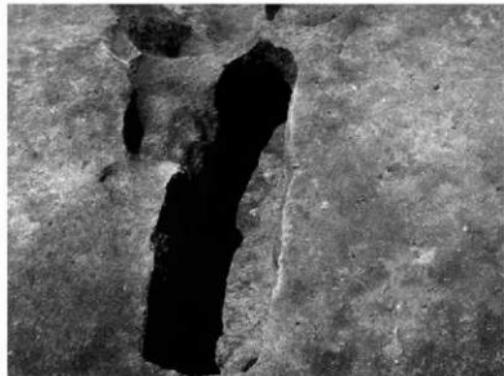
1) 36号土壤墓（北から）



2) 47・48号土壤墓（北から）



3) 49号土壤墓（東から）



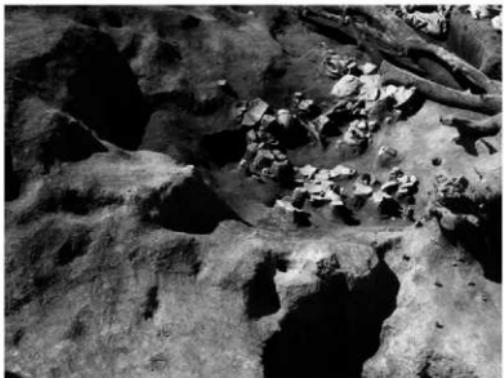
1) 55号土壤墓（南から）



2) 71号石蓋土壤墓（東から）



3) 71号土壤墓棺外副葬副葬遺物
出土状況（南から）



1) 9・10号土坑（東から）



2) 54号土坑（南から）



3) 78号土坑（東から）



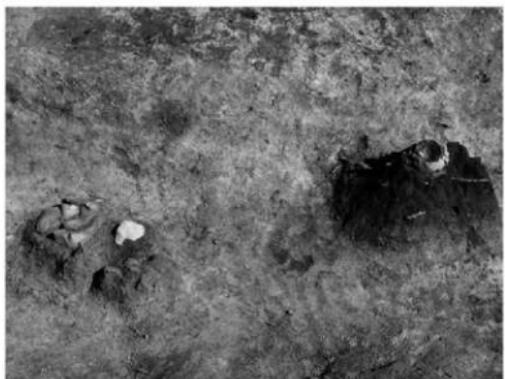
1) 20号方形周溝墓（北から）



2) 20号方形周溝墓主体部（南から）



3) 20号方形周溝墓主体部完掘状況
(北から)



1) 20号方形周溝墓南周溝遺物
出土状況（北から）



2) 63号方形周溝墓（南から）



3) 63号方形周溝墓主体部（東から）



1) 3号填調査前全景（北西から）



2) 3号填地山整形全景（西から）



3) 3号填主体部（東から）



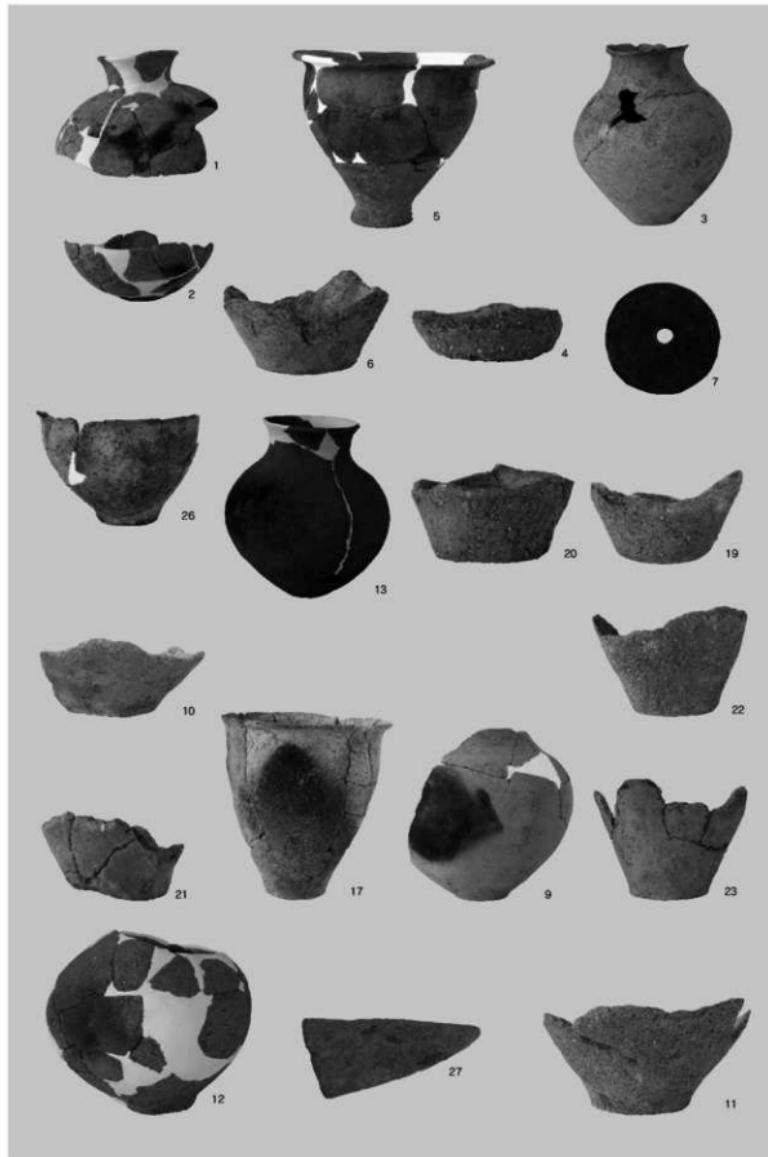
1) 40号填調査前全景 (東から)



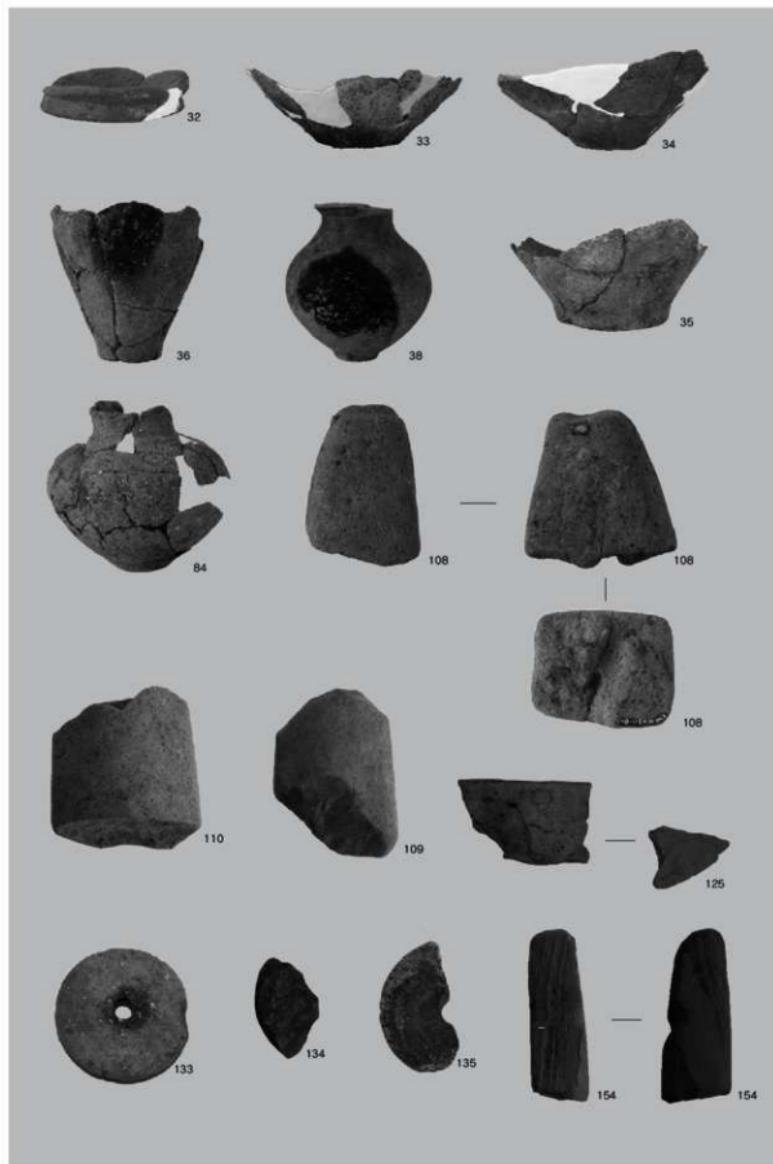
2) 40号填地山整形全景 (北から)



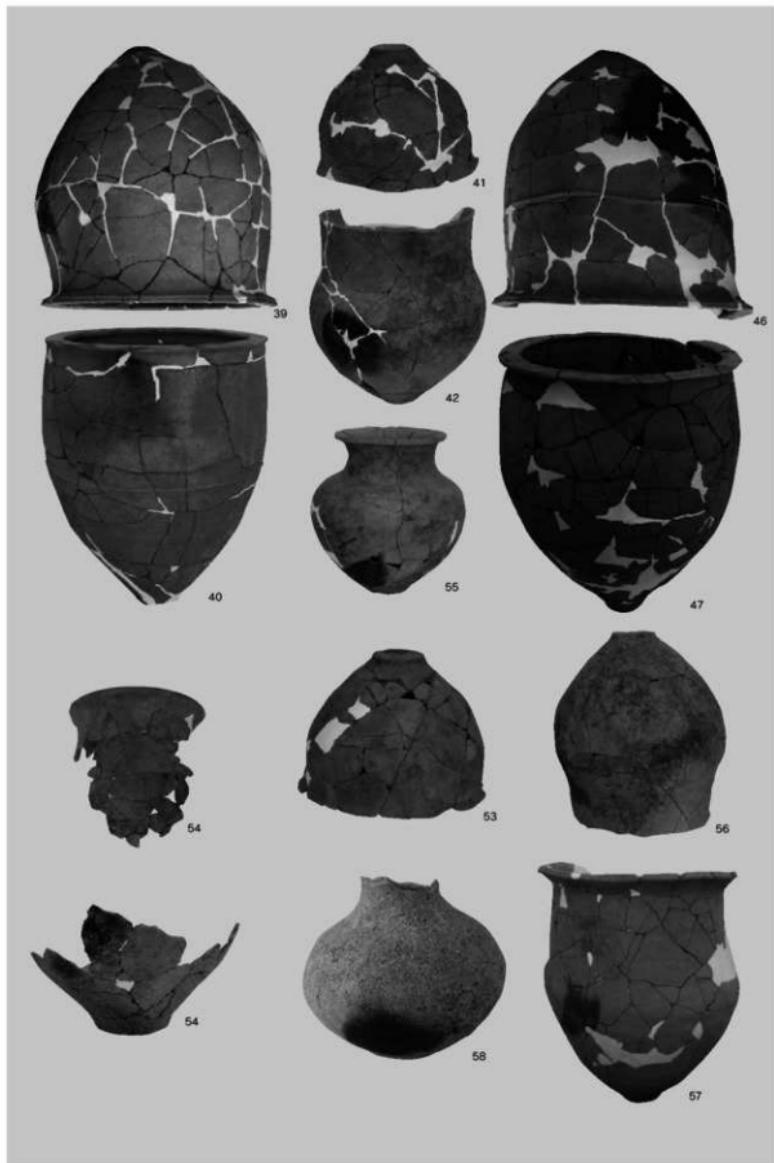
3) 40号填主体部 (南から)



出土遺物 1 (縮尺不同)



出土遺物 2 (縮尺不同)



出土遺物 3 (縮尺不同)



出土遗物 4 (缩尺不同)



出土遺物 5 (縮尺不同)

報告書抄録

ふりがな	やながばる 8						
書名	弥永原 8						
副書名	弥永原遺跡第11次調査の報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1324集						
編著者名	小林義彦						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号						
発行年月日	2017年3月25日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因	
井尻B遺跡 第42次調査	福岡市南区 日佐3丁目123-1号	40130	33° 32° 19°	133° 26° 24°	2014.12.15 ~ 2015.8.17	1.560	記録保存
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
弥永原遺跡	集落・ 墳墓	弥生時代～古墳 時代、中世	堅穴住居、貯 藏穴、甕棺墓、 土壙墓、土坑、 方形周溝墓、 円墳	弥生土器（甕、鉢、 器台、高坏）土 師器、鉄斧、鉄劍、 鉈、金環、鐸形 土製品			
要約	弥永原遺跡は、福岡平野の西縁を北流する那珂川の右岸には、鞍音山の小山塊から派生する中位段丘が幾つかの鞍部を形成しながら北にむかって細長く延びている。弥永原遺跡は、この段丘の最も北に位置しており、その基部には下白水大塚古墳や日拝塚古墳などの前方後圓墳がある。第11次調査区は、この弥永原遺跡の最北端にある。第11次調査では、弥生時代前期後半から後期の集落域と墳墓域および古墳時代初めから前期の円墳と後期の墓地のはかに古代から中世の遺構を検出した。まず、弥生時代の集落遺構は前期後半の貯藏穴13基と中期の堅穴住居4棟、後期の堅穴住居3棟のはかに溝と土壙などを検出した。このうち、堅穴住居は中期のものが円形、後期のものが方形のプランを呈する。墓域は、前期後半の土壙墓や木棺墓20基+aのはかに甕棺墓13基がある。このうち後期の石蓋土壙墓には鉄鏃が、並列する2基の標石墓には鉄斧や鉈・刀子・ガラス玉が副葬されていた。更に、古墳時代初め～前期には方形周溝墓2基と円墳2基がある。このうち北西端の尾根上に立地する42号墳は丘尾を切削した直徑が10m余の円墳で主体部の木棺墓内からは鉄劍先や刀子が出土した。俯瞰的に観ると弥生時代前期後半には丘陵の頂部に貯藏穴群が開削され、やや遅れて北側斜面に土壙墓や甕棺墓などの墳墓域が営まれる。その後中期後半から後期には、丘陵の南側緩斜面に堅穴住居群が並ぶ傾向が窺える。						

弥永原 8

- 弥永原遺跡第11次調査の報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告第1324集

2017年(平成29年)3月27日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株式会社 大里印刷センター